君だけには好かれたくなかった

　1

　いつからそうだったのかわからないが、俺がそれを確信したのは高校に入ってすぐのことだった。

あくまで、『確信』したのは、だ。

別にずば抜けて頭がいいわけではなかった俺だが、不審に思うことはたびたびあった。しかしそれでも『確信』にまで至らなかったのは、その普通では在り得ない事実を認められないことと認めたくないという想いが作用していたからだろう。

0

　少しでもその流れを乱すと、反感を買う改札をいつも通り上手にくぐり抜け、そこから少し離れたブロックの柱にもたれかかる。

　頭上に澄み渡る青い空に浮かぶ雲を眺めていると左から右へと足早に流れていく。

　同時に、視界をちらちらと邪魔する前髪を整え直す。

　こんな綺麗な空を見たのはいつぶりだろうか。いや、もはや見たこともないのかもしれない。

　そんな穏やかな景色に浮かんでいた俺だったが、急に視界が揺さぶられた。

　右肩に抱えていた俺のスクールバッグに人がぶつかったようだ。視線を下ろすと身をセットアップで整えたギラギラの男が手で俺を制しながら通り過ぎていく。

　おそらく「すみません」の一言を言いなれていないのだろう。

　俺を制するためのその行動も、中指につけられたごつごつの指輪を見せびらかしたかっただけなのだと卑屈めいた考えに行きつく俺の方がよっぽど嫌な人間なのかもしれない。

　柱にもたれかかっていたのにも関わらず、ぶつかられたことに少しだけ憤慨して鞄をかけなおした。

　いつもなら携帯を触りながらこの柱でいつもの人を待つのだが、今日は朝から見ていない。

　そのおかげでこの広い空に浮かぶことが出来たので、これからは携帯ばかり触るのはやめにしよう。

「八坂くん…だよね？」

　待ち詫びた目的の人のその人の声は、ふわふわと浮いていた俺の足を地につけた。

　声だけでわかるその人物の声は耳に届いていたが、視線だけは空から離せなかった。

　それはもう少しだけこの現実から離れたこの広い空に浮かんでいたいという気持ちと、少しでも顔を下げると、湧き上がるそれが零れ落ちる気がしたからだ。

　これが、俺が『好意を持たれると忘れられてしまう』ということを『確信』に至らせた過去の出来事だ。

2

　入学式の時は、サークル団体の勧誘で満足に歩くこともできなかったこのメインストリートだが、さすがに一週間も経つと本来の風景である満開の並木道となった。すれ違う人の中には舞い散った花びらを肩に載せて歩く人も見られる。

「なぁ、壮真今日の新歓行く？」

　薄茶色のコートをなびかせて隣を歩く勇気はそう言って、ポケットから携帯を取り出してスケジュールを開いた。端末を扱う手は大きくて、指も長く綺麗だ。元々バスケをしていた俺は他人の手指を見てしまう癖がある。特に大きい手、長い指には羨望の眼差しを隠し切れない。

別にのぞき見をしようとしたわけではないのだが、隠す気もない彼の端末のスケジュールには本当に存在するのかも不明なサークルから有名なサークルまで、様々なサークルの新歓の予定が記入されていた。それぞれが新歓の行事があるサークルの予定なのだろうが、同じ日に二つ以上書いてある日はどうするつもりなのだろうか。

「相変わらずだなぁ、いくつサークルはいるんだよ。まぁ勇気が行くんだったら俺も行こうかな、バイトも入れてないし」

「入らない入らない！新歓はただ飯に決まってるだろー。先輩たちも言ってたし、一人暮らしの俺にとってはまたとないチャンスなのだ」

「そういうものだとしても、限度があると思うぞ。」

「じゃあ、十八時に一号館の前の芝生に集合らしいから、そのちょっと前にメインストリートにあるATMに集合な！」

俺の話には返事しないで、じゃ、と言った後、学部が違う勇気はメインストリートを逸れて理学部の建物に入っていった。

勇気はコミュニケーション能力に長けていて、高校の時からの友人だが未だに彼のことを悪く言う人は見たことがない。

たまにこそこそと悪口を言われることもあるが、その内容は勇気の能力に対する嫉妬がほとんどなので、それは勇気が悪いではない。

ただ飯だと言いながら、ちゃんとATMでお金を引き出しておくというさりげない行動もその一端だろう。

それは友人だけではなく大人に対しても同じで、高校の教師陣からも信頼されていた。

自主性が重んじられる大学の授業も、できるだけ遅れないようにしているのだろう。小走りをする勇気のリュックは上下に揺さぶられていて、おそらく先週の勧誘で得ただろう色付きのザラ半紙が落ちそうになっている。

容姿端麗で中身もいい勇気だが整理整頓までは得意ではないのだが、それも高評価になってしまいそうなくらい他が完璧だ。

「チャック閉めろよー」

　俺の声が聞こえた勇気は小走りしていた足を止めて自分の股の付近を覗き込んでいる。そしてこっちを向いた勇気は睨みつけるような顔で俺を見る。

振り向くと同時に高校の時から元々明るい髪が揺れる。地毛だから何も悪いことはしていないのだが、あまりの明るさだから高校だったら校門で呼び止められるくらいだ。

しかしこれは彼の人望の厚さもあってか、高校の時も教師にとやかく言われている姿は少なくとも俺は見たことがない。

勘違いをしている勇気だが、俺は少し面白かったのでそのままにして歩き始めた。

　経済学部の俺は、もう少しメインストリートを進む必要がある。これ以上先には経済学部の第三学舎か体育館かグラウンドしかないため、ここを歩いている大半の人間は経済学部に所属している。

ちらほら見えるジャージ姿の学生はおそらく体育会系で朝練のために来ているのだろう。大半の学生が高校の部活を最後に引退するのに対し、大学で部活をするというのは俺からすると考えられないことで、もちろん俺は多数派の一人だ。

そして彼らの顔は揃いも揃って眠そうな顔をしている。大学で体育会に入るということは、少なくとも家は貧乏ではない学生が大半だと思っているので、バイトで生活費を稼いでいる俺は正直羨ましい。

もちろん俺は奨学金を借りていて、大学卒業後の十数年、未来の俺が今の俺のために働いて返してくれるのだろう。

新歓や入学式で見たことのある顔ぶれもちらほら発見したが、だからと言って声をかけて友達になれるほど俺はコミュニケーション能力には自信がないので、目が合って気まずくならないようにできる限り顔を俯けてそのまま歩いた。

道の端では、見上げられることが当然である桜が、自分に興味を示さずに歩くその存在に気付いてもらうかのように散っている。

　　＊＊＊

「おっすー、おまたせー」

「お疲れ様。そんなでかい紙袋持ってたっけ」

　ATM集合だったが、おそらくこれから新歓であろう先輩たちがATMでお金を下ろしていたので、ATMが見える少し離れた場所で待っていると勇気は俺を見つけて近寄ってきた。

「これねー授業で配られてさぁ、邪魔だから先に家においてこようかな」

「いいんじゃない？ついていくよ」

「うーん。いや、やっぱりいいや。時間もかつかつだし。別に酒飲むわけじゃないから忘れないだろ」

「さっきまでの懸念はどうした」

「まぁ、大丈夫だろ！行こうぜ！」

　これは偏見かもしれないが、理系というと不自然なほど理屈っぽくて、真面目で几帳面とかのイメージがあるかもしれないが、勇気はそれとはかけ離れている。

高校は同じ普通科だったが、俺の第一志望がここの大学だと話すと、俺は数学が得意だから理工学部を受けようかなぁとか言って受験勉強を始めたくらいだからまだ理系脳には染まっていないのかもしれない。

勇気は馬鹿に見えて天才派の人間なのだ。

もちろん俺は天才でも秀才でもなく、平凡派の人間だ。

まだ四月の始め、夕暮れもまだ少し早くこの時間になると風が冷たい。

辺りは少し暗くなってきたからか、ATMの側で光る時計台は、日中よりも存在感を増していた。

おそらくそれもサークルの新歓なのだろうか。その大きな存在の周りには人の集まりが出来ている。目印にしやすいからだろう。

「あの子すげぇ可愛い。あっちの新歓行こうぜ」

　黒いミニスカートを履いた小悪魔的な女の子の脚を指差しながらそんなことを言う勇気はおそらく冗談で言っているんだろうけど、別に俺は元々予定されている新歓にこだわる理由はなかったのでとりあえず肯定しておいた。

「いいんじゃない？あそこにするか？」

「いや、今日のとこは良くしてくれた先輩に呼んでもらったからさ。さすがにね」

「この短期間でよく、良くしてくれた先輩を手に入れたよな」

「最初は普通に勧誘されて、適当に連絡先交換しただけだったんだけど、学内でたまたまあった時に名前覚えてくれててさ、やっぱそういうのって後輩からするとうれしいじゃんか」

「あの人か、図書館前で勇気に声かけてた黒髪長髪のイケメンでギターケース持ってた人？」

「それそれ、壮真その時いたっけ」

俺は基本的に学内では勇気といることが多いが、勇気は既に新しくできた友達と行動しているのだろう。俺も友達を作らないといけないなと、少しだけ焦りを感じた。

「あ、別に音楽サークルじゃないぜ！普通のスポサーみたいなもんだから！」

　おそらく、少し顔に出ていた焦りを勇気は間違って受け取ったのだろう。不必要に宥められた俺は少し笑顔を取り戻して、

「分かってるよ、もうこんな時間だ、急ごう」

そう言って俺は、隣を歩いていた勇気よりも先に駆け出した。

肩にかけたトートバッグを背負い直す。足元を見ると、口紐が解けているのが見えた。

「おい待てって！近道はそっちじゃないぞ！」

立ち止まって勇気を振り返ると、その瞬間、笑みを我慢できていない勇気が通り過ぎたのが見えた。

「おっさきー」

「ちょっ、おい！」

はめられた俺だったが、自然と笑っていた。

お前と同じ大学でよかったよ、そんな恥ずかしい言葉は口には出さず、心の中に留めた。

「やっぱり友達だよなぁ」

　遠くで全て沈みそうになっている夕陽を見ながら、俺にとっては他人よりも深い意味の言葉をつぶやいて、解けていた口紐もそのままで勇気の後を追った。

　相変わらず、リュックからはザラ半紙が飛び出している。

「勇気くんきてくれたんだ！あ、隣の子は前も一緒にいた子だよね？」

「凪原先輩！お疲れ様です！こいつ壮真っていうんですけど、高校からの同級生なんです！今日は誘っていただいてありがとうございます！」

　走ることをやめていた俺たちを迎えたのは、顔だけは俺も知っている人物で、凪原先輩というらしい。

　長髪は後ろで結っていて、黒いギターケースを背負っている。

　黒で整えられた服装とは対照的な白い肌が映えている。

「八坂壮真です！勇気の友達です、よろしくお願いします！」

　勇気の知り合いということもあっていつもよりはちょっと頑張って挨拶をした。コミュ力がないと思われていないかと少し気にしたが、一方で先輩はそんな素振りを見せず、

「二人とも真面目過ぎるよ！壮真くんね、よろしく。連絡先は勇気にもらっといてよ、よかったら音楽サークルの方も待ってるよ」

背負っていたギターケースを手に持って俺に見せつけながら、満面の笑みを浮かべて先輩は言った。

　顔は女性のように整っていて、だからと言って女々しさは微塵も感じられない。色白の綺麗な肌で整えられた黒色の長髪。

　長髪の男性に対しては好みが分かれる人間が多いが、先輩は客観的に見て男前だ。

　ギターケースを持つ指は長く白いが、指先の皮は白くなっていて、ごつごつとしているようなのがちらっと見える。

あまり詳しくはないが、弦を抑えるために存在する手のようだ。

「音楽はできないですけど、先輩の音楽は聴いてみたいです！」

「お、乗り気じゃーん。是非見に来てくれよ。大学のイベントだと学園祭くらいだからなぁ。よかったら駅前のライブハウスでたまに演奏してるからそれ来てくれよ！」

「俺も俺も！興味あります！」

「二人で見に来いよ！んで二人とも入会だな」

　先輩はししっと笑っている。

　大学に入って初めてできた先輩との関りは想像以上に俺を揚々とした。

すると、おそらく幹事だろう女性に呼ばれて先輩はそっちに向かった。

「いい先輩すぎだろ、絶対人望あるわ」

「ね。こんな人数いるけど多分次会っても壮真の名前絶対覚えてるぞ」

俺たちから離れる先輩の背中を見ながら俺たちはひそひそといい意味の陰口を話し合った。

「それ忘れられてたらショックだから、期待しないでおくわ」

「あれだけ話してて忘れるのか？」

「俺たちからしたら唯一無二の先輩だけど、先輩からしたら有象無象なんだよ」

「でも、あんまり話していない俺でも覚えてくれてたからなぁ」

　「お前は有象無象の一つではないんだよ」とは言わず、特に返事はしなかった。別に嫉妬の気持ちなどは一切なかったし、それが原因で言葉にしなかったわけではないのだが、なぜかこれ以上は口に出すのは躊躇った。

　十八時を回ると、合計二十人程度の新入生が集まったこの団体は先輩に連れられて正門を出た。正門を出ると目の前は大きな商店街で少し下り坂になっている。

　牛丼チェーン店、洒落たカフェ、ラーメン屋、大学生をターゲットにした店が並んでいる。ほとんど沈み切っている太陽とは反対の方に歩いている俺たちを軒先の明かりが俺たちを迎える。

少し歩いた、木製の看板が迎える近くの定食屋さんに案内された俺たちは、古き良き暖簾をかき分けて一人ずつ入っていく。全員入れるのかと不安に感じたが、そんなことは杞憂で、案内された二階は宴会席になっていて全員が余裕で入れるくらいだった。

　階段を上がり切った場所で靴を脱いだあと、端っこに座りたがってきょろきょろする俺を見て、勇気は俺よりも先に一番端の席に座った。少し疲れていたのか、地面に如かれた座布団に自分の体重を預けている。

「おまえ、凪原先輩とかに近いところの方がいいんじゃねぇの、俺のことは気にすんなよ。俺は俺でちゃっかりと友達作ってやるから」

「別にわざわざ隣に座らなくてもしゃべる時間はあるだろー。それと多分壮真といるのが一番楽しいからいいや」

　こういうことをさらっと言っちゃう人間だ。凪原先輩も人望はあるのだろうが、こいつはそれ以上なのかもしれない。少なくとも俺からは。

　女の子が聞いたらイチコロのようなセリフを軽く発する勇気だが、残念ながら俺が好きなのは女の子なので心拍が上がったりはしなかった。

　比較的団体の中では先に席についた俺たちはそんなことを話していると、他の新入生たちがぞろぞろと階段を上がってくる。

今上がって来た人たちは少しずつ減っていく空席を探している。そしてこういう状況で知らない人の隣に座るということは、多少コミュ力がないとなかなか難しいだろう。俺でもおそらくたじろいでしまう。

実際、どんどんと埋まっていく席の一方で、入り口では左見右見して行くあてに困っている女の子が何人かいた。

　そんな子に対して、勇気は「ここ空いてますよー！」と声をかけていた。本当にかっこいいなこいつ、男じゃなかったら好きになっていない自信はない。なんせこいつ、見た目も整っている。

ちょっと心拍は上がったかもしれないと思ったが、相変わらずだった。

　窮地を救われた女の子は、その救世主にお礼を言いながら顔を赤らめている。わかるわかる。

　用意されている数個のピッチャーから俺はウーロン茶を選んで目の前にある自分のグラスに注ごうとしたが、さすがに自分だけだと気まずいので、先に勇気のグラスにコーラを注いだ。

「ありがとーわかってるねぇ」

　当たり前だろ、とは言わずに注ぎ切った後、俺は自分のグラスにそのままコーラを注いだ。勇気のグラスに注いでると、無性に炭酸が飲みたくなった。

そういえば、昼に飲んだ水以来何飲んでいない。

　俺の行動を皮切りに他のテーブルでもドリンクの注ぎ合いが始まった。いつの間にか俺は同じテーブル内でコーラを注ぐ担当になっていて、手渡されたグラスに順番に注いでいく。注ぎ終わってグラスを手渡すと、見ず知らずの人に飲み物を入れてもらったことに対する不自然なほど気持ちのこもった「ありがとう！」の台詞に悪い気はしなかったが、友達を作ろうと必死なのだろうという卑屈な考えに至ってしまった。

俺たちのテーブルに空いたグラスがなくなったころには、他のテーブルも同様で、グラスを掲げている男子もいた。

「よし！全員座ったか！毎度のことだが、新歓は飲みなしだ！だからみんな酔ったふりをしてくれ！」

　音頭を取り始めたのは凪原先輩だった。まぁ、そうだろう。

俺が見かけた時は常に持っていたギターケースはなく、代わりに一気飲みをせんとばかりにグラスを掲げている。もちろん中身はコーラだ。

　そんな先輩はさっきまで来ていた薄手のトレンチコートを脱いでいて、半袖の先からは女性のような色白のきれいな腕が伸びている。しなやかに伸びた腕には無駄のないきれいな筋肉がついている。いわゆる細マッチョというやつだ。

「かんぱーい！」

『かんぱーい！』

先輩の音頭ともに、続いて、サークルの先輩たちは大きく叫び、新入生は恥じらいながら控えめに乾杯をした。

この分け方をすると、隣の勇気はサークルの先輩に分類されてしまうのだろうが、この陽キャは対象外だ。そんな勇気は先ほどの女の子と会話をしている。

　ちなみに勇気とは反対側に座るのは見るからに控えめな男で、学部はどこかとか当たり障りない会話をした。多分仲良くはならないだろう。

　一つのテーブルに八人くらいが座っているが、別にみんなで会話するではなく各々の仲間内で話をしていた。

季節外れを否定するかのように、ぐつぐつと煮立つ鍋と対峙するため、俺は羽織っていたジャケットを脱いだ。

ようやく一段落着いた俺は手元に置かれた割りばしを手に取る。綺麗に割れなかった部分が指に引っかかって痛い。

テーブルに用意されている二つの鍋はそれぞれ違う種類の鍋だが、わざわざ別の場所に移動するほどでもなかったので目の前にある赤色の鍋に手を付ける。

　俺は別に孤立するでもなく、大騒ぎするでもなく、その場を楽しんでいた。

途中、トイレに向かった勇気が凪原先輩に引き留められて話をしていた。やはり先輩にとっても勇気は特別なんだろう。

　徐々に打ち解けていく周りに比べ、俺は少し遅れていることに気付いたが、これ以上頑張る気にもなれなかった。器によそわれたもの食べ尽くし、再度鍋に手をかけて器に盛り、口に入れた。火をつけたままだったせいで、煮詰まって辛い。が、これが割といい。

グラスのコーラを飲み干し、ピッチャーのコーラをグラスに注いで口に含んだが、熱気に負けて結露が生じているそれは少々物足りなかった。

「どう、楽しんでる？」

そう言って声をかけてきたのは、グレージュのショートカットが特徴的なの女性だった。目は大きく、涙袋はぷっくらとしている。控えめな化粧がとても大人っぽさを醸し出している。

「はい！楽しんでます！今日はありがとうございます！」

　先輩の前だからと、ちょっと強がって見せた俺は無理をして笑顔を作った。

「勇気くんの友達だよね？私一回生だよ、そんなに老けて見えるかなぁー」

そう言って彼女はわざとらしく頬に手を当てて、目を小さくした笑顔でこちらを見た。

「あ、そうなんだ、勇気の友達？」

「急にテンション変わりすぎ、もうちょっと頑張ってよ。違うよ、あの子有名だからさ、イケメンで話しやすいって」

「ってことは君理学部？」

「いや、経済学部、評判で聞いたの」

「嘘だろ、俺も経済だよ」

「ごめん見たことない」

「俺もだよ」

「ひどい」

「ほんのちょっと前の俺の気持ちだな」

「あっははー」

　参ったと言わんばかりに手を頭にあてているが、別に悪びれている様子はない。

「勇気の連絡先ならやるよ、あいつは別に怒らないし」

「いらないよ、もし欲しくても別に直接聞くから。代わりに君のちょうだいよ」

「なんだよ急に、ナンパか？」

「んーナンパではないんだけど、多分否定しても周りから見るとナンパなんだろうからナンパでいいよ」

「初めてナンパされた」

「喜ばないでよ、ナンパじゃないって言ってるのに」

「どっちだよ」

「どっちでもいいよ、くれないの？」

「別にいいけど、俺連絡しないし返事も返さないぞ？」

「過去問回ってきても？」

「八坂壮真ですよろしくお願いします。」

　棒読みで話す調子のいい俺を見て、彼女は片手で床をたたきながら腹を抱えて笑っている。一通り笑い終わったところで彼女は少しうるっとした目を擦りながら俺を見た。

「壮真くんか、君ほんと面白すぎ、私は勇気くんより好みだけどなぁ」

いきなり刺された嬉しい言葉に、久しぶりに胸が躍ったのを感じた。それと同時に落胆が込みあげてくる。

「俺、人好きにならないんだよ、ごめんね」

「うそー大学生なんて、盲目になっちゃうもんでしょー」

「そんな言いまわしは初めて聞いた」

「恋は盲目ってね、知らない？」

　彼女の質問には答えず、俺は手元のぬるいコーラを飲み干した。

　別に俺は人を好きにならないわけではない。ただの普通の大学生だ。可愛い子には好かれたい。好かれるということがどういうことか、自信を持って分かっているわけではないが、勇気の隣にいたからか他人の好意についてはなんとなくわかる。

来年から小学生になる妹が駆け寄ってきながら俺に言う『好き』とは少し違うことも分かっている。

「女って嫌いなんだよね」

　これは嘘だ。だが、俺は自分の『好意を持たれると忘れられる』という不可解な特性を把握してから、女の子に対してはこう言うようになった。

最初は罪悪感に苛まれたが、それよりも人に忘れられるということに対する忍耐がなかった俺はいつからかこう言うようになっていた。

　初めて告白をした女の子の返事を聞くまでもなく、次の日に忘れられた。

クラスが同じで、席が隣で仲の良かった子に忘れられた。

バスケ部の後輩のマネージャーに忘れられた。

　例外を求めて行動したことがあったが、どれも結論は『好きになられたら忘れられる』

ということ真実を突きつけるだけで、極めつけはあの子の記憶だ。

「えー絶対嘘だ、男の子って女の子好きでしょ」

　彼女の嘘だという言葉に一瞬肩がこわばったが、別に俺の本心に気付かれていなかったようで安心した。

確かにこの子は可愛いし、少し話しただけだが楽しい。俺が普通だったらすぐに連絡先を交換して今度遊ぼうかなんて言えていただろうか。

　だが、オレはそんなことをしても無駄なのだ。

「嘘じゃないよ、俺いつも女の子にはこういうんだ。だから彼女はもちろん女友達もいないよ。」

「さっきは、『女』って言ってたのに、今は『女の子』って言ったね」

「それが？」

「私、女のこと『女』って呼ぶ奴嫌いなんだ、なんか物みたいに扱われてるみたいで。君の『女』っていうのにはなんかこう、本心じゃない感じがした。現に今『女の子』って言ってたし」

　彼女の観察眼というか観察耳というか、とにかくそれは鋭すぎる。実際俺も『女』って呼ぶのは少し気が引ける。だからわざと嫌われるためにこの言葉を選んでいた。

それをこうもあっさり当てられると返す言葉もない。

図星で焦る俺とは対照的に、言い終わった彼女はそれ以上追求する気もなく、持ってきていたグラスの中身を一口飲んでぷはーなんて言ってる。

グラスからは氷ならす綺麗な音が聞こえる。中身はまだ冷たいのだろう、うらやましい。

「そろそろ時間だから！みんな店出る準備してくれー！時間ないけど、ぜひみんな入ってくれよ！じゃあ解散で！」

　話し込んでいる間にいつの間にか時間がせまっていたのか、凪原先輩が簡潔に締めていた。

話すことをやめた新入生が一人一人と店を出る準備をしている中、彼女はまだ動こうとはしていなかった。

「連絡先ちょうだい」

「過去問は俺もほしいからな」

　俺は画面を付けてQRコードを見せる。それを彼女は自分の端末で読み取った。

「素直じゃないなぁ、はい、完了！また連絡するね」

「俺が連絡するのはおそらく夏休みまえだな」

「テストの時しかしてこないの？ひどいなー」

そう言って彼女はまるで任務を終えたかのように自分の席に戻っていった。

そういえば、俺あの子の名前も知らないな。

そんな俺の心を悟ったかのように、彼女はメッセージで『咲本那奈だよ！よろしくね、壮真くん！』というメッセージとカエルが偉そうな顔でよろしくと言っているスタンプが送られてきた。

「カエル…」

　そう呟きながら、彼女を見ると笑顔でこっちを見て手を振っていた。つられて俺も手を振り返し、俺よりも先に店を出ていく彼女を見送った。

「可愛いじゃん、彼女？」

「俺に彼女ができないのはお前が一番よく知ってるだろ」

「いやーもしかしたら、あの子は例外かもしれないじゃんか。物は試しだ」

　おそらく空気を読んでわざと席に戻ってこなかった勇気が戻ってきて言った。俺たちはテーブルの上を少しだけ整理して店を出る準備をした。

勇気は大きい紙袋に入った荷物を忘れずに持っている。

外に出た俺たちは、店で会計を済ませる先輩たちを待っていた。

「ご馳走になったんだからさ、缶コーヒーでも買いに行こうぜ」

　俺の返事を聞くまでもなく、勇気は向かいのコンビニに歩みを進めていたので俺もついていった。十二人だったよ、という勇気に従い、適当に缶コーヒーをかごの中に入れた。人数が間違っていたら、とか、コーヒー飲めない人がいるかも、とかでジュースやお茶を何本か余分に入れた俺たちは、会計を済ませてコンビニを出た。

「ごめん壮真、多く出してもらっちゃって」

「お前は一人暮らしなんだから節約してろ」

「かっこいい…。だからみんな忘れちゃうんだろうな」

「モテることの遠まわしでその表現を使うな」

　勇気だけは俺のこの現象を知っている。いや、勇気だけが信じてくれた、と言ったほうが正しいか。

部活の友達にも話したことがあったが、だれもまともに聞いてくれなかった。俺も逆の立場だったらそうそう信じれた話しではないので怒りは感じなかったが、自分の話を聞いてくれないというのはやはり寂しかった。

　ごめん！と言いながら手を合わせて俺に向けている勇気の顔は笑っていた。

　店の前ではちょうど店から先輩たちが出てきたので俺たちは駆け寄っていった。

「ごちそうさまでした！」

「ごちそうさまでした！楽しかったです」

　最初にそう言った勇気に続けて俺も感謝の意を伝えた。

「えー！わざわざ待っててくれたの！ごめんねぇ」

　そう言ったのは凪原先輩ではなく、さらっとした茶髪の長い髪で赤いリップが目立つ女性だった。あまりにも大人っぽいその見た目に、少し俺はたじろいだ。

口元のほくろが特徴的なその女性はそう言いながら、俺たちにハグを求めて近づいてきた。悪い気がしなかった俺たちは素直にそれに応えた。

緊張してがちがちの俺とは違い、勇気は慣れた素振りでそれに応えている。根本が違い過ぎる。

初めての感覚に戸惑っていたが、単純に嬉しかった。

逆にこれで明日覚えていられたらちょっとショックを受けるかもしれない。

「ありがとうな！勇気と壮真！お前たちには期待してるぞ」

　そう言い放つ凪原先輩の言葉聞いて、俺たちは既に入会を決めたのだろう。

「これ、壮真からなんですけど、良かったら飲んでください！」

「いや、二人で買ったんで、ぜひどうぞ」

　先輩からは大袈裟のように歓声が上がった。大学の前の通りを行き交う人たちもお酒が入っているのか慣れた光景なのか、特に俺たちのことを異質な存在としてみるような眼をしてはいなかった。

遠慮する様子もなく袋から取っていく先輩たちは本当に喜んでいるように見えて嬉しかった。

俺たちはまるでなにか特別なことをした気になって、顔を合わせて笑った。

2

改札を抜け、俺はメインストリート一人で歩いていた。

入学以来、三号館につながる近道を見つけるために色々な道を試行錯誤したが、結局この道が一番近いことを学んだ。

時刻は八時半、桜は既に散り尽くしており、その代わりに肌を焼くような光が降り注いでいた。

「おはよー壮真」

「なんでこんな暑いところで待ってるんだよ。もっと冷房の効いたところで待てばいいのに」

「そう思うならもっと早く来て私を待たせないでよ。まぁ私暑さには強いからね」

　三号館の入口で待っていた彼女はそういいながらカバンから取り出したハンカチで額の汗を拭いていた。短い前髪がところどころ汗で額にくっついている。

　夏に強いと言っても別に汗をかかないというわけではないらしい。

　ちゃんとした人間で良かった。この暑さを耐えられる人間などいない。

入学当初の新歓以来、学部が同じだった俺たちは授業を一緒に受けるようになった。

最初は相手にしていなかったが、毎日のように来る連絡を素っ気なく返し続けることができるほど俺は非常な人間ではなかったらしい。別に女の子から連絡が来ること自体が嫌いなわけではない、当たり前だ。

俺の特性上彼女とは深い中にならないほうがいいと思っていたが、新歓から二週間程度経ったところで俺は根競べに負け、こういう状況になった。

もちろん集合時間なども決めていないから、ただ先に彼女が待っているだけだ。

さすがの俺も待っていると分かっている女の子を長々と待たせることはできないと思っている間に、いつの間にか友達という関係になっていた。

もしかしたら俺は自分が思っているよりもいい人間なのかもしれない。

そう気づくことが出来たのは彼女のおかげなのだが。

既に履修登録は終えていたが、春学期でもいくつか同じ授業があった。この経済学の授業もその一つだ。まぁこれは必修の授業だから、同じクラスになったというだけだが。

　九時から始まるにしては早めに到着した俺たちは、広い大講義室の左後ろの席についた。

この席は、席に設置された折りたたみ式の簡易テーブルしかないのだが、両サイドの全面窓から陽は当たらず、真夏にもかかわらず極寒の風が吹き出る冷房が直接当たる場所ではないので、ここが一番快適だった。

「あっつーい、早く夏休みこないかなぁ」

「さっきまで暑さに強いって言ってなかったっけ」

「強いけど嫌い」

「俺は弱いし嫌い」

「暑さに弱い人って結局寒さにも弱いんだよ」

「秋がいいよな、やっぱり」

高校の時までの女友達は、俺が好意を寄せているいないに関わらず、ある日を境に関わらなくなった。それ以降、自分から積極的に女友達を作ることはしなくなった。男女に友情は成立しないという言葉があるが、実際にそれを体感できたのは俺だけだろう。

　彼女も例外ではない、もしかしたら明日には忘れられているかもしれないという不安は常にある。それくらいには俺たちは仲良くなっていた。

しかしその中でも俺は自分を守るため、あまり踏み込み過ぎないようにしている。

万が一のために。

俺はもちろん彼女のことは友達以上には考えていない。

今のところ彼女も、俺のことを友達以上には思っていないようだ。自意識過剰の可能性もあるが、人生思いがけないことがあるということは俺が身に染みて感じている。

　講義室内は冷房が効いているが、まだまだ体は火照っている。

隣では、三か月くらいは使っているはずなのに綺麗目なノートをぱたぱたと扇いでいる。

「じゃーん、けーん……ぽん！」

　おもむろに始まった勝負だが、そのゆっくりとした掛け声にあわせるように俺は受けて立った。

「はい、勝ちー私アイスコーヒーとチョコのアイスね、チョコだったらなんでもいいよ」

「くそっ」

　突然始まるじゃんけんはおそらく全国共通で、大半の人間は内容も聞かずとりあえず相手するだろう。

　別に俺たちの恒例のイベントではなくて、初めてだったが体が反射的にパーを出していた。人間は反射でグーを出す人間がわずかながら多いらしい。

　もちろん俺はそんなことを深く考えて出したわけではないが、彼女はもっと深く考えていなかったのだろう少数派のチョキを出していた。

　両手をチョキにして鼻につく小躍りを俺に見せつけてくる。心なしか顔も腹が立つ。

　敗者に人権はない。

授業を目前にして必然の人の流れに逆らうかのように俺は講義室を出て、三号館一階の食堂に併設された売店へ向かった。

昼間は人でごった返しているが、まだ朝ということともうすぐ授業が始まるということで並ばずに済んだ。

　約束の品を二セット買って講義室に戻ると、彼女は男グループに囲まれていた。

　明らかに彼女のことを狙っているのだろうそのグループは幸い隣の俺の席には座っていなかったので、俺は彼らの会話の邪魔にならないように席に着いた。すると、それに気付いた彼女は「じゃねー」といってそのグループに手を振っていた。

　グループの一人は離れていく際に、俺の方を一瞥して査定するような素振りをしていたので、おそらく後で陰口の的にされるのだろう。

「ありがとうー！あれ二個も食べていいの？」

「お前にとって俺という存在はないのか」

「アイス食べるときだけ消していい？」

「もういい、両方とも俺が食べる」

「嘘だよー、じゃんけん負けたでしょ」

　それは事実なので、黙って品を差し出した。彼女は先にアイスコーヒーにストローを差して一口飲んだ後、アイスに手を付けた。

　んー。という声が、咀嚼する口を止めて零れ出る。よっぽど美味しいらしい。

　男友達も女友達も多い彼女に対して、俺は仲の良い男友達を作ることに失敗していた。顔見知りとか、ちょっとした友達とかはゼロではないが一緒にいることが多い友人はほとんどいない。

それとは対照的に、客観的に見ても整った顔立ちの彼女は「望まなくても集まって来る」が口癖だった。

さすがに授業中にアイスを食べるのは気が引けるので、俺は右手の腕時計を気にしながらアイスを食べ切った。

彼女は既にカバンから取り出したティッシュで口元を拭いていた。視線に気づいた彼女はティッシュを差し出してきたので一枚だけ受け取って俺も口元を拭いた。リップを塗り直す彼女の横顔は、長い睫毛とぷるっとした綺麗な唇が特徴的で本当に整っている。

＊＊＊＊＊

「あー疲れたよー、帰りたいなぁ」

「テスト前だからな、さすがに帰れないけど」

「去年の今頃は毎日授業受けて部活もしてたなんて考えられないなぁー」

「本当だよ」

　一人で受けている授業や、数少ない他の友人と受ける授業では基本的に休むことがなかったが、彼女と同じ授業は彼女に誘われて何回かさぼることがあった。おそらく彼女は俺がいない授業は結構休んでいるのだと思う。そんな気がする。

　経済学の授業が終わって、大講義室を後にする。

　三号館の最上階に位置する講義室を出ると、エレベーターホールに設置された天窓から光とともに暖かい熱波が降り注ぐ。

　明らかに講義室の許容量と合っていないエレベーターを横目に通り過ぎて階段を下りる。

　隣の彼女は、授業が始まるまでは見えていた綺麗な二の腕が今は薄手のカーディガンで隠れている。

「本当あの授業冷房強すぎだよね」

そう言っている彼女は外に出たにもかかわらず、この炎天下の中両腕をさすっている。

さっきまでの冷たい空気の後だからか、この温度が心地よい。

「じゃ、またあとで」

「ちゃんと行けよー」

「行くわ！」という代わりに俺の背中をどんっと叩いて彼女は二号館の自動ドアを抜けて行った。

俺は二限目が空きコマなので、いつものように食堂に向かった。一時限目と五時限目に設定された必修科目の都合上、月曜日は暇している人間は多かった。

別に特別親しいわけではないが、この時間は男五人で賭けをするのが日課だった。

親しいの線引きは人によってまちまちで、他の四人からすると仲良い五人組だと思っているのかもしれないが。

「おっす！今日も那奈ちゃん連れてきてくれないのかー」

「だーかーらー、彼女じゃないって言ってるだろ」

　一回だけ俺についてきた那奈を見てからいつもこう言う五人の中の一人の栄治は、勇気に勝るとも劣らない整った顔立ちをしている。少し背が低いことがコンプレックスらしいが、それでも女の子からの人気は高いだろう。

背負っていたリュックを机の上にのせ、そのリュックに顎を乗せながら俺はそう言った。俺の到着で五人揃った俺たちを見て、特に何も栄治は二枚ずつトランプを配り始める。

配られたカードを見る。

親が山札からカードを一枚めくり、少し油でべたべたする食堂のテーブルの中央に置く。

そのカードの数字と自分が持っている二枚のカードの合計が同じだったら早い者勝ちで上がることができる。

もちろんルールはもっと複雑なのだが、めくられたカードと手札の合計が同じの時に一番掛け金が跳ね上がるので、基本はこの瞬間が一番の勝負どころだ。

誰が考えたのかもわからないこのゲームだが、大学生が盛り上がるには最適なゲームなのだろう。俺以外は食堂ということを忘れて騒ぎ立てている。

周りから見ると、仲良く騒いでいる男の集まりに見えるだろう。

だがそれはあくまで外観であって実際はそうではない。

少なくとも俺は仲良く騒いでいるなんて思わない。大きい時はこの一手で万単位の金額が動くのだ、気を抜けない。本当は賭けなんかは望んでしたくはない。

だが、入学当初に友達を作ろうと頑張った結果がこれだった。

生憎大学というコミュニティは、他の何よりも”ノリ”というものが重要らしいので今更抜けるなんていることは言いづらい。

　初対面の女の子に対して酷いことは言えるのに、何回もあっている男の友人にそんなことも言えないのは、俺に度胸がないからなのか。

　なんとか負けないように、もし負けても大きな損失にならないように立ち回る。

　時には勝負しないことが重要なのだ。

　このゲームは一発逆転があって、上がったとしてもそれを返される場合がある。その場合掛け金は倍に跳ね上がる。それを返されると当初の四倍、これが意外と起こりうるのだ。

　俺はこの一発逆転システムなんてことが嫌いだ。

　それまで地道に積み重ねていたものが崩される。

　それはまるで俺自身が否定されているようだ。

　実際目の前では欲に目がくらんだ栄治が一発七万円の負債を抱えて真っ青な顔をしている。もちろん当人以外は他人事で爆笑している。

　だが、こんな彼でもまだ逆転のチャンスがあるのだ。

　積み重ねなんて関係ない。

　他人の努力を否定するかのように。

だがさすがに七万の負債は大きすぎたのか、中々立ち直れない栄治があまりにも滑稽過ぎたので、自然と俺も鼻で笑っていた。

　二時限目の終了が近づいてきたのだろう、授業が終わって訪れる人々のせいで食堂が騒がしくなってきたおかげで、先ほどまで騒いでいた俺たちの声が埋もれるようになった。

大体これくらいになると一区切りにして切り上げるのだが、相変わらず負債の減らせていない栄治は俺たちを簡単には離してくれなかった。

五人で飯を食うこともあるが、委員会やサークルがまるっきり違う俺たちはそれぞれに用事を抱えているので解散することが多い。

仲良くなったのは本当にたまたまだ。というかなんでだったっけ。

続ける意思のない俺たちに向かってトランプを配る栄治を無視して、俺は席を立った。それを皮切りにそれ以外のメンバーも立ち上がる。

さすがに栄治も諦めて、テーブルに散らばったトランプを片付け始めた。

ふと周りを見てみると、立ち上がった俺たちの席をちらちらと見ている学生が見えた。割と大きいテーブルを占領していため、俺たちが離れた後を狙っているのだろう。

俺は「じゃっ」と言って敗北者たちに別れを告げて食堂を出た。

かという俺も敗北者なのだが、金額は四桁にも及ばなかったのでほぼ影響はない。

だがやはり地道に積み重ねても結局は一発逆転されてしまうということをつくづく痛感させられるゲームだ。

　俺は別に友達が少ないからと行き場を失って図書室で睡眠をとるなんてことはしない。食堂を出た俺は食堂を目指してなだれ込んでくる一号館の入口には近づかずに通り過ぎる。

照明がついているのにもかかわらずなぜか薄暗い印象が立ち込める細い廊下を通り抜けて一号館の裏口へ向かった。

裏口からでた俺は、そのすぐ目の前にある名も知らない大きな木の下の木造のベンチに座り込む。

まるでその木のために用意されているようなその空間は隣の四号館との境界となっていて、枝葉でできた影が俺を覆ってくれているので、朝まで照りかざしていたの肌を刺すような日差しは感じない。風が通りやすくなっているからか、生きていることを主張するような草木の音が非常に心地よい。

しばらくすると、俺が出てきた裏口から出てくる男女が見えた。

昼時の食堂は戦争だ。いつもは大人しい女の子でさえも、内なる闘志をめらめらと燃やして長くない昼休みを無駄にしないようにする。そんな中食堂を離れて、ましてや何もない裏口に来るのは俺か彼女くらいだ。

片方の存在は簡単に認めることができたが、隣に並ぶ男には心当たりはなかった。その男は、自分に興味を向けない彼女に対してしきりに話しかけているが、これといった返事は得られていないようだった。

愛想笑いが得意な彼女でさえも、仏頂面を隠せていない。俺の存在を認知したその男は、俺の容姿を一瞥してから聞こえるように舌打ちを打っていた。それも一瞬で、再び見向きもしない彼女に満面の笑みで「また来週の授業でな！」と言って再び裏口に引けていった。

「その舌打ち私にも聞こえてますよー」

　裏口に消えていくその男には聞こえない程度の音量で悪態をついている。こちらからは見えていないがおそらく舌も出しているだろう。

「普通に接してたらあいつ調子乗っちゃって、約束があるって言ってもついてくるんだよ、ほんと信じられない、確かに客観的に見たら顔はいいかもしれないけど女の子に配慮できない男なんて一ミリも惹かれないわ。配慮きづかい思いやりよ！」

　「HKOよ！」とかいかにもその場で作った単語を発しながら、手を組んで頬を膨らませた、いかにも不満そうな顔をしている。

「別に俺人は嫌いにはならないんだけど、あれだけあからさまに敵意を出されると仲良くはなれないわ」

「『女嫌いなんだよね』って初対面で言うような男が言う台詞とは思えないね、仲良くしてあげてる私に感謝してよー」

「どっちかというと仲良くしてあげてるのは俺だけどな」

　なにも言わずに口を膨らませた顔をこちらに近づけてきた彼女に気付き、うそだよと訂正をすると、彼女は目を小さくした満面の笑みをこちらに向けた

「最近ここに集合すること多くなったね」

「最初は友達作るためにいろんな人とご飯食べてたからな。結局気を遣うのに疲れて限られた人としかいなくなったわ」

「壮真はもう少し私に気を遣ってほしいんだけどね」

「気を遣って一緒に授業受けてるじゃん」

「あれ気遣ってるの？結構傷つくよー」

「嘘だよ。いい加減俺の嘘に踊らされるのやめろよ」

　普通の女の子にこんなことを言われても何も思わないのだが、さすがに彼女を傷つけることはしたくはなかったのですぐに嘘だと言った。

　この時には、あれだけ作ること拒んでいた女友達というものに彼女はなっていたのだと思う。

　俺の隣に座る彼女は、持っていたトートバッグから飲み物を取り出そうとすると、鞄の中に入っていた文庫本が鞄から落ちた。

「本なんか読んでたっけ」

「一人の時にね、妹が好きなんだ」

「へぇ、漫画とかじゃないの？」

「漫画も好きだけど、これは違うよ」

「活字は得意じゃないんだよな、眠くなる」

「ふーん。本って面白いよ」

「大和撫子とは程遠い、その見た目でそれ言うか」

「私をブスだっていうの！ブスだって本読むわよ！」

　そう言って彼女は両手で俺の頬を挟んだ。

「ほーゆーいいじゃらいよ」

　勘違いしていると思ったが、あまり怒っている様子ではなかったので俺が別の意味でその言葉を言っていることは理解しているようだった。

　特に抵抗もしなかった俺の頬から手を離さないまま笑っていた。

いつもより少し近づいて見えた彼女の顔をやはり綺麗だった。

3

『私も終わったよー、遊ぼー』

家でアニメを見ていた俺は一時間程度前に届いていたそのメッセージにようやく気が付いた。

お疲れ様に続けて、了解とだけ打ち込んで端末を机に置いた後、俺は目の前で広がる恋愛アニメを眺めていた。

彼らはボタンを押せば人生を中断できる。

しかし彼らは自分のこれからの人生を変更することができない。

決められた最後に向かって、進めるだけだ。

おそらく俺もそうなのだろう。

テスト終了直後に遊びの連絡を入れてくるまで仲良くなったかと再び再確認させられたそのメッセージには喜びと共に不安も付きまとう。

もちろん断っても理由を追及されるだろうし、もう友達になってしまった手前断る理由は俺には見当たらなかったので、テレビの中の主人公がヒロインではない脇役の女の子に好意を抱き始めた時点で彼らの時間を止めた。

簡単に好きになるとろくでもないぞ。

俺がテレビのリモコンをテーブルに置くと同時に、テーブルに置かれた端末が着信を告げた。木製のテーブルはバイブレーションを受けて大きく不快な音を出している。

その不快な音を遮るためと、画面に映る名前が彼女であったのを見てすぐに端末を耳に当てた。

「もしもし」

「遊ぼ―、どこで遊ぶ」

「早いな、今から準備するからつもりだったんだよ」

「了解って言ったじゃん！返事遅かったから私最寄りまで来ちゃったよ！」

「は、今どこにいんの」

「壮真の家の最寄り駅前の本屋さん」

「用意していくから待ってて」

返事も聞かず俺は通話を切って外に出る準備をした。起きてからなにもしていない俺は急いで準備をして外に出た。

空がオレンジとグレーで二分された空の中、住宅街を駅に向かって歩く俺は夕食の断りを入れていなかったことに気付き、母にそれを伝えた。

　駅前の小さな本屋につくと、彼女は雑誌をぱらぱらとめくっていた。

　近くでは店員さんが小さな箒でほんの埃を落としているが、別に立ち読みをしている彼女に対して圧をかけているわけではないことは良く知っている。

「ごめんお待たせ、出るか」

できるだけ小さな音量で声をかけ、頷く彼女と俺は本屋を出た。

「ありがとうございました、また来てね」

　購入もしていないが、ここの店長さんはいつも挨拶をしてくれる。

時間つぶしでここに立ち寄ることは多いが、その小林さんの人柄のよさに触発されて一人の時は何か購入して店を出るようにしている。

「あ、ちょっと待って」

　そう言って、先ほどまで立っていた場所に戻って、雑誌を一冊持ってレジまで持ってきた。

「ありがとうございます、ごめんねぇわざわざ」

「いえ、長い間すみません！」

　会計を済ませた後も店長にしっかりとあいさつをした後、一緒に店を出た。

「ごめんね、待たせちゃって」

「いや、こっちの台詞だよ。いつからいたんだ？」

「んーそんなだよ、テスト終わってからこっち来たからー…わかんない！」

　彼女はそんなに馬鹿ではない。俺たちが通う大学は地方では有名な私立大学で、入学が簡単なわけではない。彼女もそれなりに地頭はいいのだが、それよりも人付き合い上手いからこの言葉が出たのだろう。

ざっと計算しても約一時間はあの本屋さんにいたようだ、せめて喫茶店にでも入っていればいいのに。

申し訳なさを感じるとともに友人にそこまでする彼女が少し不思議だった。

「焼き鳥が食べたい」

「いいじゃん、ちょうどすぐそこにうまい店があるんだよ」

「週末でもないから予約なくても行けるよね」

　夕焼けは大半が沈み切っていて、辺りはほとんどがグレーになっていた。社会人としての鎧を身につけた人々は週初めだからか、その足取りは重そうだ。

　待たせたお詫びと言ってはなんだが、俺は彼女が先ほど購入した雑誌が入った袋を無言で彼女から奪い去り目的地に向けて歩みを進めた。目を丸くした彼女はありがと、と一言だけ呟いて、先を歩く俺について歩いた。

なれないことをして恥ずかしかった俺は遠くで少しだけ残留しているオレンジを眺めていたので、彼女のオレンジの頬を見ることはできなかった。

　すぐ近くにある居酒屋チェーン店がいくつか入った駅前のビルではなく、少し小道にそれた小さな居酒屋に入った。テーブルは数席しかなく、カウンター席がメインのその店は週初めだからか俺たち以外にお客さんはいなかった。

　先程まで厨房の人とお話ししていたのだろう、ホールの店員さんはお話をしていた時の笑顔をそのままこちらに向けて出迎えてくれた。

　最近はされないことも多くなってきた年齢確認を求められ、俺たちはお酒を飲むつもりはなかったがそれに応じた。

　確認が終わった後、全ての席が空いていたので店員さんは笑顔を絶やさないままお好きなお席にどうぞ、と言ってくれたので俺たちはドアからは一番遠い四つ角のテーブル席に着いた。

　頭上ではさすがに最近は見なくなったブラウン管のテレビ置かれていて、まだ仕事がなさそうな厨房の店長さんらしき人はニュースを眺めている。

「すいません注文良いですか！」

席に着くなり、おしぼりもまだ受け取っていない中彼女はメニューを開いた。お伺いしますという定員さんの後、適当に二人分の串を注文した。

カシラにシロ、彼女は別に焼き鳥が食べたいわけではないらしい。

「私はジンジャーエールで！壮真は？」

「じゃあコーラで」

　注文が済んだ後、ようやく手渡されたおしぼりで手を拭いていると先にお通しが用意された。

　きゅうりが入ったマカロニサラダ、生憎俺はきゅうりもマヨネーズも嫌いだ。

　もちろん彼女は既に食べ終わっていて、俺が手を付けないそれを見つめていたので彼女の空いた皿と交換した。

　程なくして運ばれたドリンクを手で受け取った俺たちはそのままの流れで乾杯をしてグラスを口に運ぶ。キンキンに冷やされたグラスから運ばれるその飲み物はダイレクトに喉を通過する。

　ソフトドリンクを示すストローは引き抜いて、まるでお酒のように飲む彼女の飲みっぷりには惚れ惚れする。

この温度と炭酸が与える爽快感は夏しか得られないだろう、先ほどまで火照っていた体は店内の冷房とそれで冷やされていくのを感じた。

「ぷはー！たまらんねーこれは！」

「中身がソフトドリンクだと知ったらみんなびっくりするくらいの反応だな」

「ソフドリでこの快感が得られるんだからお酒なんか別にいらないね！」

「お酒だったらもっと快感かもよ」

　確かに、と顎に手を当てながら考える彼女のグラスは既に半分もなかった。見かけによらず酒を飲まない彼女は、別に酒が苦手な俺に合わせてくれているのではなく、単に彼女もお酒が好きではないだけだ。これまでに何回か飲みに行って判明した。

「そうだ、夏休みどこ行く？」

　そう言って彼女は残ったグラスの中身を一気飲みした彼女は再びメニューを開いた。

「どこか行くなんて話してたっけ」

「してないけど、行くでしょ。旅行」

「二人？」

「逆に誰か呼べる？勇気くんでも呼ぶの？」

　そうじゃなくて、と言い出すのが恥ずかしくなるくらいに当然のように予定を決めようとする彼女の誘いを断ることを躊躇った。

いや、もはや誘いでもなかったそれは、事前に決められた予定の詳細を決めるようだった。

俺は即答できなかった。

　さすがに二人での旅行は友達としての範疇を超えてはいないか。

　お互いに気がなくても二人で旅行をするというのは何かのきっかけになってしまわないか。

俺は、俺のこの原因不明の現象のせいで、友達以上恋人未満なんて言葉は全く信用していない。

　友達だと思って接していた子に忘れられ、今回は大丈夫かもしれないと思っていた子には忘れられ、そんな他人が人生で感じることはないストレスにもう一度向き合うほどのコーピング力は俺にはもうなかった。

　那奈は本当に良い友人だ。女友達という存在を作ることをやめてからはほぼ女の子との関わりはなかった。

大半の女の子は最初の常套句で俺を軽蔑し、離れていく。

そしてそれ以降は俺に近づくこともしない。そして自分から近づくことはないので必然的に関わりはなくなっていく。

　女子というのは、土竜の穴のようにどこに繋がっているかがわからない情報網を持っているので、俺の常套句はどんどん歪曲されて、実際にそれを言った女の子は十数人程度なのに俺に近づく子はほとんどいなくなった。

だが、彼女は違った。

彼女がその情報網に引っかからないわけがなく、ただ自分からそれを避けているか、それとも引っかかってもものともしないかのどちらかだろう。

彼女は、初めて会ったあの日に俺の常套句の奥にある本心を読み取って、今ここにいる。

そんな彼女と親しくなりすぎたからか、なおさら彼女に好きになられるということは耐えられない。

好きになってほしくないわけではない。ただ、俺のことは覚えていてほしい。この先も友達として一緒にいてほしい。

　こんなにも考えている俺は既に彼女を特別な存在として認知しているのだろうか。

いや、そんなことはない、彼女は彼女ではなく友達だ。

もう少しで超えてしまいそうな境界線の瀬戸際で、なんとか自分の本心を押さえつけている。

この線を越えて終わってしまうくらいなら、俺はこの瀬戸際で何度だって足踏みをしてやる。

境界線の奥に吊るされた誘惑を見ないように、俺はわざと眼下に広がる渓谷を見おろす。足がすくむ、それでいい。

それでいいんだ。

「行かないよ、俺ら友達だけどさすがに二人で旅行は噂になっちゃうからな。さすがにそれは嫌だわ。飯くらいならいつでも行くからよ」

「え？」

「母親の実家に帰ることにもなっててさ、日にち的にも合わないと思うんだよな。だからごめんだけど今回は無理だわ」

「そ、そっかー。なるほどね！ごめんごめんいつものノリで勝手に行くものだと決めつけちゃってた！また時間があえばご飯行こうね！」

　断られるとは思っていなかったのだろうか。一瞬顔をうつむけた彼女だったがすぐに気にしていない様子で俺に笑顔を向けてそう言った後、グラスの中が空だったことを忘れていた彼女は開いているメニューに再び目を向けた。

　逆に俺はこんなにも簡単に納得した彼女に疑問を抱いた。

　いつもなら俺の意見なんかそっちのけで勝手に予定を決めるような子だ。

　実際今日も俺の返事が来る前に最寄りまで来ている。

　そんな彼女があれだけの言葉で納得をしてそれ以上は何も追求してこなかったことが不思議で何か気持ちが悪かった。

　この気持ちはなんなのか、俺は追求してほしかったのか。

　俺が悩んでいる間、彼女は店員さんに何かを必死に頼み込んでいた。俺はそのやり取りを眺めていたが、話の内容までは分からず呆然とさっきまでの出来事を噛み砕いていた。

「ご馳走になってごめんね！次は私にご馳走させてね。じゃ！」

店を出た後、顔を少し赤くして足取りがおぼつかない彼女が、迫る終電に間に合うように改札を抜けていった。

あの後は、お互いなにも触れずいつも通りに会話をしていた。

少し変な空気になるのかと思ったが、彼女は直後に運ばれたドリンクを飲んだ後はそれまでよりも元気になっていて、俺もそれにつられて楽しくなっていた。

やはり友達っていうのはいい。

男の友達が嫌なわけではないが、俺はもしかすると女々しいからか女友達の方が、気が合うのかもしれない。

おそらく数少ない女友達に対する贔屓が入った感情を感じながら、俺も駅を後にした。

別れ際、嗅ぎなれないツンとした匂いが鼻と心を刺激した。

　4

「なーるほどねぇ」

　勇気は俺の話を話し終えると同時に水滴が滴るアイスコーヒーを机に置いてそう言った。

「当事者じゃないからわかんないけどさ…苦しいな」

「まぁな、久々にできた女友達だから俺もちょっと親しくなりすぎたかもしれないな。これ以上深くなりすぎたら俺もどうなるかわからないし」

　俺は自嘲気味で笑いながら言った。

　いつもなら笑ってばかりいる勇気だが、俺の言葉を聞いても顔は変えなかった。

「那奈ちゃん見た目もだけど、良い子そうだもんね、同じ学部に友達ができてるの見て俺は安心してたけど、同時にこのことも気にはしていたよね」

「別に好きって言われたわけじゃないからな、本当にただの友達として誘ってくれたのだろうけど。あまりにも二人で行動を共にし過ぎると俺は好きじゃなくても向こうがな」

「隠さなくてもいいのに、壮真好きでしょ那奈ちゃんのこと」

　別に隠していたわけではないが、そうはっきりと言われて肩が少し上がったのを感じた。自分でも薄々気が付いていたが、友達と思いこむことでなんとかその現実からは逃れようとしていたのだ。

　それを言葉として断言されて鼓動が早まるのを感じた。どうにもならないこの感情を認めたくなかったのだ。

　そうだ俺は認めない。

　認めてそれを口に出すこと、それは一歩踏み出すことだ、そこはもう渓谷だ。

　渓谷を隔てた先にどれだけ魅力的な未来があったとしても、俺はこの眼下に広がる渓谷を無視できない。

　そしてそれを無視できないのなら、未来を諦めて現在を維持したほうがましだ。

　この境界線を越えないように、この線に沿って進んでいけばいつか、橋があって渓谷を渡れるかもしれない。

　そんな抽象的で淡い希望を抱いて。

「好きじゃないって。仲良い友達だって、ずっと行ってるだろ、俺には友達以上の感情はないって」

「ふーん。たまに学校で見かけるけどさー、すごい楽しそうだったもん。俺の学部の那奈ちゃんファンも羨望のまなざしでビーム出してたよ」

　そう言いながら手をビームに見立てて目から飛び出すようなしぐさをしている。

　さっきまでとは少し場が和らいだのか勇気の顔には微量の笑顔が見える。

「やっぱりあいつ他学部からもモテてるのか」

「どこの学部からも人気でしょー、凪原先輩も知ってたよ」

「まぁ、あいつ可愛いからな。納得だわ」

「可愛いだけじゃないよ、性格もいいし。友達もすぐできるはずなのに壮真としかいないからほんと大事にしなよ」

「女友達として大事にするな」

「しつこいなぁ」

　勇気はやれやれと言った様子で両手を顔の横に挙げながら溜息をついているが、その顔を笑っていたので怒っているわけではなさそうだ。

「そういえば、サークルは行ってるのか？」

「たまにね、さすがに毎回は行ってないけど一応顔は出してるよ」

　休みに入ってから明るくなったその髪を鬱陶しそうに手でかき上げてから再びコーヒーに手をかけた。

俺が頼んだココアは、上に乗ったソフトクリームが溶け始めていて、出来るだけこぼさないようにグラスに口を付けてすすった。

「そろそろ壮真も来たら？結構来てないでしょ」

「前言ったのはバスケした時だからそれくらいかな」

「六月の始めくらいかな、凪原先輩も気にしてたよ」

　別に行かないのに理由はない。強いて言うなら、行く理由がないだけだ。ただ、凪原先輩の気がかりになっているのならそれは十分行く理由になる。

「言っても、凪原先輩も今年までだからね。来年は就活だから」

「次は行くよ、また日程教えてくれ」

　了解、と言う代わりに持っているコーヒーを少し上げて返事した勇気はにじみ出る嬉しさを隠そうとはしていなかった。俺はスプーンで一口アイスを口に入れると、冷房が効いた部屋にいたからか真夏の中体が冷えるのを感じた。

夏休みはまだ始まって一周間、大学生始めての夏休みはまだまだ始まったばかりだ。

5

　寒い。あまりの寒さで目が覚めた。どうやら冷房のタイマーをつけ忘れていたらしい。夏もピークに入り、寝苦しい夜が続いていた。休みに入っても、特にこれといった予定がない俺は、勇気と遊んだり家でゆっくりしたりして初めての夏を謳歌していた。

テストが終わってから約二週間経った。あれ以来、那奈からの連絡は一切なかった。

ただ連絡がないだけならいい。

もし怒っているのなら謝ればいい。

もし他の予定で忙しいのならそれでいい。

ただ俺は違う。

もしかすると、この状況が永遠に続く可能性があるのだ。そして、もしそうだったとしたら彼女は俺からの連絡に戸惑うだろう。故に俺は何もアクションを起こせない。

幸いというのだろうか、彼女のSNSは更新されているので生きていることは間違いなさそうだ。

カーテンの隙間から洩れる光はまだ薄暗く、朝を示しているわけではなさそうだ。俺はベッドサイドのリモコンで冷房を消すだけでなく、他の誰からでもなく彼女からのメッセージがないことを確認して再び目を閉じた。

＊＊＊＊＊

「壮真ってさ、好きな人いないの？」

「んー、部活で忙しいのもあるけど、ちょっと色々あってそれどころじゃないかも」

「私ら高校生だよ？今それどころじゃなかったらいつそれどころになるのよ」

　まだまだ制服に着られている俺とは違い、同学年にも関わらず既に制服を着こなしている女の子にしては背が高めのその子はそう言う。

　おそらく規定よりも短くしているスカートから出る足はすらりと長く、筋肉を含め無駄なものがない。トレンドなのか、脛ぐらいの長さの紺色のソックスが綺麗な肌を際立たせる。

持っているスクールバッグと長い髪をぶらぶらさせながら、その明るい女の子は俺の隣を歩いている。

「いや、可愛い子はもちろんいるんだけどね。女の子と話してると、なんかある日急によそよそしくなるんだよね。どゆこと？」

「なにそれ、私が聞きたいんだけど。なんか嫌なことしたんじゃない？」

「してないはずなんだけどな。急に他人みたいな扱いされるんだよ」

「ま、確かにしつこく付きまとってくるやつとかだともう関わってほしくないから知らないふりしたりするけどね。」

「なんだかなぁ」

　そうじゃないんだよなぁ。とは思いつつも声には出さず、これ以上は特に意味のある会話にはならないと俺は曖昧に答えた。

「いつまで童貞守ってるのよ、付き合ったことないでしょあんた」

「別に守ってるわけじゃねーよ、俺でも開けられない鍵がかかってるだけだ」

　なにそれ、といわんばかりに両手を顔の高さに挙げた彼女は呆れている。

「私がもらってあげようか」

「悪くはねーな」

「ばーか」

　おどけた顔で笑って見せるが、気のせいか目は合わない。

じゃあね、という彼女はウサギのベンチが特徴的な小さな公園がある交差点を右に曲がっていった。

そのうさぎはいつも離れている彼女の方ばかり見ていて、まるで俺なんか存在しないかのように目も向けてくれない。

　目が覚めると、寝汗で服は湿っていた。既にカーテンからは光が差し込み、ベッドサイドの置時計は十時を指している。

　懐かしい夢を見た。あの夢は、あの子との最後の”良い”思い出だ。

起き上がると、額からは汗が流れ落ちる。さすがにこのままではいられないので、俺は部屋の冷房を強くしてから、風呂場に向かった。

　体にまとわりついていた汗が、熱めに設定したお湯で洗い流されていく。

だがそれと同時にさっきの夢の内容は流れてくれなかった俺は、シャワーを浴びながらさっきの夢の続きに支配されていた。

＊＊＊＊＊

「あーぁ、嫌だなぁ」

　俺は何も言えなかった。不意な出来事に俺の心は波打っていた。

「なにか言ってよ。今日で最後なんだよ」

「遅すぎだろ、なんで今まで教えてくれなかったんだよ！」

「怒らないでよ。言わなかったことは謝るから！」

　彼女は俺をなだめるように言った。しかし俺はそれぐらいでは鎮静しない。

「確かに転校はするけど、これで終わりじゃないよ？幼馴染は壮真以外いないんだから、定期的に連絡してよね」

「…………」

「ちょっとー何か言ってよ。最後なんだから、笑ってお別れさせてよ」

　先程まで俺に向けていた視線を下におろした彼女の声は、少し震えていた。そんな俺は彼女の様子を見ることもできず、うつむいたまま動けなかった。

「そんなこといきなり言われても整理がつかない」

「…だよね。でも、ね、私はちょっと嬉しい」

「は、なんでだよ」

「壮真って、結構冷めてるじゃんか、特に女の子には。だから幼馴染とはいえ、悲しんでくれるのは嬉しい」

　座っていたその子は立ち上がって、少しぎこちなく笑顔を向けた。

　まるでその存在を覆うかのように後ろの夕日が彼女にライトを当てる。

　悲しいに決まってる、女友達なんて彼女以外にいない。ましてや幼馴染だ。男といた時間よりも長い。そんな彼女が遠くに行ってしまう。

考えていなかったこの事態に俺は心を落ち着けることはできなかった。

二人で塗った絵本、地元からは少し離れた夏祭りに行ったとき射的で当てた指人形、卒業旅行で無理やり班を一緒にして買った金毘羅山の金運キーホルダー。全部引き出しに残っている。

そして一緒に遊具で遊んでいる時に落下して付いた左目の上の傷。

沸々と湧き上がる思い出にいつも彼女はいた。

そして気付いた。

　先刻までうまく言葉に出来なかった俺だったが、今は妙に落ち着いている。

湧き上がっていたものは冷めて収まっている。

そのエネルギーは代わりに言葉に変換されて俺から発せられた。

「好き…かもしれない」

返事を求めるために告げたのじゃない。

突如現れたその気持ちが俺の中から逃げ場を失って、気付くと言葉として放たれたのだ。

　俺が思い描いていた告白とは程遠い、不格好な告白。

我に気付いた俺は、彼女を見ると彼女は俯いていてその表情は確認することができなかった。

代わりに彼女の肩は震えているようだった。

　俺は禁足地に踏み込んでしまった気がしてその場を回避する辯解を考えたが、既にその必要がなかった。

「あんたこそ…遅いわよ…」

　顔を上げた彼女は笑顔で大粒の涙が溢れていた。止め処なく流れるそれを塞き止めるものはもう彼女にはなかった。

溢れた涙が口の中に入りそうになり、手の甲で拭いながら笑顔を見せて彼女は言う。

まだ夜を迎えようとはしないその太陽の光がまるで彼女だけを照らしているのか、俺にはもう彼女以外のものは見えていなかった。

　そして、彼女を見つめていた俺の視界は少しずつぼやけていく。

別に我慢しているつもりはなかった。

ただ俺の体は彼女から事実を宣告された時から悲鳴を上げていたのかもしれない。

彼女の感情の氾濫に共鳴するかのように俺はむせび泣いた。

　二人してひとしきり泣いた後、俺たちはお互いのひどい顔を見て笑いあった。

　ただでさえ大きい彼女の涙袋は真っ赤になってさらに膨らんでいる。

「こういうのはどっちかが慰めるもんでしょ。なんで二人して泣いてるのよ」

「うるせぇ、アニメのキャラクターじゃないんだよ。今更幼馴染に格好つけられるか」

「壮真らしいね、ほんと。後、わがまま言っちゃうならもっと格好良く告白してくれない？」

「告白なんかしてないけど」

「壮真らしいね」

　全て見透かすようなその言葉は、彼女だからか別に悪い気はしなかった。

実際、彼女は俺のことを俺よりも良く知っているのかもしれない。それくらいに俺たちは一緒に過ごしてきた。

　俺がさっき気づいたこの感情も、もしかしたら彼女は知っていたのかもしれない。

　そして、いつかそれに気づくことも。

「私もね、ずっとごまかしてきたのかもしれない。幼馴染だからって。それ以上ではないんだって」

　彼女に押し寄せていた波はもう穏やかになっていて、目の下には涙の跡が一筋の線となって残っている。

「でも、気付いた。」

　時が止まるような気がした。俺が本心を告げてから、彼女も同じように抱いてくれているのかもしれない、と心の奥底では薄々感じていた。

しかし、そうはなってほしくなかった俺はこの後起こる可能性から目を背けていたのかもしれない。

　欲しいけれど、欲しくない言葉。

　俺の思惑を無視して時は流れた。

「やっぱり壮真が好き」

＊＊＊＊＊

　頭から浴びていたお湯を止めずにそのまま俺はバスチェアに体を預けた。顔の水滴を手で拭い、前髪をかき上げた後、正面の曇った鏡を手でこすった。さっき拭ったものとは別に目から何かがこぼれ落ちた。

　その時のことは鮮明に記憶に残っている。あの後、俺たちはお互いの気持ちを伝えあうだけでそれ以上の会話はほとんどなかった。

　その原因の多くは俺にあって、彼女あの一言の後からは俺はあまり記憶がない。

　ただ、物理的にも精神的にも離れていってしまう明日が訪れるのを拒んでいた。

　しかし時間というものは俺の思惑などには影響されなかった。

「明日、見送りに来るわ」

「うん！楽しみにしてるね」

　告白の返事の代わりに簡単そうで、ただ、俺にとっては告白よりも重い約束を告げて帰路についた。

　翌日、既にもぬけの殻になった家の前で俺はこの辛く重い真実を受け止めきれずに地面を叩いた。

　そんな俺を嘲笑うかのように烏は頭上の電線で鳴いていた。

　最初の目的だった汗を流した後、俺は自分の部屋で引き出しを開いた。

範囲を大きくはみ出して塗られた絵本、買ったまま袋から出していないキーホルダー。彼女とは対照的に忘れることができなかった俺は、久しぶりに開いた引き出しの中身を穏やかな気持ちで見ていた。

あの地獄はいつまでも続くようだったが、やはり時間というのは思惑に反して流れるもので、自然とその地獄は安らいでいた。

しかし、後に残ったトラウマは消えることはなかった。

　彼女のことを思い出したのは、久しぶりだった。あの日以来、俺は女の子を始め、人と関わることが極端に減った。クラスメイト、部員の中では関わりはあったが、親密にまではならなかった。

そんな中、勇気だけ懲りずに俺に関わりを持ってきた。今となっては、親友と呼べるのは勇気くらいだ。

だが、時々それも怖くなる。

何かの引き金で勇気も俺のことを忘れてしまう可能性があるのだ。

　俺は開いていた引き出しをしまい、ベッドに寝転がる。

まだ乾ききっていないシーツが少し不愉快だったが、逆にそれが気が紛れる原因となってくれたおかげで俺は再び眠りにつくことができた。

6

　休み前とは違って、肌を燃え尽くすような日差しに代わり、少し肌寒い風が体に降りかかる。足元には色づいたイチョウが地面に散らばっていて、それを熊手で集めている管理人さんが見える。私立大学でも未だにそのような用具しかないのか、それとも初老の管理人さんのこだわりなのだろうか。

俺は入学当初よりは周りを見ながらメインストリートを独り歩きながら校舎へ向かっていた。

　夏は人がまばらだった芝生の広場も、心地よい気温になったからか大盛況だ。

　あれだけ長かった夏休みも早いもので、気付けば授業が始まっていた。

大きなイベントと言えば、サークルの夏合宿に行ったくらいで、積極的に顔を出していなかった俺に対してもみんな仲良くしてくれた。

勇気に誘われて渋々参加したが、あれを機会に友達ができた。三日も一緒にいると、やはり繋がりは深まるということを感じた。

三年生は合宿を最後に仮引退ということで、二日目の夜は周りの迷惑を他所に、みんな騒ぎ泣いていた。

　帰りのサービスエリアでは、胃からせり上げている不快感と戦う凪原先輩が、「俺は個人的に壮真が引っ張ってくれると嬉しいぞ。」と、肩を組みながらそう告げてくれた。

　関わりを持ってこなかった俺は初めてできた先輩のようで、嬉しかった。

そのすぐ後に我慢できなかった凪原先輩が、俺の足元にまき散らした吐瀉物はその甲斐もあってかあまり気にならなかった。

　それ以来、俺はサークルに積極的に参加するようになった。と言っても、毎週活動があるとうわけではないが。

　すぐ隣を通り過ぎる熊手を装備した管理人さんに軽く会釈をすると、相手はとても嬉しそうな笑顔をしながら「おはよう」と言ってくれた。

　さすがに、あの管理人さんには忘れられることはないと思うので明日からはちゃんと挨拶をしようと思う。

　久しぶりの校舎の前に着く。当然ながら俺を待つ存在はそこにはいない。

少しだけ期待していたものに裏切られた俺は、先程まで上がっていた視線を再び下げてそのまま自動ドアを抜けて校舎に入った。

前期は基本的に午前の授業を履修していたが、後期は履修が上手くいかず、今日は午後からの授業だ。

それも、もう昼時も過ぎていて辺りは少し涼しくなり始める時間だ。

エレベータで五階まで上がり、正面にある大講義室に入った。

中は白が基調の教室で机が壇上に並んでいる。

俺は、左後方の席が空いていることを確認し、席へ着いた。

窓からは光が差し込んでいて、ただでさえ白いテーブルが光で反射して眩しいがそれ以上に冷え切った心を温めてくれる気がしたのでここにした。

おそらく光で板書はしづらいのであまり人気はなさそうなので来週以降もそうしようと思う。

ちょっとすると、空いている俺の隣の席に人が座る音がした。窓の外で烏の電線に乗る烏を見ていた目線を隣に向けて確認すると、それは勇気だった。

ちなみにその窓が防壁となっていたので、俺を嘲笑うそいつの鳴き声は俺の耳には届かない。

「おっすー、横空いてるよね」

「空いてるけど、なんで経済学部の教室棟にいるんだ？」

「休講になっちゃってさ、俺ここの教室棟来たことなかったから興味あったんだよね。前送ってくれた写真見てきちゃった」

　そういえば休みが明ける前に勇気は、他学部の俺に履修の写真を求めてきた。なんのためにとは思ったが、この時のためだったのだろう。

　ちなみにその流れで求めてもいない履修届を送られてきたのだが、文系の俺とは比較にならないほど詰め込まれたその履修には驚いた。

　あの授業をこなしながらサークルをやっているのは本当に感服する。

「やっぱり、あの子はいないんだね。」

　少しだけ辺りを一瞥し、夏までは隣にいた存在を見かけられず勇気は肩を落とした。

「まぁ、ひどいこと言っちゃったしな。仕方ないよ。それより遅れてだけどサークルに馴染めてよかったよ。これからは頑張って友達作るわ」

　「女の子の友達もな。」と、付け加えながら俺は笑顔を見せて勇気の不安を払拭しようとした。実際サークルに馴染めたのは本当だし、友達ができたことはうれしかったからおそらくうまく笑えているだろう。

「でもさ、まだ忘れてるってきまったわけじゃないでしょ？まずは覚えてるかどうか確認するぐら…」

「もういいんだ。不用意に期待を持ちたくないんだ。」

　勇気の言葉を遮って、そう言った言葉には少し怒気がこもってしまった。少し声量が大きくなったせいか周りの数人がこちらに視線を向けていたので、俺は無理やり繕った笑顔を見せて無言で会釈を配った。

「その気持ちもわかるけどなぁ。もちろん当事者でない俺が壮真の気持ちを完璧に理解しようなんておこがましきことこの上ないんだけどね。」

　勇気は特に気にした様子もなく、視線を教壇の方に向けたまま呟くようにそう言った。

既に教壇には、いかにも教授というステータスが似合う白髪のおじいさんが立っていた。

「悪い。そんなつもりはなかったんだけど、つい」

「いや、本気で怒ってるわけないなんてことわかってるし。ただそこまで頑なに拒むということはやっぱり壮真にとっては特別な存在だったんだな」

「唯一の友達だっただけだよ」

「別に友達なら旅行くらい行けばよかったのに」

　これは勇気の冗談だ。友達とは言えど、二人で時間を過ごす時間が多ければ多いほどそれだけ別の感情が湧き上がってしまうことを勇気は知っている。

「確かにな、どうせだったら旅行行って忘れられればよかったわ」

「旅行行くだけで自分を好きにさせる秘訣がないと、そんな豪語できないけどね」

　痛いところを突かれた俺は両手を振ってどうにか辨解するが、それを見て勇気は余計に笑いをこらえている。

　授業開始のチャイムが鳴り終わると同時に教授はマイクを使って講義を始めた。

　スライドを利用して進行するのがメインのようで基本的に講義室内は照明が落とされたまま進行するらしい。

　俺がここに座る理由だったこの大きな窓も、数秒後には自動的にカーテンによってその光は遮られてしまった。

勇気が来るまでは彼女のことが離れなかったが、今は少し気が紛れた。

隣を見ると勇気はバレないように睡眠を取ろうとしていたので、日光浴もできなくなった俺は鞄からノート取り出して授業に集中した。

　授業終了のチャイムが鳴る。

いつの間にか眠っていた俺はチャイムではなく窓から差し込む光で目が覚めた。窓の外には烏がいる、おそらくさっきのやつだ。

勇気は少し前に起きていたのか、机に突っ伏したまま携帯を触っている。起きた俺に気付いた勇気は触っていた端末をしまい、鞄を背負った。

「次の授業面倒だなぁ。初回だし休んじゃおうかなぁ」

　基本的にどの授業も、初回の授業はカリキュラムの説明がメインだ。結局この授業もスライドを利用したカリキュラムの説明だったので、俺はすぐにノートをしまっていた。

履修自体も仮登録期間なので、初回の説明を聞いて登録を確定するというのがセオリーだ。

「まぁ、初回だしな。必修じゃなかったらいいんじゃない」

「春にも同じ先生の授業取ってたから、勝手はわかるだろうからな。それにあの先生はあまり厳しくないし、点数さえ取れれば単位はくれるはずだ。来週から頑張るから今日だけは！」

「人間って休む時の理由考えてるときって多弁になるのな」

「別に俺はいつでも多弁だけどね」

「間違いなかったわ」

　俺たちは大講義室から出てくる人の波が穏やかになるのを見てから、教室を出た。普通なら次の教室の席を確保するため、終了と同時に教室を出るのだが、もうこの時点で俺と勇気は次の授業に行くつもりはなかった。

春は一度も授業をさぼったことはなかったので、典型的な中だるみだろう。

勇気も春は真面目に受けていたはずなので勇気でもそういうことは仕方ないらしい。

　授業に行かないからといって特に目的のなかった俺たちは、学校内に併設されているチェーン店のカフェではなく、学校を出て駅周辺で適当な喫茶店を開拓することにした。

喫茶店に行こうと言い出したのは俺だ。

勇気は目を光らせながら学内のカフェに行きたがっていたが、俺が学内のカフェに行きたくなかった理由と、おそらく一緒だろう。

学内のカフェは経済学部の教室棟の隣にあるので、もしかする可能性があったからだ。

　駅に向かって歩きながら、適当な喫茶店を見繕っていた俺たちはそれが難しいことに気がついた。

駅までつながる通り沿いにある喫茶店は、既に他の学生の溜まり場となっていて風情なんてものはない。

別に紅茶やコーヒーに詳しくもないのに喫茶店を溜まり場にするなとは言わないが、味だけでなく風情や情緒を目的に来店する客もいるのだから、大人数で騒いでいるやつを見ているとむかむかする。

　次々と喫茶店を通り過ぎていく中で、地下へと続く階段を見つけた。

「なんかディープでよさそうじゃない？」

　多分勇気は冗談で言ったのだろうが、俺はなぜかその階段を見た時点でそれを魅力に感じていた。

「行ってみるか」

「なんか以外、絶対断られると思った」

「まぁ、多分ここだったら鉢合わせないだろうからな」

「どこでもいいじゃん」

「学内のカフェ以外はな」

　勇気は俺の現象を信じているからこそ、逆に嘘であってほしいと思っているのだろう。

　だから最近はこういう風に俺と彼女を引っ付けたがるのだ。

　他にその階段を下っていく人はやはりいなくて、蟻の行列のように帰りの電車に向かう列から逸れて俺たち薄暗い階段へと歩みを進めた。

　階段の前に置かれていた木製の看板のメニューで喫茶店であることはわかったが、それ以外は本当に事前の知識がなかったので俺は少し緊張していた。

　一方で勇気はそんな様子はなかったのでさすがだと思う。

　下りきった先では茶色のドアが待ち構えていて、ドアには『OPEN』と書かれている看板が吊られていた。

　ドアを開けると、これまた上に吊られている金属製の棒状のものが当たってからんからんと音を立てた。

　中には誰もいなくて、しかし俺が廃墟だとは思わなかったのは必然で、薄暗い照明が灯っている店内は古いながら丁寧に整えられていた。

　金属の音が鳴り終わったくらいで俺たちを迎えてくれたのは整えた髭を生やしたマスターでもなく、エプロンと眼鏡を装備した優しいそうなおばさんでもなかった。

　カウンターの奥から飛び出してきたのは、今度はちりんちりんという音を首から鳴らして歩く黒と白で構成された猫だった。

「にゃーにゃー」

　俺たちが挨拶をするよりも早く挨拶をしたその子に負けじと俺たちも挨拶を返す。

「こんにちは」

「にゃーーにゃーー」

　猫からの信頼を得るには、猫の言葉で話すことがいいらしい。

　勇気の振る舞いで相手の反感を買うことははほとんどないので、おそらく今回もこれが模範解答なのだろう。

俺は猫を飼ったことはないのだが、ちゃんとにゃーと鳴くことに驚いた。

　その子はおそらく怖いことは全く知らずに生きてきたのだろう、勇気の足に首のあたりをこすりつけている。

　もちろん勇気は嬉しそうで、その子の尻尾の付け根辺りを撫でている。

　そんなところを撫でるのか。

　喫茶店は喫茶店でも、いわゆる”猫カフェ”になっているそれを俺たちは楽しんでいた。

　さっきまで勇気の足元で目を細めて気持ちよさそうにしていたその子は、急にそっぽを向いてカウンターの奥に歩いて行った。

　さすがの勇気でもその子のハートをつかむことはできなかったらしい。

　カウンターの奥に消えたかと思いきや、今度はエプロンを付けた初老のおじいさんがゆっくりと表れた。

　特に主張するその白くて長い髭は清潔感があって不快に感じない。

「いらっしゃい、わざわざこんな地下までありがとうね」

　ゆっくりとしているのは口調だけではなく、足取りもそうで、入り口にいる俺たちの近くまで歩み寄ってきたおじいさんは、近づいてくるにつれて曲がっている腰を伸ばして俺たちを眺めながら言った。

「お好きなお席にどうぞ、さぁお前さんもおやつの時間じゃな」

　そう言ってくるりと反転したおじいさんはカウンターの中に戻り、棚を開け始めた。

　すると、俺たちを最初に迎えてくれたその子はさっきまでの優美な動きとは対照的な動物的な動きでおじいさんの元に駆け寄っていき、おじいさんの腰以上の高さはある台に飛び乗った。

　俺たちはカウンターに座り、目の前で食事を与えているおじいさんとその子を眺める。

「男前なお兄さんたちは何をご注文かな？」

　その様子を眺めていた俺たちは、カウンターに用意されているメニューに気付かなかった。おじいさんにそう言われてから俺たちはメニューを開いて、俺はケーキセット、勇気はおすすめで！と言っていた。

　もちろん、おすすめ！なんて言うメニューはなくてチェーン店の店員なら不愉快な顔をするであろうそのオーダーを物ともせず、おじいさんは俺たちの注文を受け取った。

　おじいさんがコーヒーを淹れている間の動きもゆっくりだったが、その動きには無駄がなく、素人目に見ても洗練されていた。

　その間に、俺たちの前に順番にケーキを出された。

　出されたケーキだったが、その器にはフォークはついていなかった。カウンターのテーブルを見てもケーキを食べることができそうなシルバーは置いてなかった。

　ちょうどよかったので、コーヒーが入るまで待とうと思っていると勇気も同じ考えのようでコーヒーを淹れている姿をじっと眺めていた。

　その顔は少しニヤニヤして見えて、その黒い目はいつもより光っているように見える。

　コーヒーが入れられている台のすぐ近くでは、食事を食べ終わったその子が丸まって目を瞑っていた。

　淹れ終わると、俺たちのテーブルにコーヒーが置かれた。

　珍しいのは、ソーサーの上にはフォークが置かれている。

　もちろんカウンターテーブルには、砂糖、シロップがお洒落な瓶に入っている。もう一つ金属製の入れ物には角砂糖が入っていたので、俺はその角砂糖を一つだけ入れて、スプーンではないそのシルバーでコップを傷つけないようにかき混ぜた。

「なんでフォークなんですか？」

　俺が思っていたことを代わりに行ってくれたので、俺はコーヒーを一口飲んでから耳を傾けた。

　酸味が強すぎるのが得意ではないので、少しだけ俺の舌には合わなかったがもちろん俺の顔には出さない。味の代わりに豆の香りが鼻と目頭からふっと流れ出るのを感じた。

「その理由が人それぞれで面白いからじゃよ。洗い物が少なくて済むとか、かき混ぜるときに注意して混ぜるからカップが痛まないとか。お前さんたちはどう思う？」

「俺はコーヒーが得意じゃないので、ケーキを混ぜたら少し甘くなるから嬉しいかも」

「ほっほっほ。ケーキを混ぜるのはまだ見たことないのぉ。だが、生クリームだけ載せてウインナーコーヒーにする人もいるからそれと同じかのう」

　コーヒーが得意ではないという言葉に対する不愉快は一切感じられず、逆にその髭をさすりながらおじいさんは笑った。

　おじいさんの後ろの台で寝ていたその子は彼らなりの背伸びを見せて店の奥に消えていた。

得意じゃないと思っていた味だったが、ケーキを食べ進める後にちょうど良い具合に口の中が調整されたのでそれを計算されているのだと感じた。

店を出るために扉を開くと、再びからんからんと音を立てた金属が入ってきたときは違って俺たちを見送ってくれた。

おじいさんはカウンターで「ありがとうね」と言ってくれたので、わざわざ入り口まで見送ってもらうのも大変だと思ったので、その場で挨拶をした。

閉じられたドアに吊られた木製の看板はいつの間に変えられたのか、『CLOSE』という文字になっていた。

辺りは暗くなっていて、俺たちは駅に向かった。

あの後、おじいさんのサービスでもう一杯コーヒーをいただくことができたのでそれを飲み干したくらいで俺たちは店を出た。

おじいさんは自分の話をするのではなく、俺たちの話を聞いてうんうんと楽しそうに聞いてくれた。たまにおじいさんに話を聞いても、帰ってくるのは曖昧な返答ばかりでどこかクイズを出されているように感じた。

しかし、いくら考えてもコーヒーについているのがフォークなのだけは分からない。

いつの間にか時刻は六時を過ぎていて、ちょうど授業が終了して少し経った時間だったから駅のホームは人込みで埋まっていた。そのホームの様子を駅の外から見ていた俺たち———特に俺は雑踏が好きではないので、二人で改札の前にあるベンチに座っていた。人混みを見る限り、おそらく二本分くらいは電車を飽和させるだろう人数がいたので、近くのコンビニで缶コーヒーを買うことになった。すると勇気は「そこのベンチキープしといてくれ」と言って、有無を言わさずにコンビニに向かっていった。

俺はその場に座ったまま携帯を触るでもなく、通りすがる人々を見ていた。

就活中なのだろうか、黒基調のピカピカのスーツを着ている男。

自分の存在を周りにひけらかすかのように甲高い声で会話を行う痛い女の子。

そんな女の子と肩を組んで、いかにもなにかを狙っている金髪の男。

　特に理由もなく見ていたが、人とというのは本当に多様でおもしろい。そんな俺は、駅前のベンチに一人で座っている痛い男でも思われているのだろうか。数人と目があった俺は、相手にはそう思われているだろうという被害妄想をしてか、おそらく目つきが悪くなっていたので、それに気づいた相手はすぐに視線を外した。

　これ以上、変に思われたくなかった俺は人間観察をやめた。

　昼間は真っ白だったその雲は周りと足並みをそろえるように色を灰色に変え、全員が同じ方向に流されていく。

　右へ倣えの精神が嫌いな俺は、上空を漂う大きな存在よりもその流れに逆らって飛ぶ何かわからない鳥類に興味がわいた。

　周りに流されない存在は、やはり美しい。

　すいすいと飛ぶ鳥。

　光も当たらず、見た目は真っ黒なその鳥を眺めていると、どんどんと高度を下げて電線に降り立った。

　周りには、おそらく彼の仲間と思われる鳥が大勢止まっていた。

　興覚めした俺は、その鳥から視線を外して今度は上空で光る尖った月に視線を渡した。

　結局はあの鳥も周りの鳥に追いつきたかっただけだったのだ。

　今度視線を渡した存在は、承知の通り仲間なんてものはいないので、安心して視線を向けることができた。

　しかもこいつは何に影響されるでもなく、必ず同じ方向から出現して、同じ方向に消失していく。

　右に倣えではない、唯一無二の存在だ。

　いつまでも見ていられるその存在から目を離したのは、それに飽きたからではなく、首が先に悲鳴を上げたからだ。

　左に三十度首を曲げて、こきっと音を鳴らす。

　ある程度時間が経ったはずだが、まだ勇気は現れなかった。おそらくこの人の量なのでコンビニも人が蠢いているのだと思う。

　さっきまでやめていた人間観察を再開したわけではなく、そろそろ現れるだろう勇気を探すその行為を、ある存在が後悔に誘った。

　それを認識した俺はなにかに取りつかれたかのようにそれから視線を外すことが出来なかった。

　昆虫採集の標本のように、まるで生きているようだが絶命しているその生物のようになっている。

　俺は忘れていた、その存在を。

なぜなのだろうか。

　昼間は、それが原因でわざわざ学内のカフェを拒んだというのに。

思い出したくないから勇気の提案を強めに断ったのに。

彼女と鉢合わせないために、周りを警戒して歩いていたというのに。

　なぜ俺はここで待つということにその可能性を考えなかったのだろうか。

いや、もしかしたら俺は気付いていたのかもしれない。もしかしたら、と、その希望が心の中にあったから、その可能性を心から無理やり排除していたのかもしれない。

　俺に気付いたその子は、暗くても分かるその色素の薄い目を丸くして俺を見て立ちとどまった。

　それが、答えだった。

　俺が夏休みの間、欲しくて欲しくて、それだけを求めてたまらなかった答えが、今分かった。

　そして、それが分かった今、俺を繋ぎ止めていたリードはもうない。

　持っていた鞄も持たずに俺はゆっくりと彼女に近づいた。

　さっきまでごった返していた人々は一人も視界に入らない。

　駅に向かう人の流れに逆らうように、俺は彼女に歩みを進める。

　やはり、流れに従わないというのはとてもすがすがしい。その感情を与えるのは、流れに逆らったという行為か、彼女の答えをしることができたからか、どっちが原因かなんてもうどうでもいい。

俺は、彼女だけを見つめていた、いや彼女しか見えない。

最後にあった時からは少し時間が経ったが、相変わらず綺麗なグレージュの髪色は保たれている。

少し背が伸びたように見えるのは、低めのヒールを履いているからだった。元々大人びていたとは言っても、ほんのりと薫っていた新入生感は少しも感じられなくなっていて、本当に同級生だとは思えないようになっていた。

だが、本質的なことは何も変わらない。

長い足を上手に扱って歩くさま、肩にかけられたトートバッグを持ち直すときの仕草。

そして、今俺に向けている視線。

いつも笑顔だったその顔は、今は見られないがその視線は何も変わらない。

俺を受け入れている目、少しだけ目を丸くしているのは気のせいだ。

彼女も、俺から視線を外すことはしなかった。

世界が俺と彼女だけになったようだった。

　俺が彼女の前に立った後、まだ止まっている時間を動かしたのは彼女の言葉だった。

「ごめんね、夏は連絡しなくなって。別に嫌いになったとかじゃないんだよ？ただ、ちょっとだけ…ね」

　特に俺は問い詰めたつもりはなかったが、彼女からすると無言で近づいてくる俺は怒っているように見えたのだろう。

「よかった」

「えっ？」

　俺が言った言葉を聞いてあまりにも不思議だったのか、伏し目がちだった顔を急に上げて俺の方を見る。

「本当に良かった、忘れないでくれて」

　俺が伝えたいことは本当にそれだけだった。

　彼女はこの言葉だけでは真意を読み取ることは不可能だろう。

　俺にとってはこの言葉が真理で、これまでのもやもやを晴らしたこの状況を一番簡潔に表すことができる言葉だった。

　俺にとって、彼女はかけがえのない友人なのだ。

もう二度と、大事な友人を失いたくない。それ以上は望まない。

ただ、友人として一緒にいてくれればいい。

本当にそれだけだった。

　これまでに溜まっていたものが飽和して、俺の目からは涙が零れ落ちた。

「え、ちょっ、待ってってば！移動するよ！」

　そう言って、彼女は俺の手を引き、ベンチに置きっぱなしだった教科書も入っていない軽いトートバッグを俺の代わりに持って、駅でも大学でもない住宅街に向かって歩いた。

　周りの人混みは、右に倣えをしない俺たちの行動と行方を不思議そうに少しだけ見て、また興味もないように駅に向かって団体行動を始めた。

　伝えたいことを伝えた俺の体は、役目を終えたかのように言うことを聞かなかった。

呆然として手を引かれるがままに彼女に連れられる。

しかし体全体の動きが止まっているわけではなくて、彼女に連れられて歩く俺の鼻には、心地よい香りが入ってくる。

もちろん俺の手首を握る彼女の握力も感じる、少しだけ湿っている気がする。

　久しぶりに感じるそれらを感じながら、団地の裏にある静かな公園の真ん中にある屋根のある憩いの場に到着した俺たちは、石でできたベンチに座った。

　ここまできてようやく、俺は冷静さを少し取り戻し、手と鼻以外にも感覚が戻るのを感じた。そして、缶コーヒーを買いに行ってくれていた勇気の存在を思い出し、端末を取り出すと、既に勇気からは『お前のコーヒーも俺が飲むからな！ちゃんと話して来いよ！』というメッセージが届いていた。

俺はふふっと笑おうとすると、さきほど流れた涙が頬で固まっている感覚がした。

　明日、コーヒーを買ってやろうと思いながら『ありがとう』とだけ送信し、端末をしまうと彼女はそわそわしながらうつむいていた。

俺の用が終わるのを待ってくれていたようだ。

「ごめん、待たせて」

「全然大丈夫だよ。こちらこそごめんね」

　久しぶりに聞く彼女の声は普段より穏やかだった。

　もちろんさっきまで話していた言葉を全く聞いていなかったわけではないが、耳の機能が復活してからの話だ。

　整えられた短い髪の長さは特に変化はなく、色白な綺麗な肌と色素の薄いその瞳が際立っていて、改めて見ると本当に綺麗だ。

　既に俺はそんな友人の様子を観察できるくらいには落ち着いていた。

「そんな話し方だったっけ？よそよそしくない？」

「謝るときの雰囲気ってものがあるでしょ！」

　俯けていた顔をこちらに向けて、笑顔で彼女は答えた。その笑顔はいつも以上に輝いて見えた。こぼれてはいないがその瞳は滲んでいた。

　一方で俺は、抱えていた荷物を下ろすことができたので、今は肩も軽くなって俺を拘束するものは一切なかった。

　そういえば、彼女が泣いているのは初めて見る。

　彼女はいつも強かった。じゃないと、俺と親しくなってはいないわけだが。

「俺こそ…ごめん。旅行断ったからだよな。別に深い意味はなかったんだけどな」

　深い意味がなかったことはない。

ただそれは彼女にとっては関係のないことで、俺にとってはとても深い意味だったが、その説明をするのはやめた。

　俺に好意を持っているかは確信がないし、それを言って勘違いだったら少々恥ずかしいからだ。

「壮真は悪くないって！私があの後、壮真を避けるようになっちゃって。何度か連絡しようかと思ったんだけど…。いつの間にか時間が経ちすぎて言いづらくなっちゃった。」

　少しだけ声を大きくして、彼女は弁解していたが、あまりにも必死なので俺は少しだけ口角が上がった。

「完全に嫌われたと思ったよ、唯一の友達なのに。」

「それは俺が言いたいよ。嫌われたんだと思ったよ。それか忘れられたか」

　言質として否定が聞きたかったからか、つい俺は冗談染みた口調で最後にその言葉を付け加えた。

　実際に、俺は嫌われたのが半分、忘れられたのが半分くらいの気持ちだったから嘘ではない。

「忘れるってどういうこと！そんな殺生な！」

「嘘だよ。でも、よかったよ本当に。俺も唯一の”友達”だからな」

　俺は少しだけその言葉を強調した。

これは彼女にそれを告げるだけでなく、俺に言い聞かせるという理由もあった。

　それから俺たちは、お互いに夏休みにあったことを話し合った。

　とはいっても、俺はサークルの合宿に行ったか勇気と遊んでいたことくらいで、他には特に大したことはしていなかった。彼女は、「あんなに長い休みなのに何していたのよ。」と笑っていた。お前のことを考えていたのだよとは言わなかったが。

　そういう彼女も、特に大きな事はしていないらしく、家族で京都の実家に帰ったと言っていた。二週間程度帰省していたらしく、弟を連れて市内を観光したらしい。見せられた写真は暗闇の中でオレンジ色に光る五重塔が映っていた。

「こんなに綺麗なのに道路の向かいにはパチンコとかコンビニとかがあるんだよ。」と言って、先ほどの情緒ある穏やかの光とは対照的な、人工的な光が輝いているパチンコ店の写真を見せてきた。

　他にも、清水寺、銀閣寺など有名な観光地を周ったらしくこれまで話していなかった分、時間も忘れて話を聞いていた。

「あ、そうだ。」

　そう言うと、彼女はおもむろに、教科書がぎりぎり入るかわからないトートバッグから小さめの小包を取り出して俺に手渡した。

　薄ピンクの袋で包装されている薄いその小包は、半透明になっているが中身は分からなかった。

「お土産？」

　そう聞くと、彼女は何も言わずに頷いた。特に許可も取らなかったが、俺はその小包を開けた。中には筆で書かれた女性の顔が書かれているものが入っていた。横には『あぶらとり紙』と書いてある。

「あぶら…とり紙？」

　別にその存在を知らんかったわけではない。ただ、それ以上の疑問が上回ったせいで言葉が上手く出なかったのだ。

「いや！いつ仲直りできるかわからなかったからさ！期限のあるものはダメだと思って、それともし嫌われてて仲直りできなかったら自分で使えるから！と思って、決して油がすごいよってわけじゃないから！」

　こんなキャラだったっけ。彼女は少し合わないうちに柔らかくなった気がする。前はもっと男勝りだった。

　座っていたベンチからは立ち上がって、必死の俺に弁解をしている彼女の顔はさっきよりも近くなった。弁解よりも彼女の顔を眺めていた俺に気付いた彼女は頬を赤らめながら俺から距離を置いた。

　おそらく、飴菓子や抹茶とかなら一年以上は余裕で持つだろう。

　それでもなく油とり紙を選択したのは、どれだけ仲が戻るのが先の心構えをしていたのか、それとも仲が直らなかった時に自分が使いたいものにしたのか。

　理由はどうあれ、大学生の男の友人に油とり紙をお土産で渡すその彼女が、この状況のせいでもあるのかとても愛おしく感じた。

「ありがとう。家帰ってさっそく使うよ」

「えっ！『大学生の男に油とり紙かよ！」とか言うと思ったのに！」

　俺の顔の真似をしているつもりなのか全く似ていない。本人でもわかるくらい似ていない。

「ちょっと思った。ってかそう思ったわ」

「やっぱり！あげるかすごい迷ったけど、あげなきゃよかったよー」

「いや、でも嬉しいよ。ありがとう」

「どうしたの？今日ちょっと優しすぎない？」

　それはこっちの台詞だ。言わないでおいてあげたのに。

　やはり合わない時間のせいでお互いの距離感をつかむのが下手になっているのかもしれない。

「確かにそうかもな。まぁでも、もう急に関わり絶つなんてやめてくれよ」

「へへ、気を付けます！」

　彼女はぺろっと舌を出してそう言った。

　別にそんな気はないのだろうが、やはり男が好きなことを把握している。

　そんな話をしていると、気付けば時刻は九時を周っていた。

　暗闇の公園で遊ぶ人はいないが、たまに公園の前を通り過ぎる人々がこちら側に視線を向けるのが暗くても分かる。

　会っていない期間が長かった反動からか、あまりにも時間が過ぎるのが早く感じた。

　俺たちはさすがに長い間座っていた石のベンチのせいで体に違和感が生じたので、帰ることにした。

　大学の最寄り駅からは少し歩いたここの公園は、その最寄り駅と隣駅の間くらいにあるので、俺たちは隣駅まで歩いてそこから帰ることにした。

　先程までは絶え間なく話していたが、歩いている時は二人とも口数は多くはなかった。

　辺りは既に暗く、家の窓の明かりが浮き上がっているかのように見える。

　頭上には、住宅の人工光ではない天然の無数の光が浮いている。

　昼は心地よかった風が、気温が下がり肌を刺す。

　俺たちは二人でその秋の夜を感じながら駅に向かった。

　駅に近づくにつれて、すれ違う人が多くなってきた。やはり、流れに逆らうということはすがすがしい気分だ。

　大学からは俺の家の最寄りの方が彼女よりは近いが、さすがに終電までは遅くならないと思ったので、彼女の家まで送ることを決めた。

　彼女は随分と遠慮していたが、「旅行に行けなかった代わり」というと不満げな顔ながらも納得してくれた。

　いつも溌剌とした声とは違って、おそらく「ありがとう」といったその言葉には返事はしないでおいた。

　彼女の家はいわゆるベッドタウンで、駅前のロータリー周辺にはお店がいくつかあった。そこからちょっと歩くと周りはガラッと変わって、夜は暗い住宅の森になる。

そこからも少し歩くと傾斜ができて、一つ一つの家が大きくなってきた。

気のせいかもしれないが、すれ違う人はみな整った服装をしている気がする。こんな時間なのに。

俺とは無縁な高級住宅街に感嘆していると彼女は笑って、「うちは違うから！」と言っていたが、それは常套句なのだろう。俺は信じない。

到着するとそこはやはり大きな家で、正面に見える二階の部屋にはそれぞれにバルコニーが付いている。

特徴的なのはバルコニーに挟まれた中央の建物が時計台のようになっていて、大きな時計が時間を刻んでいる。

誰が見る時計なんだと思ったが、庭にはバスケットゴールが設置されているので庭から一目で時間が見えるためのものなのだろう。

この家が大きくないというのはあまりにも苦しい言い訳なので、嘘をついたことを問い詰めると、お得意の舌をぺろっと出しておどけて見せた。ゆっくりとし過ぎたせいか、終電は迫っていた。

「本当にごめんね、こんなところまで送ってもらっちゃって」

「なんか家に電話したらリムジンとかでお迎え来てくれそうの家だけどな」

「そんなことないから！」

「もう信用できないぞ」

「ほんとだから！わざわざありがとうね」

「今日だけな、お土産のお礼だよ」

「さっきと言ってること違うじゃん」

「どっちでもいいよ、じゃあまたな」

「また秋の履修おしえてね！」

　返事を声に出すと、喜びも一緒に飛び出てしまいそうだったので俺は何も言わず、背中で返事をして来た道を引き返した。

　坂の上に位置するここからは、俺たちが下りた駅が見えていて、一際光っている。

　頭上では、無数の光を率いるかのように月が輝いている。

　つい夕方まで暗かった俺の心がこの空なら、あの満月は——これ以上は考えるのはやめた。

彼女は友人だ。それ以上でもそれ以下でもない。

　自分を納得させる。やはりそれは少し寂しい気がしたが、今の俺はこれで十分だった。

　俺はポケットから端末を取り出して、勇気に『仲直りできたわ』とだけ送信した。

　彼女から、既にメッセージが何通か入っていたが、あえて読まずにそのままにして帰路についた。

　それから俺たちは春学期以上に一緒に授業を受けるようになった。

　あの日帰った後、すぐさま俺たちはお互いの履修を送りあった。ほとんど同じ授業を取ってはいなかったが、まだ履修の変更期間内だったので変更することができた。

　朝は教室棟の前で集合し、一緒に授業を受ける。空き時間ができれば、裏にある大きな木の下でアイスコーヒーを飲む。

　それの繰り返しだった、特に大きな出来事はなかったがそれで十分だった。

つくづく、大学に何か得ているものがあるのか疑問に感じる。実際それを感じるのは俺だけではないようで、俺が知っている中でも数人は大学を辞める人も出ていた。

別に彼女と受ける授業が楽しくないというわけではない。

　現実は、高い金を払って何かを学ぶのではなく、学歴というブランドを買っているだけだ。それも大半は親の金で。

　俺はというと、奨学金を借りているから別に罪悪感もないが。

　唯一その日常とは違っていたのが、サークルの活動だった。十一月に控えている文化祭で毎年出店しているらしく、俺たちはその活動にも顔を出していた。

　仮引退だって言って、号泣してた三年生たちもサークル室に結構顔を出していたので”仮”という言葉は本当に便利だ。

　もちろん勇気も顔を出していたが、俺が彼女といるときはあまり深く関わってこなかった。時折目が合うと、ピースをしながらウインクをしてくるので、その意図はまるわかりなのだが。

　だが別に彼女と勇気は不仲なわけではなく、サークルのメンバーとして友人になっていた。ただ、俺と彼女と勇気が三人でつるむことはなかったというだけだ。

　勇気は文化祭がよほど楽しみだったのか、授業をすっぽかしてまでサークル室に顔を出すことが多くなっていた。

　もちろん彼女は、基本的に授業は休まない俺と一緒に行動をしているので、休まずに授業に出席していた。

　恒例になったじゃんけんは、気温も低くなってきたので肉まんとココアに代わっていた。

　さすがにそれは俺の口には合わないことが明白だったので、それを二セット買うなんてことはしなかった。

　充実した時間は流れるというよりは飛んでいるようで、いつの間にか文化祭は目前に迫っていた。

　そして文化祭前日の夜、あたりは暗くなってきている中、大学内の中心にある芝生の広場では前夜祭が行われていた。

　明日から使用されるだろうスポットライトが贅沢に壇上を照らしている。

　軽音楽部の前夜祭ステージ、学園祭委員など集結して肩を組んで盛り上がっている。

　俺は、その広場が良く見える校舎の四階の窓からそれを見ていた。そこがサークル室だ。

綺麗な建物でできた教室棟とは違うこの古い建物は、いくら私立大学といえどサークル棟までにも学費を割かないらしい。もちろんそれは俺も賛成だし、そんなところにお金を割く必要はないと思う。それに加えて、俺はこの一味違うサークル棟が好きだ。

さっきまで賑わっていたこの部屋も、みんな前夜祭に参加している。

　ステージに一番近いところで周りの男と肩を組んで跳ねているのが勇気だ。ここからでもよく分かる。

　俺は窓の桟に肘をつきながら、大勢の学生から感じられる熱気と上空から振り下ろされる月光を、中立の立場で感じていた。

　別にそんなに高い位置にいるわけではないが、俺よりも低い場所にいる人が多く見えるから相対的に高く感じる。

「なーにしてんの」

　遠くの広場から発せられる音を受け止めるために働いていた耳に、想像よりも近い場所から聞こえたその音は大きくはなかったが俺を驚かせた。

振り返ると、鉄製の引き戸を開けたままで、彼女が立っていた。

俺は月の光を見たかったので、この部屋の電気を消していた。それが原因で廊下の電球はスポットライトのようになっていて、贅沢に彼女を照らしていた。

「びっくりした、那奈こそなにしてんだよ」

「前夜祭出てたに決まってるでしょ！みんな出てるよー、勇気なんか一番前で飛び跳ねてたよ」

　手を口に当てながら満面の笑みでくすくすと笑っている。やはりここからじゃなくても勇気は分かりやすいらしい。

「なんかみんながこの部屋出ていった後、電気消したら窓の外にすごい綺麗な満月が見えて――で、今に至る」

「ロマンチストだね」

「なんか馬鹿にされてるみたいで腹立つ」

「してないから―！」

　那奈はそう言うとさっきまで開けていたドアを閉めて部屋に入ってきた。

　古い建物だから引き戸は建付けが悪く、閉め切っても隙間から光が差し込んでいる。

　この時間にこの部屋に入ってくる人なんているはずがないのに彼女は鍵を閉めたので、必要ないと言おうとしたが、目の前にそれを裏切った人物がいるので、何も言わないでおいた。

　この部屋はそこまで大きい部屋ではない。長方形の形をしているサークル部屋で、中央には長机が二つ並んでいる。そしてそれを囲むようにパイプ椅子が並べられている。あまり部屋の大きさの感覚は優れているわけではないが、十畳から十五畳ぐらいだろうか。細長い部屋の形をしているからあまり大きくは見えない。

　そして長方形の短辺側にドアがあり、その向かい側が窓になっている。

　ドアの横に設置されている照明のスイッチには触る様子もなく、暗闇の中、窓から入り込む月明かりだけを頼りにこちらに歩みを進めてきた。

　俺から見ると、月の青白い光は部屋を照らしているのではなく彼女を照らしているようで、白い肌がそれを受け止めて青白くなっていた。

　月の女神が俺の横に来ると、隣の椅子を窓側に向けて並んで座った。

「え、ほんとだ。ここ良く見えるね。すごい穴場じゃん」

「だろ、最初は月が見るためだったんだけどな。ここでも前夜祭は見えるし人混みにも紛れないしいいよな」

　女神も全能の神ではないらしく、知らないことはあるらしい。

　俺のこの言葉に喜びの顔は見られなかったので、彼女は月とは無関係の女神らしい。

「なんで教えてくれないのー！私がここに来なかったら独り占めするつもりだったんでしょ」

「いや、別にそういうつもりじゃないって」

　彼女は頬をぷくっと膨らませたわざとらしい顔を俺に近づける。色素の薄い大きな目は月明かりを吸収してさらに薄く見える。その瞳はしっかりと俺を捉えているようで、反射して映る俺の間抜けな顔が映っている。小さな鼻とは相対的に、膨らませている頬は頬袋に食料を貯めている小動物のようだ。

「へへ、まぁ結局は見つけれたからいいんだけどね。もしかして後夜祭も綺麗に見えるかな？」

「確かに、次はもう満月じゃないかもしれないけどね」

「え？今日満月じゃなくない？」

　そういう彼女は先ほどまでは少し離れた広場に広がる景色を見ていたのと一変して、顎に手を添えながら上を見て考えているようだった。確かに、そう言われてみると少し欠けているような気もする。

別に俺は満月を特別視しているわけではなく、雲一つなく広がるこの夜空に光るその存在が綺麗だと感じていただけなのだが。

「確かに、ちょっと欠けてるかも」

「別にちょっと欠けてるくらい大して変わらないけどね、別に綺麗なことには変わりはないし」

　本当に俺と考えることが似ている。

「後夜祭の時はちゃんと教えてよね！」

「わかったよ、忘れてなかったらな」

　「もう、またそういうこと言う」と言っている彼女はとても嬉しそうだ。最近は慣れていたが、やはり女の子と仲良くしていると、普通に女の子と付き合えたらなという想像をしてしまう。

　女の子と仲良くしていると、と言ってもその対象は彼女ぐらいなのだが。

　サークルの女の子にはさすがに常套句は言えないのだが、あまり仲良くならないようにしている。悪口ではないが、色恋沙汰に興味津々な子たちが多いように見えるので、当たり障りのない話しかしない。

　もちろん彼女はそう言った子たちとは違う。仲良くなれたのは彼女の行動のおかげだが、俺にとっても彼女を迎える理由は十分にあったようだ。

　実際に、今もそうで文化祭前日に二人で、暗い部屋から月を見ているなんていう状況はいくら恋愛経験がない俺でもうってつけのシチュエーションなのは容易に判断できる。

　おそらく世の中の男はこのシチュエーションを利用して、目当ての女の子を自分のものにするのだろうが、あいにく俺が同じことをしてしまうと、全くの逆効果になってしまうのでそんなことはできない。

　だから、俺たちは友達だ。

　他に友達がいても俺と一緒に授業を受けてくれる彼女。

　大勢の中、俺がいないことに気付いて俺を探してここまで来てくれる彼女。

　気が抜けば、彼女の友人としての行動を好意と受け止めてしまいそうだ。

　こんな風に自分を言い聞かせるのも何回目だろう。そろそろ言い聞かせるというのも限界が来そうな予感がする。

　出会ってから七ヵ月、正直言うとこんなにも俺と仲良くしてくれる彼女は、実はほんの少しは俺に好意があるのかもしれない考えたことがある。

　もちろん俺のことを好きになった女の子は俺のことを忘れてしまうということは自覚している。

　しかし、それも実際に俺が実際に確認できたのは高校一年が最後だ。だからか俺は、もしかしたら彼女は忘れないのかもしれないという自分にとって都合のいい願望を持ってしまうことがある。

　彼女は俺に興味があるのかもしれない、でももしかしたら彼女は忘れないかもしれない。もし、それが実際にあったとしたならば俺は——そこまで考えて俺は思考を巡らせるのやめた。むやみに希望を持つのは良くない。

　思い出せ、あの日のことを。俺はもう二度とあんな思いをしたくない。あんな思いをするくらいなら俺は友達のままでいい。

これまで積み重ねてきた思い出が一瞬にして無に還る。

子供のころ好きだったおもちゃが壊れても、小さいころにそれで遊んでいた思い出は当時の状況よりも美化されて残っている。

しかし、当時好きだった子との思い出はそれが壊れてしまった後は、逆にそれが鋭利な武器に代わって俺を苦しめる。

当時の思い出が楽しければ楽しいほど、その子のことが好きであれば好きであるほど、その武器は切れ味を増して俺に切りかかる。

だから、もしそれが壊れてしまったときのために、俺は出来る限りその刃を研がないように慎重に過ごす必要があるのだ。

これ以上特別な思いを抱かれることのないように、ただでさえ少し縮まりすぎてしまったこの距離感をこれ以上踏み込まないように保つ。

昼間に潜む控えめな月のように、俺の本心は公にすることはなく、俺も気づくことができない心の奥底でひっそりと潜んでいる。

それが、じっとしているのではなく、蠢いているとは気付くこともできなかった。

急に立ち上がった彼女は、部屋の中に設置された小さなロッカーを開いた。

暗闇に慣れた目のおかげでさっきよりもすいすいと歩いている。

中から取り出したのは、棒状のチョコレート菓子だった。そういえば、来週はそのお菓子の日だった。

特段好きなお菓子があるわけではないが、ごそごそと漁っている彼女を見て何を取り出すのか少し楽しみにしながら見ていた。そして取り出されたそれを見て一瞬だけ恥ずかしさを抱いてしまった。

しかし、それは彼女にはばれないようにひた隠し、「おーそれ好きなんだよね」と、棒読みで返事をしてしまった。もちろんネタのつもりはない。

彼女は格別の笑顔で俺を見ていたが、その笑顔に吸い込まれてしまうと危うく友人ではなくなってしまいそうだったので、出来る限り見ないようにした。

彼女がこの時期のこの時間に出したそのお菓子の真意は分からないし、究明もしなかったが、一つずつ分けた小袋の中身が先になくなったのは俺の方が先だった。

7

　俺の大学の文化祭は四日間開催される。

　前半二日間と後半二日間で出店する模擬店が総入れ替わりし、合計で約三百店舗出店する予定らしい。

俺たちのサークルは前半組で、朝からテントの準備や荷物の搬出などがあるため、始発で大学に向かった。

ちなみに後半に出店する団体は俺たちが使用した場所を交代で使うため、テントの準備は必要ないが代わりに片付けの役割が待っている。

　大学に向かう車内はまばらで、スーツを着てうとうととしている人もいるが、ほとんどはおそらく今日のために昨日染めた不自然なほど明るい髪色の大学生だ。

　おそらくそれは

　車窓にはまだ光はほとんど入っておらず、遠くの方でにじみ出るように橙色が広がろうとしている。

　基本的に俺は一番後ろの車両に乗る。

ふと左を見ると、生気が抜けたような顔をした車掌が車両内を見ていた。

目的はそれではなかったのだが、彼の表情はおやつを盗み食いしているのがばれた猫のような表情に切り替わった後、すぐに冷静さを取り戻して進行方向とは反対側を向いた。

俺の目的はそこに広がる遠ざかっていく景色だったので、ちょうどよかった。

　この景色を見ることで、自分がどれだけ移動したのかが把握しやすいから俺はよくこの景色を眺める。もちろん、子供の用に窓に張り付いて眺めたりはしない。

さっきまで停車していた駅がどんどん加速して遠ざかる。

線路の脇に設置されている、おそらく電車用の信号は赤に光っているところしか見たことはない。

中間車両にいると常に直進しているように見える電車だが、実は緩やかにカーブしている。特に都市から少し離れた場所にある大学に向かうこの路線はたまに心配になるほど傾いている時がある。

線路脇に伸びた大きな植物が風になびかれて俺を見送る。

外ではけたたましい音を鳴らしている踏切の音を少しだけ受け取りながら通り過ぎる。

　後方から得られる情報を、一つ一つ噛み砕いていた。

「おーはーよ！ちゃんと起きれてるね！」

　急に出現した前方からの情報をうまく処理できず、人間としての本能で俺は前を振り向いた。

　全く、こいつは俺の後方から声をかけることが趣味なのだろうか。

　つい先ほど駅に停車していたわけでもないが、彼女はそう言って俺の横にどしんと座った。

向かい合うように設置されている座席の内、この列に座しているのは俺だけだからよかったが、他の人がいれば迷惑な座り方だ。まぁ彼女は馬鹿ではないのでちゃんとその点を考えてるのだろうが。

よくよく考えてみると、彼女の最寄りは俺が乗る最寄りよりもとっくの前に通り過ぎており、彼女が出現したタイミングからは「？」が浮かんだ。

　おそらく、俺が、駅前の設置された浅いお皿の水をなめている猫を見つめていた時くらいだろう。俺が向けている暖かい目とは対照的な鋭い視線を向けられた気がしたが、彼らはお話をしないので本心は分からない。

「おはよ、今日は最寄りから乗らなかったのか？」

「乗ってたよ、前の方の車両にいた。集合時間的に始発に乗ってるのかなぁって気づいたから前から順番に探してたんだ」

俺たちは授業を受けるときも学校の教室棟の前でよく待ち合わせるが、別にそれは約束をしているわけではない。

　始まりは那奈が俺のことを待ち伏せして一緒に授業を受けようとしていた名残だ。

　何が言いたいかというと俺たちは基本的に時間を指定して待ち合せたりはしないということだ。いつも彼女は俺よりも先について俺を待っている状態だ。今回は始発だったからそれができなかったのだろう。

「連絡入れろよ、わざわざ確認しなくても」

「別に一緒の電車じゃない可能性もあったからさ、別に連絡するほどでもないじゃない？」

「そんなもんかねぇ」

「そんなもんだねぇ」

　俺の仕草、口調を真似しながら彼女はそう言う。ただ、わざとらしく口をとんがらせているところが癇に障る。

「ここの車両、絶対うちの大学のやつらばっかじゃん。見てあの髪の毛、赤すぎでしょ血で染めたのかな。もしかしてあの色とりどりの髪色が見たいからこの車両にしたの」

「つっこみどころが多すぎて処理できないんだけど。とにかくどっちも違うとだけ言っとく」

「ちゃんと答えてよー！そんな雑に処理しないで！」

「朝から元気だなほんと、まだ日も出てないから朝でもないわ」

「昨日は別に早く寝たわけじゃないんだけどねー。朝すごい早く起きたからもう体は起きてるんだよ。朝というか夜中だねあれは、三時くらいだったかな」

　ほとんどとれていない睡眠時間とは思えないほど彼女の顔は元気で満ち溢れているようだが、化粧の奥に隠れる目の下の黒い部分はしゃしゃり出ていた。短い毛の先が丁寧に整えられていることから、早くから起きて準備をしていたことが本当であることがうかがえる。

　冬の厳しさが始まりかけている十一月の上旬、陽が出るのもだんだんと遅くなってきている。遠くの方で滲んでいた光は先ほどよりも主張を始めていた。

　それと同時刻に俺たちは目的の駅に着き、大学への道を歩いていた。

今日は、いつもはあまり通ることがない駅から大学直通の通路を通っている。直通というと、一番近い道のように思えるが、うちの大学は駅に並行して南北に長くに位置しているためそうではない。

　俺たちがいつも通う経済学部の教室棟は南側に位置しているため、北側に向かって接続されている直通の通路よりも、商店街を通って正門に入り、南に下るのが一番早い。

　ちなみにこれは彼女から教わったのだが、京都では南に向かうことを『下る』という表現をするらしい。逆に北は『上がる』というらしい。俺は彼女から前にこれを聞いて、随分納得したので、それ以来は意識して使うようにしている。

　言葉から想像がつきやすいので使いやすいと思ったが、方向感覚が鈍い人間は地図が北を向いているという前提がないため、伝わらないことも多い。ちなみに勇気には伝わらなかった、彼も完璧人間ではなかったらしい。

　俺たちの高額な学費——いや、俺と、その他生徒の親の金で建設されたこの直通の通路は、辺りの築年数がかさんだ家々とは対照的に、新設されてばかりで綺麗な造りになっている。接続先の一号館までは常に屋根が設置されているため、雨が降っても濡れる心配はない。ただ、俺たちは使用することがほとんどないため、経済学部の人間だけでもその通路の建設分だけ費用を返してほしい。

　今日俺たちがここを通っているのは、出店する模擬店の場所がこの通路の接続先の一号館側に近いため、この道を使用している。

「ここのエスカレーター便利だよねー。あの商店街もエスカレーターにならないかな」

「ここは傾斜が急だからエスカレーターだけど、商店街はそこまで傾斜がないからエスカレーターというよりはベルトコンベアだけどな」

「なんか出荷されるみたいでやだね」

「珍しく同感だわ」

　授業直前に登校すると、学生が敷き詰めになるこのエスカレーターも、まだ日が出てすぐだからエスカレーターは稼働していない。なぜいつも使うことがないエスカレーターが式詰めになっていることを知っているかというと、教室棟への最短経路を求めている時の恩恵だ。

動いていないエスカレーターを横目に、俺たちはすぐ隣にあるまだ人がまばらな大階段を登った。

　登りきると、すぐ目の前には一号館の入口がある。普通なら一号館の中を通り過ぎるのが一番近道なのだが、生憎ここの自動センサーも稼働しておらずドアは俺たちを受け入れてくれない。

　仕方なく校舎外の通路を利用して、目的の場所に向かった。ここは既に大学の敷地内だが、おそらく学園祭関係の搬入があるせいか明け方にも関わらず車の通りが多かった。

「車いいなぁー。私のこれも乗っけてってー重たいよー！」

「だから持ってやるって言ってんじゃん」

「それはいい、壮真の方が重いし」

「別にもうすぐそこだから大丈夫だって」

「じゃあ別にもうすぐそこだから大丈夫！」

　いつものトートバッグではなく、今日は大き目の黒いバックパックを背負っており、手にはコートを購入したときに入れられてるような大きい紙袋を持っている。中にはカセットコンロなど、学園祭で使うものが敷き詰められている。

先週、サークル内で必要なものを確認した時に彼女の家がなんでも持っていたため、このような状況になっている。

　別に黙っていれば誰かが準備していたのに、と思っていたが彼女はそういうことはできないタイプだ。

　か細くて白い手で持っているその茶色い紙袋を逆の手に持ち替えて彼女は気丈を振る舞う。まぁ、もうすぐそこだから大丈夫か、と思い彼女から荷物を奪い取ることは諦めた。

　実際のところ俺は、いつものトートバッグに加えて両手に、ガスボンベが所狭しに入れられたビニール袋を持っているので、彼女の紙袋を持つと言っているのは男としての虚栄心から出たものなのだが。

　彼女は隣で、昨日の音楽番組で一位を取っていた流行りの音楽を口ずさんでいるぐらいだから本当に大丈夫なのだろう。

「お！壮真と那奈おはよー！」

「おっすー、早いな勇気」

「おはよー。はー重たかったーこれ明日持って帰るの嫌だなぁ」

「俺は家がすぐそこだからねー、始発という概念がないのだよ！」

　おそらくここが俺たちの販売場所なのだろうが、まだテントも張っていないのでただの学内の通路の端に一人で座る勇気が俺たちを迎えながら言った。他にも、座っている人はいるが他の団体の人だろう。

「まだ、勇気以外は誰も来てないんだな」

「まぁ、テント設営は俺たちがするって言ったからね！二回生はもう少しゆっくり来るんじゃないかな？」

「俺それ聞いてないな。いつの話だ？」

「私も知らないよー」

「昨日の前夜祭の後、壮真も那奈もいなかったからね」

「なるほどな。そんなことがあったのか」

「そうそう。だけどさっき気が付いたんだけどさ、俺たちのサークルって他のサークルと兼部してるやつ多いじゃん？だからもしかしたら人数があまり集まらない可能性ある」

「つまり？」

「テントが張れない」

「何人いればいいの？」

　俺と勇気の神妙な空気を和らげるかのように、那奈は俺たちに顔を近づけながら言う。

「八人だね。テント担当のやつに顔を効かせてなんとか六人」

「それくらいは集まらないか？」

「わからないね、こっちを優先してくれるかどうかは」

「最悪を想定しないといけないってことか」

「まぁ、最悪それぞれのテント設営が終わった後、こっちに来てもらうってことになるだろうね」

「結構きついよな」

「だね」

　うちの大学の学園祭は生徒だけで企画・運営・資金調達を担っているので、教授や学校側は一切を手出ししない。唯一手出しするのが、学園祭の日程の授業について、休講の申請を行うというだけだ。しかもこれはあくまで申請であって強制ではない。

　そのせいもあってか、学園祭を快く思わない教授も多く、大学側からの申請を拒否して授業を行う教授もいる。まぁ、そういう教授の情報は、基本的に大学生のソースの分からない情報網に引っかかるので、その教授の授業を取る人はよっぽどのモノ好きしかいない。

　空は既に明るくなっていて、朝特有の涼しくて心地よい風が吹いている。気温自体は寒いが、日が差していて気温以上に暖かい。

　とは言いつつも、少し外にいた時間が長くなってきたせいで、ぶるぶると震えだした俺たちは近くの自販機で暖かい飲み物を買った。

　俺は少しだけその缶の温もりを手に伝えた後、ステイオンタブを引っ張り上げて一口飲んだ。中身がぬるくなるのが嫌だから、すぐ開封するのがこだわりだ。

　あの後、勇気がグループメッセージで呼びかけた際に、他に来れる人がいないことが判明した俺たちは他のサークルの準備が終わるのを待つことにした。

　三人の温もりの元がなくなった頃、俺たちの方に歩いてくる集団が見えた。

俺たちの出店する場所は学内のメインストリートからは少し逸れた場所にあるので、今ここを歩く人はこの通路に出店する団体の人か学園祭を管理している本部の人間しか通らない。

「よっ！困ってるらしいじゃんー。って、あ！持ってんのかよー！」

　その軍団を率いているのは凪原先輩で、いつもの黒いギターケースは持っておらず、代わりに小さめのビニールに数本入った缶コーヒーを俺たちに渡しながら言った。

「おはようございます凪原先輩！」

　やはり一番に反応したのは勇気で、手を前に差し出されたビニールを「ありがとうございます！」と言いながら受け取っていた。俺たちも立ち上がって、続いてお礼を言う。

「いやー、さっきグループ見たらさ、なんか集まり悪そうで困ってそうだったから代わりに俺らのところのやつら引き連れてきたわ。これだけいたら足りるだろ？」

「いち、に、さん…——すごい大勢…。本当にありがとうございます」

　凪原先輩の後ろには六人の男がいて、那奈を省いてもテントの設営ができる人数だった。凪原先輩はうちのサークルは仮引退ということになっていたが、他に所属していた軽音サークルはまだ活動があるらしく、学園祭のステージで披露するためにこんな朝早くから来ていたそうだ。後ろに並ぶ男性陣は軽音サークルの一回生らしい。

　季節外れの薄着をしている彼らは、おそらくさっきまでテントの設営を行っていたのでおでこは光が反射している。

　屈強な見た目をしているわけではないが、袖から覗く腕は体に反して筋肉がついていて、とても心強い。

　やはりどこに行っても慕われているんだとつくづく感じた。俺たちは凪原先輩だけでなく、学年でいうと同学年の男性陣にお礼を言って、テント設営を行った。

　設営をしていると、他のサークルの準備が終わったうちのサークルのメンバーが助けに来てくれたが、軽音サークルの子たちは「特にまだ予定がないので」と言って最後の完成まで手伝ってくれた。

　完成後、凪原先輩たちは「また買いに来るなー」と言って、もうすっかり朝になって人通りも増えてきた道を中央のステージの方に歩いて行った。

俺たちは、お礼に軽音サークルのステージを見に行くと約束した。

　テントを設営し終わってからは特に力仕事はなく、机のセッティングや調理環境の準備をした。その時には、集合時間が遅く定められていた女性陣も到着していたので、すぐに準備は終わった。

女性陣で唯一早く来ていたのは彼女一人だけだ。

彼女は昨日から男性陣の集合時間に合わせてくると言っているのを聞いていたので、俺は特段驚かなかった。

　出店の準備が終わって、俺と勇気は出店場所の裏にあるベンチに座っていた。

　周りでは待ちに待った祭りを目前に、どんどんと上がっていくボルテージとは共鳴せず、なぜか既に得られた達成感を噛み締めていた。

そろそろ学園祭が開始する時間だ。遠くに見えるメインストリートではサークルで揃えられた服装の学生だけでなく、やけに気合が入った服装をした人々が行き交っている。

おそらく模擬店を出店する団体の人ではなく、学園祭を楽しみに来た人だ。もうすぐで中央にあるメインステージで開会式が行われるので、それに向かっているだろう。

　俺は右手を少し上げて、袖を引っ張って時計を見る。時刻は九時ちょっと前を指している。別に左利きというわけではないが、腕時計は右手につけている。

　もちろん、少数派なりのポリシーだ。

　凪原先輩からもらった本日二本目の缶コーヒーだったが、もらった直後にテントの設営が始まったため、サークル名が入ったパーカーの腹の部分にあるポケットに入れていた。

既に温もりはなくなっていて、逆に冷たいスチールで体の熱が奪われる。

　目の前で口をこれでもかと開いて欠伸をする勇気だったが、突如発生した普段聞くことのない爆発音のせいで閉じていた目が見開かれた。開会式で花火があげられたのだ。

　上空では青い空に加えて、雪のようにきれいで形の整った雲が均等に配置されていて、綺麗なコントラストが表現されている。その均等な雲を遮るかのように花火の煙が流れていくが、それも決してその景色を邪魔しているわけではない。

「始まったねー、私早くから起きてたからお腹すいたよー」

　いつの間にか俺の隣に座していた彼女は何もなかったかのようにそう言う。

「俺も俺もー。模擬店回るために朝ごはん抜いてきたからな！」

「後から集合組の女の子たちが最初頑張ってくれるって言ってたから、お言葉に甘えて模擬店回っちゃおう！」

「そうするか」

「食うぞ食うぞー！」

　さっきまで襲っていた睡魔を振り払おうと勇気は一番に立ち上がる

　そう言った直後、ベンチに置いていた勇気の端末からおそらくデフォルトの設定になっている着信音が鳴った。

こいつやりやがった。

「もしもーし、え！わかった向かうわ、ちょっと待っててー。」

　勇気は端末の音を切って、耳に当ててそう話した。

「ってことで、友達のサークルの準備が上手くいってないみたいなので、手伝ってくるわ！また後で合流するから先模擬店回っててよ！」

　そう言って雑踏となっているメインストリートに向かって飛び込んでいった。

「勇気って本当友達多いよね。正直勇気が助っ人求めたらテント設営の人数揃えるのとか簡単だったよね」

「まぁ、そうだろうな。」

　勇気は、着信音は出さない。これは高校からだ。

高校の授業中にマナーモードに設定し忘れて、着信音が鳴って恥をかいた経験があるからだ。先生はそこまで厳しくなかったので、「音切っとけよー」というだけですんだが、勇気が設定していた着信音が勇気の好きなアニメの音楽だったことでみんなに笑われていた。

　普段はアニメを好きなことを誇っていて、オタクと言われても気にも留めないが、さすがに音が一つもなく、シャーペンが机を叩く音しか聞こえない環境でその音楽が流れることはさすがの勇気にも相当なダメージだったらしい。

　つまり、さっきの勇気の着信音はおそらく着信を告げる音ではない。

　専ら、俺と彼女を二人にしたかったのだろう。

　つくづく抜け目のない奴だと思う。後でとっちめてやろう。

　日が経つにつれて勇気は俺たちがくっつくことを狙っていると感じることが多くなってきた。

　別に悪気はないのだろうが。もしそれで彼女が俺に好意を芽生えて俺のことを忘れたらどうなるかを考えているのだろうか。

あいつは馬鹿ではないどころがむしろ賢い。

スマートというよりはクレバーという方だが。

だから、そのことは考えていないわけではないだろうが、それ以上に友人として恋愛をしてほしいのだろう。

まぁ、もしそれで彼女に忘れられても俺は勇気を責めないし、勇気のせいとは思わない。

　もしかしたら、俺を普通の男と接するのと同じように接してくれているのかもしれないな。声には出さず、心に訴えかけた俺だったが、やっぱり後でとっちめてやろうという心情には変化がなかった。おそらくその時の俺は口角が少しだけ上がっていただろう。

　勇気の期待には応えられないが、彼に対する好感度はもう上限を超えていた。

「じゃあー行こっかー！お腹すいたよ！焼き肉焼き肉！」

「おそらく模擬店で焼き肉売ってるところはないぞ？」

「えー！うそ！んじゃ駅前にある焼き肉屋さんいかない？」

「本末転倒すぎだろ、お前何しに来たんだよ」

「確かに、学園祭だった。」

　「まず開店してないよ」とは言わなかったが、十分な理由で論破した。彼女はうっかりとした様子で舌を出す。お得意のやつだ。

「とりあえずパンフレットもらいに行こうか。模擬店の場所とか書いてるだろ」

「賛成！そこの正門近くのテントだよね」

　俺たちは正門近くのテントに向かうと、俺たちが要求するよりも早くパンフレットを手渡された。テントの奥には鉛筆で書かれた『1日2000部！』という文字が張られている。パンフレットにもノルマというものがあるのだろう。

　誰かが言っていたが、うちの学園祭は、例年八万人くらいは来場すると言っていたのでそのノルマは簡単すぎやしないかとは思ったが、そんな単純な話ではないのだろうか。

俺たちはそれぞれに一つずつパンフレットをもらった。

「お、豚汁いいね！ケバブなんてところもあるよ！」

「すごいなぁ、普通学園祭ってフランクフルトとかじゃないの？」

「多分模擬店で一番人気のあった店舗には賞金が入るから気合入ってるんじゃないかな？それにしても色とりどりだよね」

「俺豚汁飲みたい」

「私も」

「じゃあ、行くか」

　俺たちが売っているパンケーキとは反対側に位置している豚汁の店は経済学部の教室棟の近くだったので俺たちは地図も見ないで向かった。

通りは人が敷き詰められているのと、初日だから張り切っている大学生の販促をかき分けられる自信がなかったので、一度大学の外に出て、向かうことにした。

　圧倒的な流れに逆らいながら俺たちは正門から外に出て、外側を大回りするように目的地に向かった。さすがにこの道を通るのはこの大学の生徒くらいなので、ほとんど人はいなかった。

「勇気ってさ、もしかして私のこと避けてる？結局私たち三人でなんかしたことなくない？」

「そうか？あいつが友達多すぎるだけだろ。俺も最近は勇気と遊んでないからな」

「そっかー。ならいいんだけど、なんかそんな気がしてさ」

　彼女もやはり鈍くはないようで、勇気の行動に疑問を抱き始めていた。後で言ってやろう。

今の彼女は朝とは違い、両手を拘束するものがなかったのでいつもより大きく手を振って歩いているような気がする。

「あいつが人嫌いそうな人間か？」

「聖人と言っていいほど人とのかかわりが上手いよね。どんな嫌な奴でも仲良くなるじゃん」

「だろ、だからお前のその悩みは杞憂だよ」

「すごい納得」

　彼女の悩みが解消されたくらいで俺たちは教室棟の近くに到着した。

　いつもは正門を通って学内を通って教室棟に向かうので、この辺りから学内に入るのは滅多にない。

　正門に比べると、貧相で錆びた小さな門を通り抜けて俺たちは学内に入った。

ここからはもう庭のようなものなので、マップも見ないで適当にぶらつきながら探すことにした。

「豚汁を見つけるのが、先か私が空腹に負けるのが先か」

「あ、ケバブじゃん」

「え、食べる！」

「嘘だよ」

「死を持って償え」

　これでもかと憎悪を向けてくる彼女の顔に恐怖なんて一ミリもなく、可愛さの権化だ。

　まだこの辺りは始まったばかりだからかメインストリートほど密度は高くない。

　彼女は迫りくる男たちを仏頂面で避ける。俺は露出の高いコスプレをした女の子の勧誘を愛想笑いで避ける。

　通り過ぎた後は後ろから、「あのカップル美男美女すぎるだろ」っていう声が聞こえるが多分俺たちのことではないだろう。

　目当ての模擬店に到着した俺たちは豚汁を二つ頼んだ。

　学園祭指定のプラスチックに入った豚汁は、人が密集して高くなった温度の中で飲むには少し熱く、食べにくかった。

どこか座るところを求めてうろついたが、目ぼしいところは全て先客がいた。

「あそこいかない？」

「あー、確かに。あそこならここの学生じゃないと知らないから少ないかもな」

　俺たちにとって代名詞を使えるようなスポットは一つしかない。

　ほとんど人がいない第三号館の自動ドアは俺たちを受け入れた。

中は必要最低限の照明しかついていない。エレベーターホールは電気がついていることから、この祭りの中授業をしている教授と生徒がいるのかもしれない。

　エレベーターホールを通り抜け、どんどん照明がなくなっていく廊下を俺たちは通り過ぎる。この辺りは窓もなく、外からの光も差し込まないのでとても暗い。

　片手に持った豚汁をこぼさないように、足元に気を付けながら進む。

　「気を付けろよ」と言ったときに隣に目をやると、ちょうど歩きながら豚汁をすすっているところだったので鼻で笑っておいた。彼女は馬鹿にされたことをキーキー言っている。

　裏口から外に出た俺たちは久しぶりに目の前の大きな木と対面した。

　久しぶりにきたこの場所は、季節のせいですっかりと模様替えがされていた。

　散らばっている葉が少なくなっていることもそうだが、木を囲うように設置されていたベンチは少なくなっていた。

　俺たちがいつも座っていたベンチは幸い残っていたので、いつものように二人並んでそこに座った。

夏休みが明けてからは昼休みや時間が空いてるときはサークル部屋にたむろしていたから、春学期以来だ。

「久しぶりだなー！なんでこんないいところなのに人少ないんだろうね」

「俺も久しぶりだわ。ここは三号館か四号館の裏口からしか来れないからな」

夏は、この木の広がった枝葉が太陽を遮り、納涼な空間を作り出していたのだが今はそれのせいで肌を刺す寒さだ。

　先程まで人混みに揉まれていたせいで火照っていた体も急速に冷却されていく。少し時間が経ったせいで熱々ではなくなった豚汁をすすりながら真上に広がる枝葉を見ていた。

　建物の間をすり抜ける風が枝葉を揺らす。

　周期的に吹く大き目の風は俺たちの会話を少し邪魔するくらいの音量で葉が擦れ合っている。

「お腹すいたー！足りない！」

　ちょうど周期だったその音量を気にしない声量で、プラスチックに入った豚汁を豪快に飲み干した彼女は言った。

「豚汁の感想くらい言ってやれよ」

「美味しい！けどお腹すいた！」

「すごい馬鹿みたいだけど大丈夫か？」

「ケバブ買ってきていい？」

「俺のも買ってきて」

「おっけー！」

　周りに誰もいないからか、チボリ公園の兵隊さんみたいな敬礼を決めてその女の子の兵隊さんは走り出した。

　さっき通ってきたドアを開けて暗い廊下に消えていく。

それを少しの間眺めていると、逆にその暗闇から現れる何かが見えた。

そういえばお金を渡していなかった。俺は財布から札を一枚取り出してもう一度ドアの方を見た。

お金を受け取っていないことを忘れて彼女が帰ってきたのかと思ったがそうではなく、服装で彼女ではないことが判別できた。

　まぁ、秘密基地っていう場所でもないから人も来るとは思っていたが、さすがに一人で豚汁を食べているのを見られるのは恥ずかしい。

　俺は取り出した札を丁寧に二つ折りしてポケットに入れた。

　彼女ではないことは分かっていたので、目が合わないように見ないようにしていたが、この人がいない空間の中で唯一存在するそれを全く意識しないという器用なことはできず、横目でドアが開く様子を見ていた。

　光の少ない廊下から日差しが差し込む外へ出てくる女性。

　少し離れたここから、かつ横目の俺は背が高いくらいの情報を得ることが出来ないはずだったが、雰囲気がその存在を認識させた。

　しかしその雰囲気は、一瞬で俺を確信づけた。

横目で見ていた俺はいつの間にかその存在を正面に受け止めて、固まっていた。

　釘付けとはまさにこういうことなのか。

　目だけでなく体全体がその存在から逃げることはできなかった。手の先から足の先まで神経の伝達が伝わらない。いや、もはや脳からの信号が発せられていない。そんな死人のような状態の俺だが、そんな俺とは正反対に血流を送るポンプはいつもより激しく動いている。

　今俺はしんとした世界にいる。音など何も聞こえない。風の音、校舎の向こうで聞こえる人の声、さっきまで聞こえていたはずなのに今はそれを感知できない。

頭上にある大きな木から落ちたその子供たちは俺の前をゆっくりと通り過ぎ、落ちていく。時間が止まっているように感じるが、世界は止まっていない。

　ただ、俺が世界に置いて行かれている。

「ここいいよね！私も最近知って、よくここに来るんだ――って、どうしたの？私の顔になんかついてる？」

　彼女は手に持ったチョコバナナをかじろうとしてそれをやめた。

　風でなびく水色のフレアスカート、こぎれいな服装を邪魔しないキャップからはそれもまた風になびいていて本来の色よりも明るい綺麗な髪が出ている。人混みのせいか手には茶色のコートをかけている。

　逃げることを許されない俺だが、声を出すこともできず、そんな俺を不思議に思ったのかその女の子は顔を近づけながらそう言った。

　さっきまで香っていた優しい自然の香りとは違う、人工的で、しかし優しいその香りが俺の鼻を刺激する。

　おそらく、普通の男ならそれを喜ぶか、初対面なのに近くまで顔を近づける女の子に疑心を持つだろう。

　だが、俺は普通の男ではない。

　これはあらゆる意味でだ。

　俺は初対面であって初対面ではない。

　いや、俺“は”初対面ではないというべきだ。

　彼女は俺とは初対面なのだ。

「ねぇ、どうしたの！もしかして鬱陶し…そうな顔ではないけど」

「あ、いや…ごめん」

「ごめんって！初対面の女の子に対する一言目がそんなことある？これでも私モテるんだよー」

　“初対面”

　この言葉ほど俺に現実を突きつける言葉はない。

　自分でも理解していたはずだが、あまりに悪意のないその言葉が俺の心を抉る。

　加えて、言っている相手が相手だった。

　研がれに研がれたその鋭利な刃が俺を躊躇なく切り裂く。

　俺が刺されたのは肉体ではない。心だ。

流れるのは血ではない。

　目から涙が零れ落ちる。いや涙なんかじゃない、これは血だ。血が赤いなんて決まっていない。

俺は今心が痛い。

痛いときに出るのは血だ。

悲しくなんかない。

嬉しくもない。

恐怖でもない。

　これは痛みだ。

　やはり、どんな状況でもこのポンプは体に血を循環させる。どれだけ胸を押さえつけても、そんなことは気にせず臓器は働きをやめない。

　もちろん目からも出血が止まらない。

　しかし、声は出てくれない。

「え、ちょっと！ごめん！そんなつもりはなかったんだけど…」

　彼女の顔を見れない。

顔を上げられない。

血でぼやけて視界は晴れない。

返事がしたくても声にはならない。代わりに喘鳴のような呼吸で返事をしたがそんなことは彼女には伝わらない。

「え、もしかしてやぱい？ちょっと待って！」

　彼女は手にかけていたコートのポケットに入れていた携帯を取り出して焦った手つきでダイアルを押す。

　たった三桁。だが彼女はかけることはできなかった。

「ごめん、こいつたまにこういうことあるんだ。大丈夫だから気にしないで」

　さっきまでとは違うサークルのパーカーを着た勇気が彼女の携帯を抑えながら言った。

「行くぞ、壮真」

　俺は先ほどよりはましになった体をフル稼働して勇気の肩につかまる。

　別にどこも悪くないはずなのに肩を借りないと動けない。

俺が刺されたのは本当に心だったのだろうか。気づいてないだけで俺は肉体にも刺されたのかもしれない

さっきまでとは違って、激しく動いていた音は聞こえない。

　肩を借りて三号館に向かう。後ろを振り向くことができないが、おそらく俺たちの後ろ姿を見ているのだろう。会って早々相手が泣き出すなんて普通思わない。

彼女の気持ちを考えただけでいたたまれない。

　刺された傷はまだ治っていないにも関わらず、その傷を自分で抉る。

「大丈夫か、壮真」

「あぁ、もう平気だ」

　体はもう平気だ。

　だが頭が働き始めるとともに先程突きつけられた現実が、より明確なものとなって俺を突き刺す。

さっきよりもじっくりと深く、ゆっくりと。

「なんであそこがわかったんだ？」

コーピング力に欠けた俺は、それから逃避するように勇気に質問を投げかける。

「友達のサークルがこの辺で店出してるんだよ。そいつにパシられて店の呼び込みしてたんだけどさ。あの子自分から呼び込まれに来てくれたんだよ。そんときに似てるなって気づいて、ばれないように後つけてたんだよ。んで、あの状況に出くわしたってこと。もちろん話は聞いてたから状況は把握してるよ」

「俺あいつの顔見せたことあったっけ？」

「いや、ないよ。高校の時に友達に聞いた。壮真と仲良かった女の子知らないかってね。壮真とその子のこと知ってる子はたくさんいたわけじゃなかったけど、一年の時に転校した女の子って言ったらその子くらいしかいなかったから特定することができたんだよ」

「なるほどな。別に言えば写真くらい見せてやったのに」

「あんまり掘り起こしてあげたくはなかったんだよね」

　これが自然とできるから勇気は慕われるのだろう。

　別に俺は勇気に掘り起こされたからと言って激昂したりはしないが。

「ありがと。だいぶ落ち着いたわ」

　これは気丈に振る舞っているわけではなく、本当だった。

　あれだけ冷静さを失っていた俺だったが、勇気のいつもと変わらない穏やかな対応に冷静さを取り戻していた。

　窓から差し込む光が眩しい。

　いつのまにか俺は外界の情報を取り込むことが出来ている。

ここは三号館の四階で、フロアに一つだけある大講義室の前にあるエレベーターホールのベンチに座っている。ここは北側と東側が一面窓になっているため、照明はついていないがとても明るい。

　俺は自分の生存を確かめるように並んだ窓の内の一つを開けた。

　少しだけ開いた窓からは、辺りで販売されている食べ物のにおいが混じった風が流れ込んでくる。大騒ぎをしている人の声と、目視はできないが中央のステージで行われているであろうバンドが聞こえてくる。それは、アレンジも何も加えていない最近流行りのバンドの完全コピーだ。

　確か、結構前に音楽テレビで一位を取っていた気がする。

　さっきまでの俺とは対照的になぜか俺は穏やかな気持ちになっていた。

　“初対面”

この言葉が持つインパクトは俺にとっては莫大だった。

だが、俺は彼女に忘れられていただけなのだ。

　忘れられていたということは俺に現実を突きつけるとともに、彼女は忘れていただけで悪くはないという真実を与えてくれた。

　彼女は、俺が好きだったあの頃から何も変わっていない。

　黒いキャップから出る長くて綺麗な髪、運動をしていないのか透き通ったように白く綺麗な肌、俺が覚えている彼女とは外見は少々変わっているようだが、やはり彼女は彼女だった。

　彼女は俺が好きだった彼女だ。

　ただ、人生の膨大な記憶の中の俺という小さな欠片を落としてしまっただけだった。

「よかったよ」

「よかったのか？」

「あぁ、忘れていてくれて。逆に覚えられてたら、あいつは最後の日に友達との約束を忘れいたくそ野郎になってたからな」

「冗談を言えるくらいにはなってるから大丈夫だな。」

　そういう勇気の顔はいつもより穏やかになっていて、安堵の表情が感じられた。

「そういえば、さっき那奈が走っていったけど大丈夫か？」

「やっば」

「焼き鳥買いに来てくれよー！多分友達がサービスしてくれるからー！」

　既にさっき心を支配していた力は弱くなっていた。

　エレベーターホールの横にある階段を駆け下りる俺に、こんな時でも勇気は販促をしてくる。俺は振り向く代わりに右手を挙げてそれに応えた。

　階段を何段か飛ばして降りる。

　最後の階段を降り切って先程の裏口に行く。

　あれからどれくらい時間が経っただろうか。おそらくそこまで経っていないだろうが約束をすっぽかすくそ野郎にはなりたくない。

　ましてや、唯一の女友達だ。

　まだ、さっきの女の子はいるかもしれない。

　だが、もう彼女は俺の知っている彼女ではない。俺が一方的に認識している女の子と同じだ。

　テレビの中のアイドルと同じだ。ただ、それが画面を隔てただけか記憶を隔てただけかの違いだ。

　裏口を開けると、大きな木に見守られるようにベンチに座る女の子がいた。

　大きな枝葉が、うつむいているその女の子を慰めるかのようだ。

　裏口が開く音に気付いた彼女はこっちを見て、普段よりも大きく目を開けてから、今度は逆に閉じて満面の笑みを浮かべた。

「冷めちゃったじゃん！もぉ！」

　待っていたのは、那奈だった。

　両手に持ったケバブはどちらも手を付けられておらず、綺麗なままだ。

　もちろんそれを持っている那奈も、綺麗だ。

「ごめんごめん。ちょっと勇気に連れて行かれてさ」

「え、勇気来てたんだ。用事はもう大丈夫なの？」

「あぁ、重要なことじゃなかったからな。」

　意識はしていないが、自分の声がいつもより穏やかに発せられるのを感じた。

　両手が塞がって抵抗できない那奈のポケットに、準備しておいた千円札を入れてから那奈のケバブを片方受け取る――つもりだったが、那奈はそれを避ける。

　言葉にはしていないが、『札を抜かなければ渡さない』と目が語っている。いや、体全体からほとばしっている。

　だが俺もそれには負けない。

　いつもなら負けているかもしれないが、なぜか今だけは負けたくなかった。

　俺たちを見守る大きな木の周りをぐるぐる逃げ回る那奈を俺は追いかける。いつまでも逃げる那奈。俺は追いかけることをやめたりはしない。

　那奈はちょくちょく後ろを振り返る。

　俺がどこまで近づいているか。俺がいるか。俺の存在を確かめるように。

　那奈は、振り返ってくれる。

　いつまでも追いかける俺の存在を確認してくれる。

　それが嬉しかった。

　あの子は、振り返ってはくれない。

　俺がどれだけ追いかけようと、俺がどれだけ叫ぼうと彼女は振り向いてはくれない。彼女にとって、俺は叫んでいるただの他人なのだ。

　だが那奈は俺を見てくれる。

　いつまでもそれを実感していたくて俺は追いかけることをやめられない。

　彼女が足を止めたのは、俺の記憶を失ったからではなく体力が原因だった。

「追いかけすぎ！しつこいぞ！」

　俺から逃れることを諦めた那奈は片方を俺に奪われて自由になった手を膝に当てて肩で息をしている。

「那奈も…逃げすぎだろ…」

　俺も既に満身創痍だった。

　そんなに本気で走ったわけではないのだが、呼吸を整えるのに時間がかかった。高校の時の体力はもう少しも残ってはいない。

　あの時の体力は知らず知らずのうちに俺のことを忘れていた。

　幾分か経って、息が整わないながらテンポよく進んでいた会話が急に止まったのを感じた。その違和感のせいで、まだ力が入らないだらんとした首を持ち上げると那奈は俺の方を見ていた。

　ついさっきまで上下に動いていた肩は既に止まっていて、代わりに大きく目を見開いている。その色素の薄い瞳は俺を吸い込むようだった。

　俺はそれに安心した。

「…………」

「…え、何？」

　言葉を発さない彼女に見かねて、つい俺のほうが先に言葉を発してしまった。

「…那奈って言った？」

「…え？」

「今那奈って言ったよね？」

「那奈って…言ったか？」

「言ったよ！絶対！」

「絶対って分かってるんならわざわざ聞くなよ」

「えへへー」

　愛らしい笑い方をしながら彼女は頬を赤らめている。

　これだけ一緒にいたのに、こんな彼女は初めてで体をくねくねと動かしている。

　別に意識をして呼ばなかったわけではないが、自然と俺は女の子と距離を近づけないための防衛手段を取っていたのだろう。

少しでも刃を研がないために。

　俺は照れ隠しに手に持ったケバブを一口かじる。

走り回った後だが、特に見栄えが悪くなっているわけではなかった。大学生が販売しているとは思えない綺麗な見た目に、出来合いのものであることに気付く。

　暖かさは既になくなっていて冷たい。

ケバブが冷めたのか、それとも俺の体温が上がっているのか。

結果的に寒さを与えるケバブなのに、俺の心は温まっていく気がした。

同じように満面の笑みを浮かべてそれをかじる那奈と俺の頭を撫でるように、風になびく枝葉が見守っている。

　その日のその後、俺が彼女に会うことはなかった。

　彼女というのは那奈ではない。

　もう、彼女に未練はない。

別に元々あったわけではない。ただ久しぶりに会って高揚してしまっただけで、未練など元からなかったのだ。

　もし次にあったら、朝のことを謝ろう。

一日目が終了して、一度店をたたむ。楽しい学園祭と冬目前にした秋ということが相まって、より一層陽が落ちる早さを感じる。

　店をたたみ終えて、一日の売り上げを算出していると辺りはもう暗くなった。

西の方の天地の境界では、まだそれはしぶとく光っている。

「おつかれー。どうだった。あの子にあった？」

「おっす。いや、あれから会ってないな」

他のサークルの店の片づけをしていた勇気がサークルのパーカーを着替えながら言う。

「そっかー。もしかしたら明日も来るかもね」

「もう俺には関係ねぇよ。ただの他人だ」

「『那奈』がいるもんね」

「盗み聞きか？趣味悪いな」

「そんなー人聞きの悪い。」

「俺が周りに言いふらして上がりに上がり切ったその好感度を落としてやってもいいんだぞ。」

「もしあの子がまだあそこにいたらまた発作起こしてたかもしれないのにー」

「発作なんか起こしてねーよ」

「嘘だー。壮真呼吸もままなってなかったぞ。ひゅーひゅー言ってたぞ」

「うるせぇ」

　実際にあの時の俺は何も考えられなかったし、本当に発作を起こしていたようだったのだろう。こっぱずかしさが拭えない。勇気は目を小さくした笑顔でわははと笑う。

「ちょっとー男二人でさぼってんのかー！」

　日も暮れて肌を刺す寒さなのに、コートは来ておらず、汚れたサークルパーカーの袖をまくって白い肌を見せた那奈が近寄ってきて言った。

「俺は向こうで片付けしてきたんだよ！さぼってるのはこいつだけだよー」

「さぼってねーよ。今日の反省をしてたんだよ、明日今日よりも売るためにな。」

「あんた今日なんもしてないでしょ。あんた明日は店当番だからね！」

　朝の出来事の後、昼は那奈と一緒にメインステージで軽音のステージを見ていた。その後は店に帰るはずだったのだが、通りがかった勇気の店に群がる団体の男気ゲームに引きずり込まれてしまったのだ。

　その時の勇気は今思えばにやにやしていたが、まさかあの会話を聞かれていたとは思わなかった。

　危機意識が足りなかった。

「って、あれは勇気のせいだろ！俺は店に帰るつもりだったんだよ！ってか那奈も乗り気だったじゃねーか！」

　二人とも何も言わない代わりに、口をとがらせてにやにやしている。

　やっぱり、こいつらは仲がいい。三人でいることは少なかったが、俺がいない時は普通に仲良くしているのだろう。勇気が不必要な配慮さえ無くせば三人で仲良くできるのにな。とは思うが同時にそれは本心ではないことに気付く。

　やはり俺は那奈のことを友達以上の存在だと認識しているのかもしれない。ただ、”以上”は境界値を含むので、俺たちは友達だ。

「今日はさすがに疲れたから帰ろうかな。明日はテントの設営がないから今日よりはゆっくりできるよねー」

「俺も俺もー。さすがに疲れた。なんか飯買って帰ろうかな。こういう時実家暮らしを恨む」

「俺は家帰って美味しいママのご飯食べよー」

　もちろん俺は親のことをママとは呼ばない。

最大の嫌味をぶつけたかっただけだ。実際それは効果的で、本気で恨めしそうな目をしている。

正直今から家に帰って、家事をしなければいけないなんて悪いが俺にとっては考えられない。

那奈の家は、ご存じの大豪邸なのでおそらく家政婦さんとかご飯を作ってくれているのだろう。今更だが、彼女から高貴さなんか微塵も感じたことがない。

前に訪れた家は何かの間違いだろうか。

　片付けが一通り終わった後、勇気とはその場で別れ、それぞれ帰路に着いた。俺と那奈も朝早くから活動していたので、どこにもよらずに駅へと向かった。

　特に俺は、いつもの半分くらいしか開いていない瞼を必死に持ち上げていたので、その代わりに口は動かなかった。それは那奈も同じで、いつもは途切れることのない会話も今日は始まりもしなかった。

　駅に着くとその人混みに圧倒されたが、その波が途切れるまでどこかで時間をつぶす体力もなかった俺たちは、その人の波に流されることを選んだ。何も考えられない俺たちはまるで海月のように、自分の意思もなくその人の波に流された。

8

　今日はすごくいい目覚めだ。

　カーテンからは明るい光が隙間を塗って差し込んでいる。差し込んだ光は室内を照らし、電気は付いていないのに部屋は十分に明るい。

　その明るさに見合わなく、部屋はとても寒い。

寝る前にタイマーをセットしておいた暖房はとうに消えていて、今温もりを保てているのは俺を包む毛布のおかげだ。俺はその毛布のありがたみを再確認するように毛布にくるまり、布団からは出ず少し寝がえりを打ってまた目を閉じた。

　俺はこのうとうとしている時間が一番好きだ。

　寝てしまうと、つい一刹那前は夜だったのに気づけば朝になっている。時間を無駄にしてしまったようなあの感覚が嫌いだ。

タイムトラベルで未来に行く方法はなかなか証明されないことが不思議でたまらない。おそらくほとんどの人間がそれを経験しているだろうし、後はそれを論文として文章にするだけではないのか。

そういえば論文には証明が必要らしいが、俺がそれの体現者になってやれる。

　そんな時間に比べてこの時間は、体が休まっていることを実感できる。

　そして、少しするとけたたましい音が鳴り響き俺の眠りを妨げて現実に引き戻すのがいつもの流れだ。俺はもうすぐ来るだろうその召喚を恐れる。

　…だが、それは来ない。

　いつもアラームをかけなくても基本的には同じ時間に目が覚める。だが、その至福の時間を味わうためと、万が一のためにアラームをかけている。

オレは起き上がってベッドサイドに置いてある、黒い目覚まし時計を手に取る。まだ焦点が合わない両目を叩き起こしてピントを合わせる。

　短針が見えない。まだ寝ぼけているのかと瞼を無理やり開いてもう一度見る。だが、まだ短針は見えない。ローマ数字で書かれた時計。物心がついた時から使っているこの時計のおかげで某有名ゲームのナンバリングも間違えることがなかった。

長針はXIIを指している。時計回りにI、II、III…またXIIに帰ってくる。もちろんその後はまたIだ。

目はもう起きているはずなのに、短針が見えないことが理解できない。その疑問が頭の中を埋めるとともに、俺の頭はそれに呼応して働き始める。

そしてその結論が今度は体を働かせる。そしてそれは働いているはずの頭を置いてけぼりにするほどだった。時計をベッドに投げ捨てて俺は部屋を出る。

誰もいなくなり動きがなくなったこの部屋で唯一その時計の秒針だけが動いている。

一周した秒針に呼応して、重なっていた時針が少しずれた。

　遅刻を悟った時の電車の中は本当に苦痛だ。

電車は急いではくれないし、ただ無機質に、己の仕事を全うするだけだ。

月曜一時限目の魚の目をした法学の教授のように、ただやらねばならないことをやるだけだ。

　だからと言って走って行っても結果は今よりも悪くなるので俺は電車に乗る以外の選択肢はないのだが、通勤ラッシュを過ぎた時間で座る場所が有り余っているのが逆に俺の心を焦らせる。

気づいた時点で連絡はしていた。

学園祭だから特に俺がいないことで滞ることは特にないだろうが、遅刻する人というレッテルを張られることが俺は耐えられない。

　一度高校の部活に遅刻した時、それは集合時間を勘違いしていただけだったのだが罪悪感から二週間は校舎の周りを走っていた気がする。

　最後の方先生は俺を見て笑っていた。

　別に他人に厳しいわけではないし、強制をするわけではない。だが俺の中で、遅刻をするというのは自分を許せない。

妙なこだわりだが、一種のポリシーだ。

　もちろん、高校一年のあの日も俺は時間通りに行っていた。

あの時は、彼女が時間よりも早く出ただけだ。

約束のこともきれいさっぱり忘れていたのだろうが。

　満員電車に乗っていると、目的の駅までがものすごく遠く感じる。まだかまだかと待ち構えても、なかなか到着はしない。

　だが、今はそれ以上に長く感じる。いつもよりもゆったりとした空間だが、心の中はすし詰め状態のように苦しい。

「真面目過ぎるのか…」

　自分でもさすがに厳しすぎるとは思う。だがこういうのはなかなか自分では治せないものなのだ。

　いつもは眺めている電車の軌跡だが、今はそんなものではなく電車の行く先が気になる。

「珍しいじゃん遅刻なんてー」

　当たり前のように登場する那奈は、がらがらの車内で唯一立っている俺の隣に来てそう言った。

　いつもは整えてある髪の毛だが、今日はところどころ毛先が自由に生きている。それを隠すようにキャップをかぶっているが、やはりそういうのは隠していても分かってしまう。

昨日と同じサークルのパーカーを着ているが、昨日汚れていたシミの部分が少し薄くなっているからちゃんと洗っているのだろう。

ちなみに俺はそれどころじゃなかったのでただのパーカーだ。

「なんでお前がいるんだよ」

「あんたと同じ理由だよ。あんたメッセージ見てないの？」

「そんなの見てる暇ないに決まってるだろ。遅刻してるのに」

「電車の中は急ぎようないでしょ」

　正論をかまされた俺はそれ以上何も言わなかった。

那奈もそれは正論だがそういうわけではないことを理解しているはずだ。

「ってかあんたより先に連絡してたからね、私。それにも気づかないなんてどれだけ慌ててるのよ。『二人揃って何かしてたのー？』とか言われてるわよ」

　那奈は自分の携帯の画面を俺に見せながらそう言った。

「だからそんなの見てる暇なかったんだよ。お前のせいでさぼりだと思われたじゃねーか」

「見てる暇も何も、送信する時に目に入るでしょ。私こそあんたのせいでさぼりだと思われたじゃないの、先に起きたの私だし」

「寝坊に先も後もないわ」

　那奈はいつもより薄めに乗った化粧で、ははっと笑っている。先程まで落ち着かなかった俺だが、いつの間にか那奈の笑顔を見るくらいには冷静になっていた。

　相変わらず那奈は俺の精神安定剤のようだ、常備したい。

　ポケットにも入れず、手に握りしめていた端末のロックを解くと確かに俺よりも先にグループで遅刻を伝えていた。絵文字やスタンプを使ってみんなに謝罪の気持ちを伝えている那奈とは違い、俺の連絡は本当に業務連絡のようだった。もちろん俺も謝罪をしているが、さすがに俺が真面目過ぎた文章だったのでほとんど会話には上がっていなかった。それはそれでありがたいのだが。

　忘れられる怖さを知っているはずなのに、今だけはみんな俺の存在を忘れてほしいと願っている。

「昨日帰ってからすぐ寝たのになぁ」

「だから臭いのか」

「はっ！朝ちゃんと入ったから逆にいい匂いだし！」

　長くない髪を俺に嗅がせるように頭を振る。さすがにその長さでは匂いを飛ばすことは難しかったようで、ほんの少しだけシャンプーの匂いが届いた。

「昨日入ってないことは否定しないんだな。匂いもあまりしないぞ」

「がくっ」

　振っていた頭を、今度は柳のように垂れさせて悲しみを表現している。

「言っとくけど、いつも入らないわけじゃないからね！たまたま昨日は疲れて眠っちゃっただけだから！しかもベッドじゃなくてリビングのフローリングで寝たから！」

「必死過ぎると逆に怪しいぞ。よくこんな寒いのに布団にも入らずに爆睡できるな」

「床暖はついてたけど、さすがに寒すぎて起きたらもう時間過ぎてた」

「動物かよ」

「人間です！人間も動物だけどちゃんと理性あります！」

　こんな会話は別に珍しくなかったが、今の俺にはありがたかった。

　さっきまでは目に入らなかった外の景色が鮮明に見えるようになってきた。電車の軌跡をのぞき込むとそれは青い空から逃れているようだった。逃げても逃げてもまた新しい空色が俺たちを迎える。

　どこまで行ってもその青からは逃げられない。

　それはまるで俺が宿命から逃げられないのと似ている。

　逃げて逃げて、逃げたその先には何があるのだろうか。

　この青い空のように逃げ続けたら、いつかオレンジ色に変わって、その後にはグラデーションのような群青色の空が迎えてくれるのだろうか。

　俺が背負う宿命に対する悩みは絶えないが、さっきまで急いでた時は違い、今はもう少しだけこの電車に乗っていたい気がした。

「「本当にごめんなさい！！」」

　俺たちは電車の中で決めておいて二人同時に謝った。

「いやです」

　他の子たちがみんな「気にしなくてもいいよ」とか言っているなか、こいつだけは本当に俺たちに突っかかる。

「「本当にごめんなさい」」

　さっきみんなに謝罪をした時とは違って目と声に皮肉を込めて言ったのだが、これは特に打ち合わせもしていないが那奈と共鳴した。

「うそうそ！ごめんって！」

　俺たちの圧に負けた勇気はいつのまにか立場が逆転していて、なぜか俺たちが謝られていた。

「っていうかなんでこういう時に店番してるのよ」

「だって壮真の必死な形相見るの面白いじゃん。高校の時も話題だったよ、なんか遅刻したときにものすごい顔して謝ってたって」

「そのために店番してたのかお前」

「目的を達成できてよかったよ」

　さっきまで店番でホットケーキを焼いていたのだろう、タオルを頭に巻いたスタイルで話していた勇気がそのタオルを外して話し始めたので、本当に俺の形相が見たかったからなのだろう。

　人混みのせいもあるが、火に近い場所で作業していたからか少しだけ汗が光っている。

「まぁ、遅れてきたのが悪いからな」

「素直じゃん。別にみんな怒ってないよ、壮真は真面目過ぎなだけだな」

「そうだよ、壮真は真面目過ぎ。びっくりしたよ、本当に遅刻嫌なんだね」

「那奈はもう少し悪びれなよ！」

　勇気のその言葉に那奈は照れ笑いでごまかす。薄い化粧だからか頬の赤らみがわかりやすく見える。

「ってことで、壮真と那奈は店番ね。今日で出店終わりだからちゃんと売ってよ！」

「「はーい」」

　多分これは那奈が俺の台詞を真似したのだろう。少し俺に遅れるように被せて言った。俺は那奈を見たが、那奈は口を尖らせて俺から目をそらす。

「よし、売るぞー！」

「壮真は焼くの！なんであんたが売る側なのよ」

「だって熱くない？」

「文句言わないで焼く！遅刻したんでしょ！」

「焼かせていただきます」

　おそらく見る人から見れば痴話げんかの

ように感じたのか、他にいたサークルのメンバーはにやにやしながらテントを離れていく。

結局テントに残ったのは俺たちだけになった。

「先輩たち、おごってやるから一緒に店周ろうっていっぱい後輩連れて行っちまったよ」

「聞こえてたよ。私もほしいって！」

「行かせないからな」

「うぅ。この扱いの差は…」

「遅刻したかしてないかだな」

「納得せざるを得ないな」

　そんな話をしている間にも、ホットケーキを求める人の列ができていく。さっきまで作ってくれていた作りおきがあるからまだ耐えれているが、明らかに二オペでは足りていない。

俺たちは必要最低限の言葉以外は交わさず、作業に集中した。元々用意された生地を二つのフライパンに流し込む。まだ暖まり切っていないフライパンは生地を受け入れていないのかなんの音も発しない。

　那奈はというと、既に作り置かれていたホットケーキと代金を交換しながら左見右見している。お金のことなので、責任があるのか那奈も慌てているように見える。

　前髪の隙間から流れ落ちる汗を腕で拭い、俺は作業を続ける。

　ついに作り置きはなくなって、焼き上がり待ちをむかえると那奈は一段落着いたようで、受付を放り出して裏に回ってきた。

「お客さんいっぱいだよー。さすがに二人はきついねー」

「よく一人で回してたなあの数の人を。俺は焼くだけだから急ぎようがないけど」

「作り置きだからお金もらって渡すだけだからね。シロップとかもセルフだから。あ、セルフ台のやつ補充しないと」

「受付一人で大丈夫か？」

「大丈夫大丈夫！逆に作るほうこそ一人で大丈夫？」

「フライパンが二個しかないから急ぎようがないんだよな」

「これから魔のおやつタイムが来るね」

「さすがそれまでには帰ってきてくれるだろう…」

　那奈は結構楽しんでいる様子だったので、特にヘルプを求めずに俺たちはそのまま店番を全うした。

　実際に、太陽が一番近くなるころにはみんな帰ってきて、仕事を変わってくれた。先輩たちはごめんごめんと言って食べ物をたくさん買ってきてくれていた。

　那奈は「遅刻したのに…」と言って、目を潤しながら言っていた。

　フランクフルトに焼き鳥、ザ・学園祭といったラインナップが揃えられていて、お互いお昼を食べていなかったことに気付いた俺たちは遠慮なくそれに手を付けた。

　テントの中が騒がしくなってきたので、俺たちはテントを出た。

　密度が高くなってきたのもあるが、もうすぐ中央ステージで凪原先輩の曲が始まる。

　右手の袖を引っ張ると、そこにはいつもはつけられている時計はなく、そこでようやく時計を忘れていたことに気が付いた。

　代わりに端末で時間を確認すると、その時間はもう迫っていたので、テントから逃げるように広場へ向かった。

「どこ行くの？」

　既にテントを飛び出していた俺だったが、急に服を後ろから引っ張られた。

　それも裾をちょんちょんと引っ張る上目遣いの小悪魔とかではなくて、パーカーのフードを強めに引っ張ってにやにやしている閻魔だ。

「痛い痛い。凪原先輩のライブだよ、そろそろ始まっちまうから」

「私も行く！なんで誘ってくれないのさー」

「急いでたからそれどころじゃなかったんだよ、さ、行くぞ」

「もう遅刻はできないもんね」

　メインストリートは相変わらず人で溢れていて、二人で並んで歩くことはできなかった。人をかき分ける俺の背後を上手についてくる那奈ははぐれる心配はなさそうだったが、思わず手を引いてしまいそうになった。

　明日は、音楽の業界ではそれなりの知名度を持ったプロのバンドのライブがあるらしいが、それのチケットの売れ行きが芳しくないのか、必死にチケットを売っている人がいる。

　俺たちももちろんその標的になって、危うく二人分買わされそうになったが那奈のおかげでそれは避けることが出来た。

　さっきまで笑顔で俺たちに営業をしていた、その学生は急に顔を変えて、俺たちのことなんていなかったかのように販売を再開した。

「なんなのあいつ、売れなきゃいいのに」

「顔に正直に出過ぎだよな」

　これもどこからの情報かわからないが、チケットが余るとその分の赤字は委員会で補填になるらしい。

　そんなことになったら学祭終了後に達成感なんて得られるのだろうか。

　営業と販促をかき分けた俺たちはようやく中央の芝生に着いた。

　一昨日の夜は、前夜祭が行われていたこの広場は学内で一番大きい芝生の広場だ。

　今はステージで演奏をしているのは凪原先輩ではなく、おそらく後輩だろう。昨日の朝に設営を手伝ってくれていた人が数人演奏している。

　広場も、休憩をする人でいっぱいだが、その割にはあまりステージに耳を傾けている人は多くない。あくまで休憩のスペースという認識なのだろう。

　ステージの脇に設置されたタイムスケジュールでは、ちょうど五分後に凪原先輩の演奏が始まるらしい。

　『brave』と書かれたバンド名が十五時から演奏の予定となっている。

　俺は初めて凪原先輩のバンド名を訊いた時、先輩にとって勇気が特別な存在であった理由が分かった。

　それでも、勇気が今のように凪原先輩に一目置かれているのは、彼自身によるもの方が大きいだろうが。

　勇気がバンド名を知ったのも、新歓の直後に凪原先輩のライブを隠れて見に行った時だった。小さなハコだったが、人はぱんぱんに入っていて、想像していたバンドのレベルを凌駕していた。別に隠れるつもりはなかったのだが、あまりのファンの多さに俺たちは凪原先輩には声をかけることはなくハコを抜け出したので、先輩がそのことを知ったのはサークルの合宿の時だ。

　「言ってくれよ！」といつもよりは強めの口調で笑って言っていたのを覚えている。

　俺たちは、ステージの前で集まっている小規模なファンよりは少し離れた芝生で一息ついた。

　綺麗な芝生は俺たちを優しく迎えてくれて、久しぶりに一息ついたような感覚がした俺は今日をよくよく振り返ってみると朝から一息ついた時間なんてなかったことに気付いた。

　座っていると、芝生は俺たちを誘惑してくる。

　那奈は隣で座っているが、目は眠たそうだ。

　風が少し肌寒いが、俺たちを見下ろす太陽の光は気温以上に暖かさを与えた。

　さっきまで激しい音楽でヘッドバンキングをしていたのとは打って変わった優しい曲調がより俺たちを引きずりこもうとする。

　上を見ると、空の青を邪魔するものは一つもなかった。

　ただ一ついちゃもんをつけるとするなら、主張する太陽は眩しく、それのせいで少し目を細めないといけないということか。

　しかしそれはあくまで俺の意見なのでそれを押し通すつもりはない。

　芝生に体を預けていた俺たちだったが、ふとステージ脇のテントに目をやると凪原先輩がまるで黒装束のようで、しかしかっこいい服装で用意をしていた。

　長い髪の毛をまとめ上げて、後ろにくくっている、

　普通の人がやれば清潔感のなさが露呈するような髪型だが、先輩からはそんなものは微塵も感じられない。

　そんな先輩を見た俺は既にさっきまでの睡魔はなくなっていて、これからのイベントに備えていた。

　いつの間にか起き上がっていた那奈も先輩に気付いたようで、あふれ出るわくわく感を隠そうともしていなかった。

　俺たちを誘っていた穏やかな曲調は、気のせいなのかこれから訪れる何かを迎えるような震える曲調になっていた。

　演奏をしているメンバーが笑顔でテントの方に目配せしているのを見て、勘違いではないと確信することが出来た。

　真昼間の野外ステージには、スポットライトなんてものはいないが、そんなものはなくても袖に見えている先輩に視線は集まっていた。

　上がっていくボルテージを感じていた俺はふと周りを見渡すとさっきまで芝生で休憩していた人たちは立ち上がっていた。

　もちろん視線の先は決まっている。

　スポットライトの代わりに当てられた人々の視線を浴びながら、現在ステージで徐々に場を整えていく音楽がピークを迎えたところで凪原先輩はステージに飛び出した。

　その瞬間俺の周りからは、怒声のような歓声が沸き上がる。

　俺は足の先から頭の先まで順番に鳥肌が立つのを感じた。自然と顔には笑みが零れる。

　先輩は、おそらく演奏していた後輩に笑顔で謝っている様子で、しかし後輩たちからは嫌そうな雰囲気は感じられなかった。

　演奏の終了とともに、袖に引いていく後輩たちと入れ替わりで『brave』のメンバーが準備を始めた。その間、マイクを持った凪原先輩がMCのように場を回していたが、他のメンバーの準備が整ったのを見て、スタンドにマイクを差して袖にギターを取りに行った。

　いつも持っていた真っ黒なギターケースとは違って、対照的なほどに真っ白なギターを持って再び壇上に上がる。

　色がついているのはネックとヘッドくらいで、先輩が来ている真っ黒な衣装とも対照的になっていて、始まってもいないのに虜になっている自分に気付いた。

　そして、右手首に感じた新しい感触に気付いたが俺は特にそれを気にすることもなく、目前に迫る開演を待った。

　始まってからは、一瞬だった。

　おそらくこれは例えではなくて事実なのだろう。

　学生のステージとは思えないほど引き込まれる。

　壇上の先輩に呼応して俺たちは負けじと体を大きく使う。

　もちろん先輩たちもそれには負けようとはしない。

　重そうなベースを器用に操って体を振るベーシスト。

　今よりももっと大きな音を出すように叩くドラマー。

　二人が操るリズムからは決して逸れないで、メロディを奏でるリードギター。

　そして、歌いながらギターを弾く凪原先輩。

　指の先まで、まるで止まっている場所はないようで、マルチタスクをこなしながらたまに手を振っている余裕もある。

　もちろん視線の先の女の子は他の観客よりも飛び跳ねている。

　ワンマンライブではないこのステージでは、熱狂的？なファンである俺たちにはいささか短すぎたようで、終わるすぐに訪れた。

　周りでは終わりを惜しむファンから甲高い歓声が聞こえる。

　割合的にも女性の方が多いのだろう。

　まだ抜けきらない熱を帯びた中、徐々に頭は冷静さを取り戻していて、さっきまでこの世界全てがこの音楽のように見えていたが、通りを歩く人たちは特に耳を傾けることもなくお話をしているのが見えた。

　あくまでこの辺りの人々だけの世界だったのだろう。

　演奏後は、同級生のように見られる人たちが先輩たちの元に高級感はないが大き目の花束を持って行っていたので、そこまで関係の深くなかった俺は特に声をかけることはしなかった。

「行かないの？」

　熱気のせいか、興奮のせいかいつもより顔が赤くなっている彼女は俺の顔を覗き込みながらそう言った。

「いいよ、今は。さすがに部外者だろ」

「そうかなぁ、先輩喜ぶと思うけどなぁ」

「女の子が行けば喜ぶかもよ、行ってこれば？」

「壮真が行かないんだったら私も行かない」

「なんだよそれ」

「すごいよかったね…」

　そう言えば、那奈は凪原先輩の曲を聴くのは初めてらしい。気持ちはよく分かる。

「な、一つ一つフレーズが重いわ」

「勇気も聞いてるかな？」

「聞いてなかったら友達やめるわ」

　いつもはスライムのように、どこからともなく俺たちの前にひょっこり現れて屈託のない笑顔を振り巻いてから、すぐ俺たちの邪魔をしないようにどこかへ駆けていくモンスターみたいな男だが、今回は現れることもなかった。

　さっきまで密集していた観客はどんどんと密度は低下していく。俺たちもその流れに従ってどこに行くでもなく広場を出た。

　少し時間を持て余した俺たちは俺たちの身長に近づいた、もう少しで名前を変えそうな太陽の下を歩いていつもの場所に向かっていた。

　どちらかがそこに行こうと言ったわけじゃない。

　俺はそこに行きたかった。

　那奈はおそらくそれを察して俺に続いた。

　先客は一人、そこから動くことのないそれは調べたところクスノキらしい。

　名前は知っているが、植物というのは素人にとって見た目で判断することは難しい。朝顔、パンジー、小学生で育てたことがあるような花々も、残念ながら俺はそれぞれを確実見分けられる自信もない。パンジーに至っては色の種類まである、まったくもって面倒だ。

　唯一見分けられるのは、薔薇やチューリップなど、外見に圧倒的な特徴を持つ花だけだ。

　木はそれ以上で、どこのどんな木でも同じに見える。

　しかしこのクスノキだけは、なぜかただの植物とは思えなかった。それはクスノキの判別を付けることが出来るようになったというわけではない。おそらくここ以外のクスノキを見かけた時にそれをクスノキだと断定できないだろう。

　まだ一年も通っていないが、一季節が流れるたびに変化する見た目、今は緑がベースだった葉は、もう少しで茶色に埋め尽くされそうになっている。

　なぜか懐かしく感じるこの香りが好きで、ここに来たときは例外なく深呼吸をする。

　今日もそれは変わらなかった。

　身長は俺たちとは違って変化はなさそうで、この身長のペースだと追いつけそうだ。

　相変わらずその場所は他には誰もおらず、まるでその存在が俺たち以外の入室を拒んでいるかのようで、少し嬉しくなった。

　いつもは木の元に設置されたベンチに座り、クスノキを背後にするのだが、今日はなぜか座らずにクスノキを眺めていた。

　那奈もそれは同じで、俺に合わせてくれていたのだろうか。

「すごかったねぇ」

　口を開いた那奈は、同じ言葉だがさっきよりもしみじみと、記憶を確認するように言った。

「な、最後の曲も先輩のオリジナル曲らしいよ。『君だけには好かれたくなかった』だって」

「どういうことなんだろうね。あの歌詞の主人公は女の子のことが好きなんだよね？」

「そうだろうな」

「なんか凄かったのだけど、不思議だったんだよね、あの曲」

　確かに、あの曲は不思議だった。

　もちろん、前のライブの時にはなかった曲だし、初めて聞いた。

　合計で三曲の短いステージ時間の中で、最初の二曲は、あまり音楽に精通していない俺からすると、バンドらしくて、楽器と声が競い合うような曲だった。

　しかし、最後のあの曲は、すごく穏やかだった。

　ゆったりとした曲調なだけではなく、これまで忙しなく動いていた楽器を操る手も、その曲の時はまるで楽器を撫でているかのようだった。

　ドラマーに関しては、腕よりも目を閉じて頭をゆらゆらとしている動きの方が大きかった気がする。

　声の独壇場となったその曲では、凪原先輩はギターをストラップで下げたまま、一度も触らなかった。

　そんな状態だからか、始めての曲にも関わらず鮮明に歌詞が入り込んできた。

　「君だけには、君だけには、君だけには」そんな歌詞で終わった曲。

その続きはなんなのだろうか。おそらく続きなんてない歌詞を妄想に描いていた。

　忘れられたくなかった。

　覚えていてほしかった。

　どれもしっくりとこない。

　もし俺のこの心情を的確に捉える言葉で表すなら、間違いなく『好かれたくなかった』だろう。

　嘘であって嘘ではない。

　それが真理だと自分を納得させた。

　気付けば俺は、那奈のことを友達以上に思ってしまっていた。

　意思の弱い俺は、これ以上の関係にならないために、那奈の行動に託してしまった。

「君だけには…か。なぜかあの主人公は女の子に好かれることを拒んでいるような気がしたんだよね。凪原先輩はなにを考えてあんな深い歌詞を書いたんだろう。どんな恋愛してるんだろうね」

「まぁ、どう考えてもモテる人だからな。それなりの恋愛経験を重ねてきただろうな」

「なんか壮真、しんみりしてる？」

　隣に佇む俺の顔を覗き込む彼女の顔があまりにも近かったので、俺はうつむけていたぱっと顔を上げた。

「ちょっとだけしてたかも。久しぶりになにか引き込まれた感覚を味わったわ」

「確かにね。びっくりしちゃった」

　平静を装っていることがバレないかと心配したがそれは杞憂そうで特に気にしていなさそうだったので安心した。

　俺はその彼女の言葉に返事をしなかったので辺りには静寂が撒き散らされた。

　いつものように、ビル風に踊らされる草木の音は、俺の体内に血液を循環させるその音に負けて俺の耳には入ってこなかった。

9

　連日の早朝の景色。

　いや、昨日は寝坊をしたので起きたのは既に昼だったが。

　昨日で俺たちの模擬店の出店は終わったので、今日と明日は学園祭での予定もなく、もちろん授業もないので実質二連休になっていた。

　普通出店終了後の昨日に打ち上げとかをするのが普通なのだろうが、如何せん前半日程の方が他のサークルと兼部している人の方が多かったので、明日に回されることになった。

　後半日程の模擬店も気になってはいたが、特に親しい友人がいるサークルなどはなかったので行くつもりはなかった。

　否、勇気はもちろん別のサークルで出店していて、来てくれよといっていたので少しだけ顔を出そうか迷っていた。

　しかし十月は授業がない日も何をするでもなくサークル部屋に集まっていたので、久しぶりに何もない二連休を過ごしたかったこともあり、勇気の願いは断っておいた。しかしそんな俺の優雅で優美な休日の予定は、那奈の思い立った一言で覆された。

「…明日、どこか遊びに行かない？」

　血液をぐるぐると循環させるポンプの音が俺の聴覚を奪っていた時でも、彼女のその人子は鮮明に俺の耳を刺激した。同時にさっきよりも速く血液が循環し始めた。

　そういう那奈は、少しだけ俯いて、後ろ手に組んでいる。

　発する言葉に少しだけ迷いが感じられたことと、今の彼女の様子から、いつものようなただ飲みに行くなどということではないことは容易に想像できた。

　既に進展を彼女に委ねていた俺にとって、そう言われると回避することはできず少しだけ返事に時間を使った後、首を縦に振った。

　その後の彼女の顔は見たことないくらいの笑顔で、眩しかった。

　ということがあって、大半の人にとって学園祭の三日目と四日目である今日と明日を使って、一泊の旅行に行くことになった。

　前日の夜に眠れなくなくなるということはこれまでに何回かあったが、たいていそういう日の翌日は一人女友達が少なくなってしまうので、楽しみ以上の不安がより一層俺から睡魔を遠ざけた。

　部屋に差し込む光がどんどんと強くなっていく。

　目を閉じていた俺は、いつもならそろそろ不快感を与えるけたたましい音が俺を迎えるはずなのに、今日はそれとは違う短めの音が俺を迎えた。

　閉じていた目を開けると、いつものよりもしっかりと目が開くのを感じた。やはり気のせいでもなく眠りに落ちることはできなかったのだと気づいた。

　大きな音を出す準備をしている目覚まし時計のアラームを解除し、音の発生源である端末を手に取って画面を付けると、那奈からの起床確認のメッセージが表示されていた。

　なによりも嬉しいそれに返事を返した俺は、安心でどっと睡魔が襲ってきたが、そんなものは相手にせず、ベッドから起き上がって昨日用意したリュックを手に取って部屋を出た。

　リビングに入った俺は、塩分が香る味噌汁の香りを感じた。

　玉ねぎを煮込んだ味噌汁が特徴のうちの味噌汁は、味に甘味が出て俺は好きだ。

　既に両親は仕事に出ており、妹は部活で家にいなかった。

　味噌汁が入った鍋に弱火で火にかけてから、俺がリビングに降りなかったらつけっぱなしで夜を迎えていたテレビの前のソファに座った。

　父親の好みで購入した横長の革製のソファは、高級感はあるがひんやりとするのであまり好きではない。

　一つ一つの言葉に棘があるコメンテーターが並んで、朝から日本の情勢について討論をしている。別にそれぞれの意見は聞いていておもしろい時もあるのだが、この手のコメンテーターは人の話を遮って自分の意見を押し通そうとするので不快だ。

　眼鏡をかけたおばさんがアップで写された時点で俺はチャンネルを変えた。関東周辺だけの地図が表示されている天気予報を一瞥して、今度は全国の天気予報が表示されているチャンネルにした。幸い、目的値の降水確率はよっぽどのことがないと振らないような数字だったので心配することはなさそうだろう。画面の上部に順番に表示される星座占いでも、可も不可もない順位だったので大丈夫そうだ。

　火をかけていることをすっかり忘れていた俺は慌ててソファを立ち上がってキッチンに戻ると、量が少ない味噌汁は既にぐつぐつと煮えていたので火を止めて器に盛った。温め過ぎて器までも熱々になっているそれと、冷蔵庫から取り出したカップのヨーグルトをテーブルに運んで食事を済ませた。

　さっきまでとは違うテーブルに設置された四つの椅子。別に仲が悪いわけではないが、最後に四つの全てが埋められたのはいつのことだろうか。どこも埋まっていないのに、わざわざキッチンから一番遠い位置にある椅子に座ってしまうのは、本能からの行動だった。

　あんまりゆっくりしている時間もないので、シンクに皿を置いて、俺が止めないと動きっぱなしのテレビを消してリビングを出た。

　荷物は既に用意が済んでいるので、外に出れるように身支度を整えて家を出た。基本的に家を出るのは最後の時が多いので、鍵を確認するのは俺の仕事だ。

　連日続く快晴は今日も例外なく続いていて、気温のわりに降り注ぐ日差しは暖かい。

　腕につけた時計が振動する。

　時間を表示していない時計を覗き込むと、二度寝の心配をするメッセージが届いていたので、左手の指を使って適当に返事をして駅に向かった。

　いつもは同じ方向に進む自転車の高校生で溢れるこの道も、土曜日だからがらんとしている。代わりに、リードをぴんぴんまで伸ばされた犬が飼い主を引っ張っている。

　その様子を見て、背中に背負っているリュックではなくてキャリーケースにすれば良かったと後悔した。

　多様な飼い主を引き連れる犬たちは、住宅街を抜けて駅に近づくにつれていなくなっていた。

　右腕の時計をかざして改札を抜ける。この時だけが右につけていることの利点だと思う。

　俺がホームに到着するとともに、それを見計らったかのように到着した電車に乗り込んだ。いつもとは違う方向に向かうのだが、危うく大学の方に向かうホーム階段を登りそうになった。

　電車に乗り込むと、いつものようにその軌跡を追った。いつも見ているのとは違う景色。しかし列車内を監視している車掌さんはいつもと同じように眠そうだ。

　前回は断った旅行。

　既に俺の気持ちさえも彼女に委ねてしまっていた俺は断ることはできなかった。前回断られたことをもう一度言うなんて、相当な覚悟が必要だっただろう。

　了承を伝える首の動きを見た彼女の笑顔を見れば簡単に分かった。

　落ち着くと、朝拭えた不安が再び俺の心を支配する。

　今日を乗り越えても、また明日が来る。

　明日を乗り越えてもまたその次が来る。

　これから俺は終わりのない沼にハマり続けるのだろう。

　一歩踏み出したが最後これからは逃げられない。

　なかなか晴れてくれない自分の心とは対照的に、驚くほど晴れ渡るこの空を見て、少し憎らしく感じた。

　そんな綺麗な景色を、薄汚れたコンクリートの駅舎が遮る。どんどんと落とされていくスピード、人が並んでいる場所に合わせてくるいなくドアを授ける。

　土曜の朝は平日に比べるとがらんとしているが、それは人間の性なのだろうか空いている席にめがけて無言の戦いが始まっていた。早歩きで席を目指す。あくまでも自分は狙ってはいないよと示さんばかりに不可能を察知した瞬間に諦めて吊革に手をかける。

　あまりにも滑稽な姿だ。

　そんな人間の本能の権化とは無縁な存在が最後に入って来た。

いつもより大きめの荷物を持った可憐なそれはやはり俺を惹きつける。

席を左見右見しているが、空いてもいない席を探す滑稽な動作ではない。

そんな俺たちがその後視線を合わせるのは必然で、不安気な表情を一転させて、飼い主の荷物を引き連れて俺の方に近づいてきた。

「いたいたーおはよー！」

「おはよ、朝から元気だな」

「久々の旅行だからねぇ、起きてるか心配だったよ」

「ちゃんと返事してたから起きてるに決まってるだろ」

「返事だけして寝ちゃったりするときもあるじゃん」

　生憎今日は俺の両サイドは空いていなかったのでいつものように隣に座ることは叶わなかったので、立ち上がろうとすると隣の男性がそれを察してくれて詰めてくれたので一人分のスペースを出来た。

　最近ではそれが一般化したコードレスのイヤホンを付けている男性に無言のまま笑顔で会釈をして那奈は隣に座った。これまで引き連れていた荷物を器用に操って自分の股で挟んでいる。

　高校の時に初めてそれを付けて行った時にみんなに驚かれたのが懐かしい。元々あまり音楽に興味はなかったが、そのイヤホンを付けたいがために無理やり好きなアーティストを作っていた。

最近は専ら音楽を聴くことはなかったのだが、凪原先輩のライブに行ってからは先輩のライブ映像を聴くようになっていた。

那奈に会ってから片方だけ外していたイヤホンをしまう。

　今日の行き先は北に向かうらしい。

　特にこれといって行きたい場所のなかった俺は、「どこでもいいよ」という無責任な選択をした。

　しかし、彼女は行きたい場所があったらしいので俺たちの目的地はすぐに決まった。

　股に挟んだキャリーケースとは別に、俺たちの生年が記入されたトートバッグを持つ位は現代に生きている女の子なのに、聞いたこともない寺に行きたいと言う彼女はやはり一筋縄ではいかないなと感じた。

　一番近いターミナル駅で新幹線に乗り換える。

　お昼ご飯という時間ではないが、「新幹線と言えば駅弁でしょ」と語る彼女の言葉に納得したので、一時間しか乗らない新幹線の中で食べる駅弁を買った。

　駅弁を買うには俺たちは少々似すぎていたようで、俺が狙っていたそぼろ弁当を買う彼女を見て、同じものを買うのは気が引けたので渋々焼売弁当にした。

　時間も相まって、新幹線内で食べ切ることはできなかった。

　ご飯を食べていたら終わった新幹線の旅の後は、再びローカル線に乗り換える。

　いくら新幹線の止まる駅と言えど、高くそびえるビルなんてものはなく、高めに設置されているホームの柵の奥に見えるのは大きくそびえる山々と気休めに建設された白い鳥のマークのスーパーだけだった。

　木製のベンチの頭上に設置された電光掲示板には「ワンマンカー」と表示されていて、俺たちはその意味を考えたあったが、それよりもその隣に表示される「一両編成」という表示に驚きを隠せなかった。

「一両は編成されてないやん」

　わざとらしく関西弁を使った那奈だったが、気のせいか純潔の関東人とは違う。

　違和感のないその台詞に突っ込むことを忘れた俺だったが、何も反応がない那奈は照れて俺の肩を叩いた。

　半信半疑だった俺たちの前に一両だけの電車が本当に到着した。

　いつものように人の少ないドアを目的に並んでいると、俺たちの前のドアは開いてくれなかった。少しだけ待っていると、右側に並んだ人たちが順番に入っていく。

その様子に気付いた俺たちは顔を見合わせながら笑って、その列に並んだ。

ホームと入り口は子供だと入るのが大変なくらいの段差があったので、那奈のキャリーケースを代わりに持って車内に入る。

一泊分の用意は、さすがに運動をしていない俺でも軽々と持ち上げることが出来たが、そんな俺を彼女は囃し立てていた。

俺たちは入り口から一番遠い座席に座る。

座席もちらほらと半分くらいは埋まってきているが、まだ動き出す様子がない。なぜそんなことが分かるかというと、ホームではさっきまで運転していた車掌さんとこれから運転するとみられる車掌さんが話しているからだ。

俺は背負っていたリュックを足元に置いてサイドポケットに入れていた水を一口飲む。

使う電車が限られているのか、入ってくるおじいさんやおばあさんは皆顔見知りのようだった。

そんな光景の中では俺たちは少し浮いているようだったが、彼女はもう少しで着く目的地にわくわくしているようでそんなことは気にしてなさそうだ。

「なんでこんな田舎に行きたかったんだ？」

「んー、特に理由はない！」

「そんなわけあるかよ」

「強いて言うなら芋煮が食べたい」

「芋煮…？」

「着いてからのお楽しみだよ！」

「さっき駅弁食べたばっかりなんだけどな」

　聞いたこともない場所に行くのに、俺はその場所を全く調べていなかったため、これから何をするのか見当もつかなかった。

　寺ということは聞いていたのと、歩きやすい服装と指定されていたので、俺はいつもより動きやすいスニーカーを履いてきた。

　那奈も学校とは雰囲気が一転して、ジーンズにスニーカーというシンプルな服装をしている。セピア色のキャップが際立っていて、全くだらしない服装ではない。

　“芋煮”という食べ物は聞いたことがなかったが、別に芋は嫌いではないので、これから来る食事のために腹を空かせるために、鞄に忍ばせていたお菓子を食べることは諦めた。

　ようやく電車がホームを離れる。

　日頃の生活ではホームで電車を待つ五分十分が長く煩わしいのだが、そんな逸る気持ちを周りの緑がなだめてくれたのか、そんな感情にはならない。

　ゆっくりと離れていく駅のホームを見ていると、電光掲示板が目に入り、次に発車するこの車両と同じ方面の電車は今から約九十分後だった。

　同じ国でもまるで別世界のような時が流れるこの場所は、今までの生活を否定する様で楽しくなった。

　目的の駅に着いた俺たちはホームに降り立つ。

　観光地なのかここで降りる人は割と多かったが、それでも一両しかない列車なので数はかがしれている。

　俺たちを迎える木造の駅舎は丁寧に整えられていて、古さを感じるが壊れそうな気配は全くない。

　改札の代わりをした駅員さんに切符を渡してホームを出た。

　駅舎内にはロッカーがたくさん設置されていたので、彼女のキャリーケースを入れた。しかしここは観光地。キャリーケースを入れる人が多いからかサイズの大きいロッカーの下段は既に埋まっていたので、代わりに俺が上段のロッカーに入れようとした。

　すると、そんな様子を見ていた駅員さんが「駅の管理室で預かりましょうか」と言ってくれたので、図々しいながらそれに甘えることにした。

　その場でキャリーケースを預けると、丁寧にそれを管理室まで持って行ってくれた。

「嬉しいね」

　そういう那奈は、上段に入れる作業がなくなったという喜びでもなく、ロッカーのお金を払わなくてもよくなったことでもない、人の温かみを受けたことにとても喜んでいた。

　駅舎とホームを繋ぐ改札は長い廊下のようになっていて、その廊下のような通路から横にそれるとロッカーが設置されている場所に繋がっていた。

　ロッカーでの用事がなくなった俺たちは遂にホームから見えていた駅舎に入ることが出来たのだが、仲にはベンチが複数置いてあって、老人から子供まで、トラッキング姿の人たちが座って休憩していた。

　人が座っているのはいつもよく見るが、その人たちは大抵イヤホンをつけ、端末に集中して自分の世界に入っているため、同じ空間にいるように見えてそうではない。

　しかし、今ここで休憩している人たちはちゃんと同じ空間を楽しんでいる。

　イヤホンなんて知らないようなこの人たちは、笑顔でお話をしている。

　そんな環を那奈は羨ましそうに眺めていたので、帰りにここで休憩しようと思った。

「着いたー！」

「着いたけど、ここが行きたかったところなのか？」

「そうだよ。立石寺」

「ここ山寺って書いてるぞ？」

「馬鹿にしてるの？」

「いや、ちょっと間違えたのかなって」

「そんなわけないでしょ！」

　両手が開いた那奈は、身軽そうだ。

「あの山の上にあるんだ。もちろん寺にも興味があるんだけど、決め手はこれなんだ」

　駅を出てすぐ左に鎮座している格式の高そうなそのお店の看板には、茶碗に入った味噌汁のような写真が載せられている。

「俺味噌汁好きなこと言ってたっけ？俺が好きなのは母さんの味噌汁なんだけどな」

「昼ごはん食べるときいつも味噌汁買ってるじゃん。ってかそうじゃなくて、これ味噌汁じゃないから！」

　そう言われてみると、味噌汁というよりは豚汁に近くて具材がゴロゴロ入っている。

「美味しそうだけど、具材がいっぱい入った豚汁か？」

「だから違うって！芋煮っていうの！」

「あぁ、なんか聞いたことある」

「リアクション薄いよー。山形県が本場なんだよ！」

「本場って言われてもまず本場じゃないものも食べたことないからな」

　確かに写真には大き目の芋が入っている

　見る見る膨らんでいくその頬は風船のようでもうすぐ限界を迎えてはち切れそうだ。

「美味しさに仰天するなよ！」

「そんなに美味しいの？」

「私も食べたことない！」

　呆れすぎてモノが言えないとはこのことで、自然と出た苦笑を隠さず、俺は彼女を置いて山の方面に向かって歩き出した。

　真昼間の太陽の中、山の間を流れる風が気持ちよくて涼しい。

　誇張しすぎな程のアーチを描く短い橋を歩いて小川を越える。

　眼下を流れる小川は太陽の光を反射して星のように光っている。

　反射するのは水面だけではなくて、そこを泳ぐ小さな魚たちにも反射している。

「川の上だとちょっと風強いね」

「確かに」

　キャップから出ている短い髪は強めの風でなびいている。

　彼女の奥に広がる山と川の景色はいつもの日常を忘れさせる。いつもとは違う彼女を見ていると少しだけ罪悪感がした。

　赤い手すりの橋を渡りきると、味噌ではない優しい甘辛い匂いが漂ってくる。橋のすぐそばにある食堂から小さく生えた煙突からは匂いの発生源なのか白い煙が上がっている。

「決めた、私ここにする」

「すごいいい匂いだな、賛成する」

「でも今はだめ！今はお腹一杯になったらしんどいもん」

　駅を出た時点で”参詣道”と書かれた看板か芋煮のポスター位しかない場所だったので、俺はこれから山に登るのだということは薄々どころかほぼ確信していたが、今の彼女の様子からするとやはりそうらしい。

「だから帰りにここに寄ろう？」

「もう決めちゃってもいいのか？」

「だってあのおばちゃん凄く優しそうなんだもん！多分ここよりもいいところはないよ」

「まぁ俺はいいんだけど」

　食事の場所を見つけた彼女は嬉しそうで、重い荷物もなくなったからか心なしかスキップしているように見える。

　しかし俺の心配はやはり杞憂ではなかったようで、次々と現れる芋煮のお店のせいで最初の決定は揺らいでいるようだった。

「すごい一杯お店ある…どうしよう」

　もう何を言っても彼女次第なので、俺は何も言わずに辺りをきょろきょろしながらお店を物色する彼女を見ながら微笑んだ。

　お食事処やお土産の店が並んだ通りを少し歩くと、目的地を示す矢印は急に左斜め上を指していた。

　それは“参詣道”としてアピールするにはあまりにも整備がされていない階段で、両側面に生い茂った名前も知らない長い草が階段に侵食するように生えている。

　方向を指す看板と、上から降りてくるトラッキング姿のおじさんがいなかったらおそらく通ることのないような道だったが、彼女は待ってましたと言わんばかりに階段を一段飛ばしで登っていく。

「そんなに飛ばしたら体力持たないぞ」

　俺の言葉が聞こえなかったのか、それとも余計なお世話だと思ったのかその言葉には返事もせず、階段を半分くらいまで登ったあたりですれ違うおじさんに挨拶をして俺の方を見た。

　俺は、後先を考える性格だからそんな子供みたいな真似はしない。

　後々になって、俺の方が先にへばるなんてみっともないところはいくら友達と言えども女の子には見せられないのでここは温存しておくことにした。

　彼女同様にすれ違うおじさんに挨拶を済ませると、さっきは少し距離があって見えなかった顔の詳細を見ることが出来た。

　年齢は七十歳くらいだろうか、この辺りの年齢になると推定も難しくなるが、穏やかな性格とゆっくりとしたスピードから少し年齢は重ねているのだと感じた。

　目尻に皴を集めた笑顔を向けながら、「こんにちは、ありがとうね」となぜか俺を言われた俺は少しどころかとても嬉しくなって、すぐそこにいる那奈のところまでは少しだけ駆け足で近寄った。

「ここの階段千段あるらしいよ、長いねぇ」

「ここだけでか？さすがにそんなにないだろ」

「違うよ！一番上の本堂までだよ！」

「千段って多いのか？」

「確かに言われてみると相場がわからない」

　何を数えているのか、両手の指を折ったり曲げたりして何かを数えている。そして、不器用に開いた不規則の指が立っている両手を俺に向けながら、「最寄りの駅の階段は三十二段！」と言っていたので、それはその数を指しているらしい。

「ってことはその階段を三十回くらい登ることになるな」

「余裕じゃない？」

「同じ階段三十回も登ったことないしな」

「やっぱりわからないね」

　さっきまでの彼女にとっては規則的な指は既に解かれていて、両手を腹に当ててけらけらと笑っている。

　その階段を下りてくる人も、上がってくる人もいなかったので俺たちは二列になって階段を登り切った。

　登りきると、さっきまでとは違って木が生い茂って太陽の陽が差し込まない山に入り込んだ。

　そこにもやはり参詣道を指す看板は迷わない程度に配置されていて、俺たちはその看板に従って道なりを進んだ。

　舗装された道の脇には時々休憩所とお食事処を兼ねた茶店が配置されていた。

　畳が敷かれた小さな休憩所では、茶碗をつつくおばあさんが店員らしきおばあさんとお話をしている。

　店の前を通る俺たちに気付いた二人のおばあさんは会話を中断して会釈をしてくれたので、俺たちも会釈を返した。那奈に至っては追加で特段の笑顔を追加していた。

「玉こんがすごい美味しそうだった」

「あのおばあちゃんたちは食べれないぞ」

「ばか、帰り食べよ」

「玉こんくらい今食べてもいいんじゃない？」

「確かに！けどそれはなんか悪い気がするからやっぱり後でにする」

　土曜なのに人があまり多くないのは、大型連休でもないからだろうか。

　基本的に出会うのは高齢の人だった。

　ところどころ木をすり抜けて差し込む日差しのおかげで薄暗いわけではないが、少し肌寒い。

　階段なんてものが見当たらないくらいに、山の中でも平坦な道を二人で歩いていた。

　もちろん参詣道の看板に従っているので間違っているわけではないだろうが、山を登っている感覚はないため不安になる。

　小川を越えるために設置された小さな石橋を渡る。

　道の脇には『松尾芭蕉～』っていうことが書かれていたがあまり興味はなかったのでその石像の存在だけ頭に入れておくことにした。

那奈は、そんな一つ一つの出来事に思い出として蓄えようとしているような気がした。

芭蕉像とその隣に並ぶ像をまじまじと見ながら端末を取り出して写真を撮っていた。

まだ那奈がここに来たかった理由がしっかりとは聞いていないが、もしかすると実は芭蕉が好きなのかもしれない。

「なんか人が少し増えてきたか？」

「確かに、なんでだろう」

「また休憩所がある」

　さっきよりは陽が入るようになった広場のような場所にはちらほらと人がいた。

　山に入ってからは二人のおばあさんしか出会うことはなかったので、急に現れた人々に少し安堵した。

「壮真見てあれ」

　そういう那奈は休憩所とは反対側にある看板のようなものを指さしている。

　その看板はさっきまでの参詣道を示す木製の看板ではなくて、飲食店の入口に置いてあるようなプラスチックで出来た看板だった。

「『参詣道入口　拝観料…』って書いてる」

「やっと入り口に着いたのか？俺たち」

「さっきの階段はノーカウントらしいね」

「入口に辿り着くのでもだいぶ長かったな」

　看板の横には木製の門がそびえていて、その下では宝くじ売り場のようなプラスチックで仕切られた受付のおばあさんが拝観の切符を販売していた。

　俺たちは拝観料を支払って門の内側に足を踏み入れると、そこからは緩やかな階段が続いていてようやくスタートラインに立つことが出来た。

「少しだけ暑くなってきたね」

「確かにな、これからは階段だからもっと暑くなるかも」

「汗かくぞー！」

「女の子とは思えない台詞だな」

「暑さには強いんで」

　いつか聞いた覚えのある台詞を吐いて彼女は俺の前を歩いていく。

　目の前の階段は階段と言えば階段だが、高さは通常よりも低く、一つ一つの段が広かったのでそこまで体力を使うことはなかった。

　毎日運動をしているわけではない俺たちも、さすがに年齢のバックアップもあってか、おじいさんやおばあさんを追い越していきながら順調なスピードで登っていった。

　途中雑種の犬を見かけたが、四本の足を器用に扱いながら階段を下りてきた。

「わんちゃんも登るんだね」

「猫も登るかな？」

「猫ちゃんは気ままだから逃げちゃうんでしょー」

　息はまだまだ上がっていない俺たちはすれ違うわんちゃんに手を振って、それに率いられるおじいさんに会釈をした。

　なだらかな階段は徐々に勾配が急になってきて、幅が狭くなり、段も高くなってきた。

　階段自体も狭くなってきたので、那奈を先頭に一列になっていた。

「うわー見てあれ、すごい」

「なんだあれ」

「すごい穴空いてるね」

　階段から少し逸れた場所には無数の穴があいた大きな岩がそびえていた。

「『巌にしみ入る』だねぇ…」

「どういうこと？」

「なんにもない！あ、もう木陰を抜けれそうだよ！」

　袖をまくり上げた綺麗な腕が指している方向は、太陽を遮る木がなくなっていて、日が差し込んでいた。

　どこまで上がっているのだろうか、木立のせいで絶景なんてものは遮られているので俺たちはそれを目的に歩みを進めた。

　那奈もさっきよりスピードが上がっている気がする。

　太陽の元に出た俺は、その光を浴びて大きく背伸びした後、後方を眺めた。

　遠方に広がる山々は光を浴びて綺麗な緑を発色している。

高さは十分ではなかったので、麓の様子は木がまだ邪魔になって見えないが、まだまだ続くこの階段の上からもしかすると覗くことができるかもしれない。

「綺麗―！けど木が邪魔だなぁ」

　女の子にしては十分な高さの那奈だが、麓を見るためにぴょんぴょんと跳ねている。

　広場になっているので、階段ほどではないがさすがに安心して見てられなかった俺は那奈を静止した。

「休憩しようか」

「確かにね、ここだと暖かいし日向ぼっこみたいだね」

　駅を出てから一度も足を止めることはなかったので、さすがに俺たちは休憩することにした。

　広場にある木製のベンチに腰をかける。

　座り心地は良くはないが、そんなことは関係なく、その椅子は俺たちの疲れを癒してくれる。

「ふぁー、疲れたー」

「疲れたんだったらもっと早く言えよ」

「疲れてないよー、まだまだ歩けるから」

　那奈はトートバッグから取り出した小さいタオルで額の汗を拭いていた。

　俺は新幹線に乗る前に買った飲料が残っていたのでそれを飲み干して、広場に設置された自動販売機でスポーツドリンクを補充した。

　お釣りを待っているくらいで、俺の方を見ながら目をキラキラとさせる那奈はさながら子供のようだったので、「どれがいいんでちゅか」と言うと「これがいいでちゅ」と子供らしからぬ緑茶を選択する那奈に笑いを堪えることが出来なかった。

　出てきたペットボトルを嬉しそうに抱える那奈を見ているとなぜか幸せな気分になった。

「そういえば今日の宿の…」

「その話は後！ちゃんと決めてあるから気にしないで！」

　急に親と子が逆転した俺たちは那奈のその圧に負けて大人しく従うことにした。

　今日の朝まで詳しい行先も知らなかった俺は、「宿は気にしないで」という那奈に甘えることにしていた。さすがに金額までは任せることは男の面目が保てないので　何があってもいいように念のために財布には余分に入れてきている。

　普段は専らカードか電子マネーなので、最近はあまり財布に大金が入っていることはないのでそわそわする。

　那奈は宿をなぜか隠したがるので、それ以上は詮索しなかった。俺たちはさっきのベンチに戻って休憩の続きを満喫する。

　風は吹いていないので、季節にしては少し暖かいのだろう。今の俺たちは少し体が温まっているので少し暑い。

　座りながら、本当だったら登る前にするのが一番良かったストレッチをすると、いつも使っていない筋肉が伸ばされて切れそうな感覚がした。しかし、それは今の俺にとってはとても気持ちのいいものだったので部活の時を思い出していろんな種類の伸ばし方をしていた。既に片鱗が見えている明日以降の筋肉痛が恐ろしい。

　そんな俺とは対照的に那奈は足を丁寧に閉じたままさっき与えられたペットボトルを兆手で持って膝の上に置いていた。

　いつもなら俺のしていることの真似でもするか突っかかってくるかの二択なのにそうではない那奈に少し疑問を持ってはいたがその程度だった。

「そういえばさ」

　さっきまでとは顔つきが変わった那奈は何か言いたげだった。

「どうした？」

　それ以上続きを中々発しなかったので、待ちかねた俺はそう言った。

「…いや、大したことじゃないんだけどね！宿ちゃんと取れてるかなぁ。後で確認の電話でもしようかな」

「あぁ…。大丈夫だろ。最悪俺外でも寝れるタイプだから」

「私がそんなタイプじゃないよ！」

　笑顔を見せる那奈はいつものように笑っているように見えてよく見ると少しだけ曇っているような気がした。

　その後、休憩を満喫した俺たちは階段を踏破することに成功したが、特に那奈がここに来たがっていた理由は分からなかった。

　帰り路の途中で、橋の近くにある食堂で芋煮を食べている時の那奈を見ているとあまりにも幸せそうだったので、おそらくそれが食べたかったついでなのだろう。

　10

　電車を降りるとそこはさっきまでの田舎町とは違って、県でも最大のターミナル駅だった。

　俺はてっきり旅館のような場所を想像していたので、まさかこんな都会に連れてこられるとは思っていなくて驚いた。

「旅館とかだと思ってたけどそうじゃないんだな」

「確かに旅館もよかったね、浴衣きたかったかも」

　駅を出た俺たちは駅構内を迷いなく進む那奈の案内の元、宿泊するホテルに向かった。

　どれくらい歩くのだろうかと考えていると、改札を出ると目の前にある大きなホテルの敷地を跨ごうとする那奈はおそらくおふざけではないのだとは分かったけど、受け入れられなかった俺は一旦彼女の肩を持って引き留めた。

「おっとっと、どうしたの？」

「どうしたのじゃないでしょ？」

「ここが止まる場所だよ！」

「どんだけいいホテル取ってるんだよ、お偉いさんとかが泊まるホテルだろこれ」

「違うよ！スイートルームとかじゃないから！」

「そうじゃなくても高級だろ！」

「良いものに触れよう」

　相変わらず大人びた見た目からは想像が出来ないほど馬鹿な答えが返ってくるので、俺は諦めて彼女について敷地を跨ぐことにした。

　円形のロータリーのようになっているそこをホテルの入口までぐるっと回っていると、入り口から近づいてきた社会人の鎧とは違う手の込んだ鎧を着た男性がキャリーケースを代わりに持ってくれた。

　一泊分しか入っていないので、特段重いわけではないがせっかくの車輪がついているキャリーケースを転がさずに片手で抱えて運んでいるのを見て、那奈は「転がしてくださいー」とお願いするように言っていたの笑顔で静止して入口まで運んでくれた。

　自動ドアの前までくると、そこはコンクリートでもなくなったのでようやくキャリーケースを置いてくれたのを見て、「良かったぁ」と何に対して言っているのかわからない言葉を言っていた。

　もちろん中に入るとさらに豪華で、正直動きやすい服装をした俺と那奈は場違いだった。

　那奈はそんなことは気にもせず、受付で待つ男性の元に向かった。

　汚れ一つない白い手袋をはめて整髪料でこれでもかと髪を整えた男性からカードを受け取った那奈は満面の笑みをしている。

「こんなとこ初めてだよ」

「本当かよ、だいぶ慣れてるような感じするけど」

「そんなことないよ！ちょっと恥ずかしい、今日こんな服だし」

　さすがに那奈にも羞恥心というモノはあるようで、別におかしな服装をしているわけではないのだがさすがにこういった場所に訪れるための服装ではないことを理解はしているようだった。

「こういうところなら先に言っといてくれよ」

「言ったら面白くないじゃん」

「俺たちが面白くなくても他の人に面白がられるだろう」

「上手いねそれ！」

　那奈のキャリーケースはこれまた別の男性が先に部屋に持って行ってくれているようで、俺たちはエレベーターを準備して待っていてくれている男性に案内されてエレベーターに乗った。

　いつもはエレベーターの中なんて観察しないのに、こういう場所に来ると、そんな何気ない場所にも目が行ってしまうもので、実際に鏡も一つの汚れもなく磨かれていて、ドア以外の三方向に木製のてすりが設置されている。

　一番の特異点は階を指定するボタンを陣取っている帽子を被った女性がいることで、それのせいで俺たちは階を選択することもできなかった。

　いつの間に俺たちの部屋の階を知ったのか、八階で止まったので俺たちはエレベーターを出た。

　「ごゆっくりお過ごしくださいませ」という背後からの声に俺たちは振り返ってお辞儀をした。

「どんだけだよ」

「確かに、これはすごい」

　高級なカーペットを汚さないように歩く俺たちは、高貴の空間だからか二人ともひそひそと話した。

　部屋の前に到着すると、白を基調とした、金色のドアノブや装飾が施されたドアが俺たちを迎えた。申し訳程度につけられた鍵穴を使用することはなく、那奈は受付からずっと大事に握っていたカードをドアノブに飾し鍵を開けた。

　ドアを開けると中は廊下と同じカーペットが広がっていて、大きな部屋の右半分がダイニングキッチン、左がソファと大画面のテレビが置かれたリビングのような形になっていた。ゆったりとした家具の配置とは対照的に、壁や棚の上には価値を証明する名前の知らない絵画や置物が所狭しと並べられている。

　そして奥にはラウンジが広がっていて、窓の奥にはビルから抜き出た高い電波塔が立っている。

「まじかこれ」

「確かに、これはすごい」

「やりすぎだよな」

「やりすぎたかも」

「これ社長さんとかが泊まるところじゃない？」

「いや、そんなところじゃ私の経済力じゃ予約取れないに決まってるじゃない」

「あんな家に住んでてよく言うよ」

「お金持ってるのは私じゃなくて親だからね」

「ってかいくらだったんだよ、多分足りない気がするけど」

「じゃん」

　さっきまで部屋を見渡すために使っていた目は既に自分の鞄に向けて中から財布を取り出す。見たことのない少し不吉さを感じる黒いカードを取り出してそれを俺に向けてかざす。

　呆れて身分の差を感じさせられた俺は、天は人の上に人を作らずなんていう戯言を吐いたその男を財布の中から七人取り出してそんなことはないということも含めて那奈に突きつけた。

「いらないよ！これは違うから！」

「何が違うんだ、足りない分は今ないから勘弁してくれ」

「これはお母さんが持たせてくれただけだから！」

「それは那奈に渡されただけで俺に持たせてくれたわけではないの」

　俺はそこまで言って、二人で座るには大きすぎるロングソファの質感を触って確認しながら、どしんと体重を委ねたかったのを我慢してゆっくりと座った。

　高級感が出るからと言って置かれた家の革製のソファとは違う、クッション型のソファは、この空間に置かれているから高級感が増して見える。目先の家具でそんなことをアピールする必要なんてないということだ。

　気付けば、空調は既に整えられていて少し暖かい。

「お母さんは私じゃなくて壮真に使ってってこれを渡してくれたんだよ」

　ソファの横まで移動した那奈はさっきまでの力任せに返そうとするのではなく、悟りかけるような声でそう言った。

　あまりの代わり具合に俺は那奈のことを見詰めてしまう。

　俯いているから大きな目から飛び出る長い睫毛がよく見える。

「どういうことだよ」

「私友達は多いけど親友っていうのものがいなかったんだよね。お金持ちってだけで周りから一歩引かれてから。だから前家まで送ってくれたのを見てたお母さんはそれが嬉しかったんだよ」

「いや、それくらい…」

「それくらいのこともなかったからねぇ。大学はうちの家のことを知らない人ばかりだから全然大丈夫なんだけど、学生の頃は家の近所の人が多かったからね、高校は少し遠めのとこに行ったんだけどなぜか知られてた」

　那奈はそう言ってさっき渡したお金を俺の前に置く。

　天は人の上に人を作らず、俺は那奈のことをお金という一面だけで俺よりも上の人だと判断したが、実際那奈からするとそういう悩みがないという人の方が自分よりも上の人だと考えているのかもしれない。

「それとこれとは別だろ」

「別じゃないんですー、せっかくお母さんがいいって言ってるんだからもらっといてください！」

　そう言うと那奈は再び部屋の観察を始めた。俺もこれ以上話しても無駄だということがわかったので、少し早めに言い返すのをやめたが、テーブルに置かれたお金には触れなかった。

　那奈は、綺麗なカウンターキッチンの冷蔵庫を開けてみたり、いくつかある壁のスイッチを適当に押してみたり、こういうところに慣れているわけではなさそうで安心した。

　ソファで少し休息が取れた俺は、後方に広がる窓を開けて外に出た。

　窓外はウッドデッキのラウンジになっていて、大き目の壺のような鉢に入った植物が角に設置されている。既に外は暗くなっていて、部屋の中から見えた電波塔はガラスのフィルターを介さずに見ることが出来た。さっきとは違い休息の意味ではなく、背もたれがだいぶ下がったほぼ仰向け状態になるウッドチェアに腰をかける。

　ひんやりとする空気のせいで下がったそれは冷たく、追い打ちをかけるかのように風が吹いている。

「さすがに寒くない？景色はきれいだけどさ」

　いつの間にか俺の横に位置していた彼女は中腰になって話しかける。しかしその態勢がきついとわかったのか、長めに作られたチェアの足部分に座した。

「お腹すいた」

「確かに」

　明るい光を放つ電波塔とぼんやりと光る都会の景色を見ているといい雰囲気になりそうだったのを感じた俺はわざとそれを壊すようなことを言った。

　彼女は左手につけられた金属の腕時計を見ている。

「とっておきのところを用意したから」

　そう言う彼女は今日一番の笑顔をこちらに向けたが、なぜかそれが強がりからの笑顔だと感じたのは気のせいだろうか

12

　穏やかなクラシックが流れる建物に本当にいたのかというくらい、この辺りは騒がしく、人々の声が交じり合って一つの騒音になっている

　大きな道からそれた裏道にはパンパンで締まり切っていない青色のごみバケツが見える。

「ご飯はあのホテルじゃないんだな」

「部屋は個室だからいいけど、さすがにあんなお洒落なところでは食べられないよー」

「だからってさすがにここは落差ありすぎないか？」

「いいじゃーん！焼き鳥がっつこうよ！」

「最高だな」

　串から外すなんて野暮なことはしない那奈は、がっついた直後はいつも口元が汚れている。

　ホテルから見えた電波塔のすぐ下は、ホテルで感じた壮大で高貴なモノとは違って、現実は汚らしくて騒がしいおじさんの町だった。

「あ、あそこにしようよ」

　その中では割ときれいなお店で、中をうかがうと盛況はしているが空いてる席がないわけではなさそうだったので俺たちは引き戸を開けて入った。

　この季節なのに店内は熱気と煙でむんっとしていて、那奈はすごい顔で俺のことを見ていた。

「あつい」

「これが下町の居酒屋よ」

「そう聞くとなんかいいね！」

　案内された席で、勢いで飲みたくなったビールに那奈は賛同したので同じものを二つ頼んだ。

　おしぼりなんかには目もくれず、メニューにかぶりついてみている。芋煮を食べてからは少し時間が経っていて、夕ご飯時はとっくに過ぎているのでよほどお腹がすいているらしい。

　かごに入れられた枝豆と共に二杯のグラスがテーブルに置かれる。その拍子で飲み口から少しあふれたビールがグラスを伝って机に零れる。

　那奈が注文し終わったので、俺たちはいつもと違うドリンクで乾杯をした。

　いつもよりも高く長いうなり声がお互いに漏れる。

「あー美味しくない！けどなんか美味しい！」

「確かに今日はいつもよりも美味しいかも」

「もしかしてこの熱気もわざとかな」

「確かにこの暑さだとビールが進む気持ちも分かるな」

「この調子だといつの間にか美味しく飲めるようになってるかな」

　控えめに泡髭を付けた那奈は笑いながらそう言う。

「お腹すいたなぁーまだかなぁ。鳥じゃないけどタンの串が有名らしいよ」

「うわっ美味そう」

　料理が来るまでの穴埋めでお通しの枝豆を頬張る。盛られた枝豆はいつの間にか量を減らしている。

「そういえばさ」

「ん？どうしたの」

「なんでここに来ようとしたんだ？」

「あぁ…芋煮が食べたかったんだよね！前にテレビでやってて」

「確かに美味かったけど、普通ディズニーランドとかさ」

「それこそ別に男友達と行く場所じゃないでしょ」